新潟県埋蔵文化財調査報告書第83集

上新バイパス関係発掘調査報告書 Ⅲ

萩清水遺跡（はぎしみず）

三本木新田B遺跡（さんぼんぎしんでんB）

1997

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

上新バイパス関係発掘調査報告書 Ⅲ

萩清水遺跡（はぎしみず）

三本木新田B遺跡（さんぼんぎしんでん）

1997

新潟県教育委員会

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

上新バイパスは、国道18号の上越市と新井市の市街部の慢性的な交通渋滞と冬期間の降雪による交通障害を解消するため建設された全長24.6kmの大規模バイパスです。本バイパスの建設にともない行われた発掘調査によって、縄文時代をはじめ、それまで遺跡の存在すら知られていなかった奈良・平安時代の遺跡が調査され、当地のみならず、越後の古代史の大きな展望を開く成果が得られました。

本書は上新バイパス建設にかかわる発掘調査のうち、昭和60年度と61年度に調査された新井市の萩清水遺跡と三本木新田Ｂ遺跡の発掘調査報告書です。

萩清水遺跡では縄文時代前期の陥穴状土坑列のほか、前期後葉の住居跡が１基検出されました。三本木新田Ｂ遺跡では縄文時代前期中葉の住居跡が検出され、そこから出土した有尾式土器は当時の県内ではあまり類例を見ないものであり、当該期の研究に貴重な資料を提供しました。

この報告書が縄文時代に限らず、歴史を解明するための資料として広く活用され、広い意味での文化財に対する理解と認識を深める契機となれば幸いであります。

最後に、本書の刊行までの間、多大なご協力とご援助を賜った地元の人々、ならびに新井市教育委員会をはじめ、高田工事事務所に対して厚く御礼申し上げます。

平成９年３月31日

新潟県教育委員会
教育長　平　野　清　明

例　　言

1．本報告書は新潟県新井市三本木新田字萩清水９－１他に所在する萩清水遺跡、同市三本木新田字長峯559他に所在する三本木新田Ｂ遺跡の発掘調査記録である。発掘調査は一般国道18号上新バイパスの建設に伴い、新潟県が建設省から受託して実施したものである。

2．発掘調査は新潟県教育委員会（以下､「県教委」とする。）が主体となり、昭和61年度および昭和62年度に実施した。

3．整理および報告書にかかる作業は、財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下､「埋文事業団」とする。）が県教委の委託を受けて平成８年度に実施した。

4．本書の作成は寺崎裕助（埋文事業団調査課第二係長)、立木（土橋）由理子（同文化財調査員）が当たった。執筆分担は第Ⅰ章１・２Ａ、第Ⅲ章４Ａ・５Ｂ（１)、第Ⅳ章４Ａ・５Ｂ（１）が寺崎、ほかは立木（土橋）である。編集は立木（土橋）が担当した。

5．出土遺物と調査にかかる資料はすべて県教委が保管・管理している。遺物の註記記号は萩清水遺跡を「萩」、三本木新田Ｂ遺跡を「三本Ｂ」として出土地点・層位等を併記した。

6．各遺跡における遺物番号は土器・石器ごとに通し番号を付した。図版と写真図版の番号は一致している。

7．各遺跡の遺構番号は調査現場で付されたものをそのまま使用した。

8．遺構図版のエレベーション図は調査現場で作成された平面図と、そこに記入されている標高値から作成したものである。

9．挿図・遺構図版の平面図の方位はすべて磁北を表す。

10．引用・参考文献は著者と発行年（西暦）を文中に（　）で示し、巻末に一括して掲載した。

11．萩清水遺跡の新井市調査分に関して、新井市教育委員会高橋勉氏および日本考古学協会員小島正巳氏より資料の提供を受けたほか、多大なご教示・ご助言を賜った。

12．遺跡の層序については早津賢二氏よりご教示を賜った。

13．国家座標については博田純氏よりご教示を賜った。

14．写真図版33の萩清水遺跡表面採集品は清水作次郎氏の所有物であり、氏のご厚意により、ここに掲載させていただいた。

15．発掘調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から多大なご教示・ご協力を得た。厚く御礼申し上げる。(敬称略、五十音順)

小熊博史　小島正巳　佐藤雅一　鈴木徳雄　関根慎二　高橋勉　谷藤保彦
野村忠司　博田　純　早津賢二　綿田弘実

目　　次

第Ⅰ章　序　説 …… 1
1．調査に至る経緯 …… 1
2．調査と整理 …… 2
A．発掘調査 …… 2
(1) 調査経過 …… 2
(2) 調査体制 …… 3
B．整理作業 …… 4
(1) 整理経過 …… 4
(2) 整理体制 …… 4

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境 …… 5
1．周辺の地形と地質 …… 5
2．周辺の遺跡 …… 6
3．新潟県内の縄文時代前期中葉・後葉の遺跡分布 …… 6
A．縄文時代前期中葉の遺跡分布 …… 6
B．縄文時代前期後葉の遺跡分布 …… 8

第Ⅲ章　萩清水遺跡 …… 10
1．調査の概要 …… 10
A．グリッドの設定 …… 10
B．記録の方法 …… 10
2．基本層序 …… 10
3．遺　　構 …… 11
A．竪穴住居 …… 12
B．陥穴状土坑 …… 12
C．その他の遺構 …… 13
(1) 焼土遺構 …… 13
(2) 土坑・ピット …… 14
4．遺　　物 …… 14
A．土　　器 …… 14
(1) 分　　類 …… 14
(2) 遺構出土の土器 …… 15
(3) 遺構外出土の土器 …… 16
B．石　　器 …… 17

(1) 遺構出土の石器 …… 17
(2) 遺構外出土の石器 …… 19
5．ま と め …… 20
A．遺　　構 …… 20
(1) 竪穴住居 …… 20
(2) 陥穴状土坑 …… 20
B．遺　　物 …… 21
(1) 土　　器 …… 21
(2) 石　　器 …… 22

第Ⅳ章　三本木新田Ｂ遺跡 …… 28
1．調査の概要 …… 28
A．グリッドの設定 …… 28
B．記録の方法 …… 28
2．基本層序 …… 29
3．遺　　構 …… 29
A．竪穴住居 …… 29
B．陥穴状土坑 …… 31
C．土　　坑 …… 31
4．遺　　物 …… 32
A．土　　器 …… 32
(1) 概　　略 …… 32
(2) 分　　類 …… 32
(3) 遺構出土の土器 …… 33
(4) 遺構外出土の土器 …… 34
B．石　　器 …… 37
(1) 遺構出土の石器 …… 37
(2) 遺構外出土の石器 …… 38
5．ま と め …… 39
A．遺　　構 …… 39
B．遺　　物 …… 40
(1) 土　　器 …… 40
(2) ＳＩ７の石器組成について …… 41
要　　約 …… 46
引用・参考文献 …… 47

挿　図　目　次

第１図　遺跡の位置 …… 2
第２図　周辺の縄文時代の遺跡 …… 7
第３図　新潟県における縄文時代前期の遺跡分布 …… 9
第４図　萩清水遺跡　グリッド設定図 …… 10
第５図　萩清水遺跡基本層序 …… 11
第６図　石器の計測法 …… 18
第７図　Ａ群１類土器の分布 …… 21
第８図　萩清水遺跡の砂岩および剝片石器の重量構成 …… 22
第９図　擦切石器集成図 …… 23
第10図　筋砥石集成図 …… 24
第11図　三本木新田Ｂ遺跡　グリッド設定図 …… 28
第12図　三本木新田Ｂ遺跡基本層序 …… 29
第13図　三本木新田Ｂ遺跡遺構配置図（一次調査） …… 30
第14図　三本木新田Ｂ遺跡の剝片石器の重量構成 …… 41

表　目　次

第１表　縄文時代前期の遺跡地名一覧 …… 8
第２表　不定形石器分類表 …… 17
第３表　萩清水遺跡　遺構観察表 …… 25
第４表　萩清水遺跡　石器観察表 …… 26
第５表　萩清水遺跡　石器組成表 …… 27
第６表　有尾式期の住居の石器組成 …… 41
第７表　三本木新田Ｂ遺跡　遺構観察表 …… 42
第８表　三本木新田Ｂ遺跡　石器観察表 …… 43
第９表　三本木新田Ｂ遺跡　石器組成表 …… 45

図　版　目　次

図面図版

図版１　萩清水遺跡　遺構(1)
図版２　萩清水遺跡　遺構(2)
図版３　萩清水遺跡　遺構(3)
図版４　萩清水遺跡　遺構(4)
図版５　萩清水遺跡　遺構(5)・全体図
図版６　萩清水遺跡　縄文土器(1)
図版７　萩清水遺跡　縄文土器(2)
図版８　萩清水遺跡　縄文時代の石器(1)
図版９　萩清水遺跡　縄文時代の石器(2)
図版10　萩清水遺跡　縄文時代の石器(3)
図版11　三本木新田Ｂ遺跡　全体図
図版12　三本木新田Ｂ遺跡　遺構(1)
図版13　三本木新田Ｂ遺跡　遺構(2)
図版14　三本木新田Ｂ遺跡　遺構(3)
図版15　三本木新田Ｂ遺跡　縄文土器(1)
図版16　三本木新田Ｂ遺跡　縄文土器(2)
図版17　三本木新田Ｂ遺跡　縄文土器(3)
図版18　三本木新田Ｂ遺跡　縄文土器(4)
図版19　三本木新田Ｂ遺跡　縄文時代の石器(1)
図版20　三本木新田Ｂ遺跡　縄文時代の石器(2)
図版21　三本木新田Ｂ遺跡　縄文時代の石器(3)
図版22　三本木新田Ｂ遺跡　縄文時代の石器(4)
図版23　三本木新田Ｂ遺跡　縄文時代の石器(5)
図版24　三本木新田Ｂ遺跡　縄文時代の石器(6)

写真

萩清水遺跡

図版25　ＳＩ１土層　ＳＩ１遺物出土状況　ＳＩ１完掘　ＳＩ１完掘（近景）　ＳＩ１砥石出土土坑裁割
ＳＩ１砥石出土状況　ＳＫ５半截・完掘　ＳＫ７半截・完掘
図版26　ＳＫ11半截・完掘・裁割　ＳＫ13裁割・半截・完掘　ＳＫ26半截・完掘　ＳＫ27半截・完掘
図版27　ＳＫ33半截・完掘　調査区全景（南側から）　ＳＫ３完掘　ＳＫ６半截・完掘
ＳＫ10半截・完掘　ＳＫ12半截・完掘
図版28　ＳＫ24半截・完掘　ＳＫ36半截・完掘　ＳＫ28半截・完掘　ＳＫ29半截・完掘
ＳＫ32半截・完掘
図版29　ＳＫ４半截・完掘　ＳＫ25半截・完掘　ＳＫ34半截・完掘　ＳＫ35半截・完掘
ＳＫ37半截・完掘
図版30　ＳＫ38半截・完掘　陥穴状土坑列完掘状況　陥穴状土坑列完掘状況　ＳＫ８半截・完掘
ＳＫ16半截・完掘　ＳＫ18半截・完掘
図版31　ＳＫ39半截・完掘　ＳＫ31半截・完掘　ＳＫ１半截・完掘　ＳＫ１遺物出土状況
ＳＫ１周辺　ＳＫ14半截・完掘
図版32　ＳＫ17半截・完掘　ＳＫ30半截・完掘　ＳＫ２完掘　ＳＫ21完掘　Pit２半截　Pit23完掘
遺跡遠景　遺跡完掘
図版33　長峰遺跡一次調査　萩清水遺跡近くの湧水　萩清水遺跡表面採集資料
図版34　萩清水遺跡の縄文土器(1)
図版35　萩清水遺跡の縄文土器(2)・長峰遺跡の縄文土器

図版36　萩清水遺跡の縄文時代の石器(1)
図版37　萩清水遺跡の縄文時代の石器(2)
三本木新田Ｂ遺跡
図版38　ＳＩ７土層　ＳＩ７完掘　ＳＫ６半截・完掘　ＳＩ１半截・完掘　ＳＫ２半截・完掘
ＳＫ10半截・完掘
図版39　ＳＫ11半截　ＳＫ12完掘　ＳＫ14半截・完掘　ＳＫ15半截・完掘　ＳＫ５完掘　ＳＫ13半截
遺跡全景　調査風景
図版40　三本木新田Ｂ遺跡の縄文土器(1)
図版41　三本木新田Ｂ遺跡の縄文土器(2)
図版42　三本木新田Ｂ遺跡の縄文土器(3)
図版43　三本木新田Ｂ遺跡の縄文土器(4)
図版44　三本木新田Ｂ遺跡の縄文時代の石器(1)
図版45　三本木新田Ｂ遺跡の縄文時代の石器(2)
図版46　三本木新田Ｂ遺跡の縄文時代の石器(3)
図版47　三本木新田Ｂ遺跡の縄文時代の石器(4)

第Ⅰ章　序　　説

1．調査に至る経緯

国道18号は上越市と新井市の市街部の慢性的な交通渋滞と、冬期間の降雪による交通障害に悩まされてきた。建設省はこれらの障害を解消するため、上越市下源入～中郷村市屋に至る全長24.6kmの大規模バイパス、上新バイパスの建設を計画した。このバイパスは、昭和53年度から工事が開始され、昭和60年現在約12.5kmが共用されている。

上新バイパスの建設に先立ち、昭和51年10月４日に建設省北陸地方建設局高田工事事務所（以下「高田工事事務所」とする。）から「建北高調第549号」で新潟県教育庁文化行政課（以下「県教委」とする。）に対し上新バイパス予定法線に関する埋蔵文化財の有無および発掘・保存等についての照会があった。これに対して県教委は、昭和52年３月23日付「教文第828号」で回答したが、この時点では萩清水遺跡・長峰遺跡・三本木新田Ｂ遺跡の３遺跡はまだ周知されていなかった。[註1)] 県教委は、昭和54年10月29日～31日にかけて上新バイパス予定法線内において遺跡分布調査を行い、この時の調査で三本木新田遺跡（以後「萩清水遺跡」とする。[註2)]）が発見・周知された。その調査結果は昭和54年12月11日付「教文第1103号」で高田工事事務所に通知された。

昭和59年２月９日、県教委と建設省北陸地方建設局（以下「北陸地建」とする。）との直轄国道改築事業区域内における埋蔵文化財の発掘調査打合せ会議において、萩清水遺跡の発掘調査希望時期が昭和60年度と北陸地建から具体的に示された。同年９月17日の昭和60年以降の調査についての協議の際に県教委は、二本木・関川・新井線の交点から市屋までの遺跡分布調査の必要性を主張し、分布調査を実施した。その調査結果は、同年10月９日付「教文第793号」で北陸地建に回答されたが、確認された新遺跡および要確認調査地域の中に萩清水遺跡・長峰遺跡・三本木新田Ｂ遺跡の３遺跡が含まれていた。

昭和60年７月30日の直轄国道改築事業区域内における埋蔵文化財発掘調査打合せ会議において、来年度調査希望遺跡として萩清水遺跡・長峰遺跡・三本木新田Ｂ遺跡の３遺跡が候補にあがるとともに一次調査の早急な実施依頼が行われた。この依頼を受けて一次調査が昭和60年８月19日～23日に実施され、調査結果は同年９月６日付「教文第730号」で高田工事事務所へ通知された。その調査結果は、萩清水遺跡に隣接して縄文～平安時代の遺物が採集されるが、畑地部分は耕作中のため一次調査不可能という内容であった。昭和61年５月14日、萩清水遺跡・長峰遺跡・三本木新田Ｂ遺跡の３遺跡が所在する矢代川右岸から渋江川までの一次調査の依頼が北陸地建からあった。県教委はこの依頼を受けるかたちで同年８月１日、三本木新田・西福田新田地域遺跡の一次調査の計画を立案し、「教文第442号」で関係諸機関に通知した。それによると遺跡対象地の名称とそれぞれの面積は、萩清水遺跡（5,200㎡）・長峰遺跡（3,300㎡）・三本木新田Ｂ遺跡（19,200㎡）であり、調査予定期間は昭和61年８月20日～昭和61年10月25日までであった。そして、調査体制は担当者を戸根主任、調査員を寺崎文化財専門員と池田文化財専門員とした。

註１）三本木新田遺跡は、平成８年度現在萩清水遺跡として周知され、三本木新田という遺跡名は抹消されている。

註２）ただし地元では付近一帯は遺物が拾える場所として知られており、日向地（ひこうち）と呼ばれていた。日向地とはアイヌの人々が住んでいた所を意味するという。（清水作次郎氏よりご教示をいただいた。）

2．調査と整理

A．発掘調査

(1)　調査経過

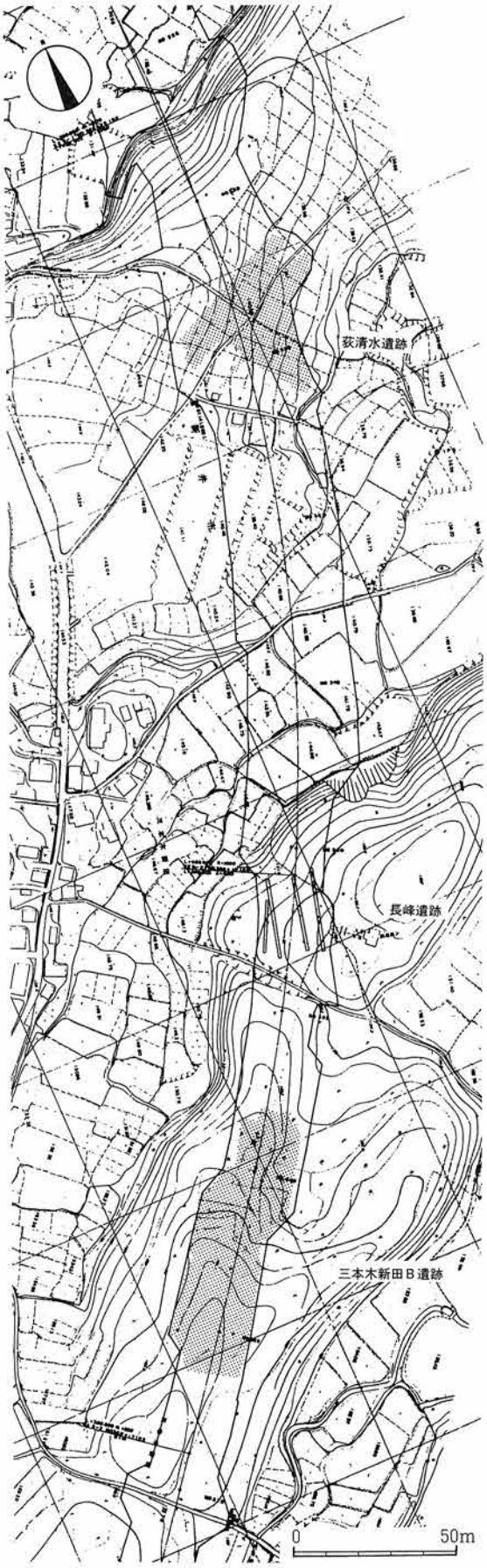
萩清水遺跡・長峰遺跡・三本木新田Ｂ遺跡の調査は昭和61（1986）年度と62（1987）年度に行った。61年度に長峰遺跡の一次調査と萩清水遺跡の一・二次調査、三本木新田Ｂ遺跡の一次調査を行い、62年度に三本木新田Ｂ遺跡の二次調査を行った。

昭和61年度の調査は８月20日に調査員が現地に入り、21日に現場事務所などの建設を行い、翌22日から調査に着手した。途中調査員の交代が３度あったが、10月20日には予定の調査を終了して撤収した。個々の遺跡の調査の経緯は以下のとおりである。

長峰遺跡は、８月22日に一次調査に着手し、４日後の26日に調査が終了した。一次調査で遺構は発見されず、遺物も縄文土器片が１点（図版35）表面採集されただけだったので、二次調査は不要と判断した。

萩清水遺跡は、８月23日一次調査に着手し、９月上旬までに縄文時代前期の住居跡や十数基の陥穴状土坑などが検出されたことから、一次調査トレンチを拡張する形で二次調査を実施することになった。二次調査は９月８日から一次調査と同様の体制で開始され、陥穴状土坑の発掘調査は、半截～土層断面の観察・写真・実測～完掘～完掘写真～平面・断面実測の手順で行うこととなった。９月30日から全体の実測を開始し、10月３日には住居跡と陥穴状土坑の発掘・完掘写真を終了、平面・断面実測も数基を残し終了した。翌日には、平面・断面実測と全体実測も終了する見込みとなった。10月４日以降は、陥穴状土坑１基を検出したほかは新たな遺構の検出もなく、陥穴状土坑を半截して底部における小ピットの存在の有無の確認や風倒木を発掘して内部から出土する遺物の検出・採集に努め、10月17日には二次調査を終了した。

三本木新田Ｂ遺跡は、８月27日に一次調査に着手し、調査開始後まもなく住居跡らしき落ち込みが検出



第１図　遺跡の位置

された。9月9日から遺構確認、19日には調査範囲と検出遺構の平面実測、24日には土層断面の実測をそれぞれ開始し、26日に一次調査を終了した。縄文時代前期の住居跡等の遺構が確認されたため、二次調査が必要となったが、61年度中では調査体制が整わず調査期間も足りないことから次年度に二次調査を実施することとなった。

二次調査は、昭和62年8月18日から調査員4名が現地入りして準備を行い、24日から調査員3名の体制で本格的な発掘調査に着手した。当初の主な作業は、重機による攪乱層の除去と除去後の遺構確認作業であった。9月7日に包含層発掘を開始し、翌8日には遺構発掘に着手した。29日には遺構発掘等の目処が立ったため発掘調査体制を縮小した。10月2日以降は、遺構の実測に入り、その後残務整理などを行い、10月20日に二次調査を終了した。

(2) 調査体制

昭和61年度

調査主体	新潟県教育委員会（教育長　有磯邦男）		
管　理	総　括	高橋　安	（新潟県教育庁文化行政課長）
	管　理	田中浩一	（　〃　課長補佐）
	庶　務	土田　玲	（　〃　主事）
調　査	調査指導	中島栄一	（　〃　埋蔵文化財係長）
	調査担当	戸根与八郎	（　〃　主任）
	調査職員	寺崎裕助	（　〃　文化財専門員）
		池田敏郎	（　〃　文化財専門員）
	作業員	新井市の有志	
	協　力	新井市、新井市教育委員会、新井市シルバー人材センター	

昭和62年度

調査主体	新潟県教育委員会（教育長　田中邦正）		
管　理	総　括	大塚克夫	（新潟県教育庁文化行政課長）
	管　理	田中浩一	（　〃　課長補佐）
		矢部　亮	（　〃　〃　）
	庶　務	土田　玲	（　〃　主事）
調　査	調査指導	中島栄一	（　〃　埋蔵文化財係長）
	調査担当	藤巻正信	（　〃　主任）
	調査職員	金沢道篤	（　〃　文化財専門員）
		本間桂吉	（　〃　文化財調査員）
	作業員	新井市の有志	
	協　力	新井市、新井市教育委員会、新井市シルバー人材センター	

B. 整理作業

(1) 整理経過

遺物の水洗・註記などの基礎的な整理作業は発掘調査を実施した昭和61年度・62年度に発掘調査と並行して行った。報告書作成に関わる本格的な整理作業は、発掘調査後10年をおいて平成8年度に行った。その間、平成4年に財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団が発足し、それまで新潟県教育委員会が行ってきた発掘調査及び整理作業が同事業団に委託されることになった。また、平成8年10月には新潟県埋蔵文化財センターが竣工し、それ以降の整理作業はセンターにおいて進めた。

(2) 整理体制

昭和61年度・62年度の整理体制は各年度の発掘調査体制と同様である。

平成8年度

整理主体　新潟県教育委員会（教育長　平野清明）
整　　理　財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長　平野清明）
管　　理　藍原直木（専務理事・事務局長）
　　山上利雄（総務課長）
　　亀井　功（調査課長）
庶　　務　泉田　誠（総務課主事）
整理指導　寺崎裕助（調査課第二係長）
整理職員　立木（土橋）由理子（同　文化財調査員）

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境

1．周辺の地形と地質

萩清水遺跡・三本木新田Ｂ遺跡の所在する新井市は新潟県の南西部に位置し、南は長野県飯山市に、北は上越市に接している。新井市は東を関田山脈、南を妙高山、西を頸城連山に囲まれ、北は日本海に面した頸城平野に向けて開いている。市の中央部には関川と矢代川が北流している。関川は焼山を起源として妙高山の南裾を巡り、関田山脈の裾野を流れて頸城平野に至る。矢代川は妙高山・火打山・容雅山・不動山などの山々から流れ下り、頸城平野に至り関川に合流する。両河川の形成した扇状地や氾濫源は当地に肥沃な土地を提供している。

萩清水遺跡・三本木新田Ｂ遺跡は矢代川右岸の火砕流台地の上に位置する。この火砕流台地は妙高火山起源の渋江川火砕流堆積物に規定されており、遺跡付近ではその上位を二本木岩屑流と矢代川岩屑流が薄く覆う形となっている。妙高火山の噴出物はちょうどこの遺跡付近を北限として、関川左岸に幾重にもわたって厚く堆積し、地勢形成に大きな影響を与えている。

渋江川火砕流堆積物は矢代川と高床山に挟まれた妙高火山北東山腹から山麓一帯に広く分布しており、降下テフラ層を挟み上位には二本木岩屑流堆積物が存在する。二本木岩屑流堆積物は妙高火山の３回の休止期のうち、第Ⅲ活動期と第Ⅳ活動期の間の第Ⅲ休止期に堆積し、おもに矢代川流域と矢代川と高床山に挟まれた地域に分布する。ちなみに、第Ⅲ活動期の活動期間は約７～８万年前から約５～5.5万年前、第Ⅳ活動期は約3.1～3.2万年前のシブタミ川火砕流堆積物とそれに伴う兼俣火山灰層の堆積に始まる。矢代川岩屑流堆積物は大倉山と火打山の間の谷から矢代川に沿って新井市までの約50㎢の地域に分布し、矢代川流域では姶良－丹沢火山灰層（ＡＴ）の上位に堆積している（早津1985）。^{14}Ｃ年代値は17,900±450y. B. P.（Gak－457）、20,200±800y. B. P.（Gak－456）（妙高団研グループ1969）が得られている。

妙高火山の噴出物のうち縄文時代の遺跡調査の鍵層になるものとして、赤倉火砕流堆積物と大田切川火砕流堆積物がある。

赤倉火砕流堆積物は妙高火山の東麓に広く分布し、北は片貝川から南は池の平までの範囲で認められる。考古遺物からみた噴出時期は、従来縄文時代早期末～前期初頭と考えられてきた。ところが近年、妙高高原町関川谷内Ａ遺跡で赤倉火砕流堆積物が縄文時代前期中葉の有尾式土器を包含する黒色土を覆っているのが確認され（小島1995）、従来の認識を改める必要が出てきた。^{14}Ｃ年代値はこれまで5,880±190y. B. P.（Gak－7543）（早津・古川1981）、5,710±140y. B. P.（Gak－11393）（早津1985）が得られていたが、最近妙高村道添遺跡で5,310±110y. B. P.（Ｉ－17,943）が出た。この測定結果と遺物の出土層位との関係から、赤倉火砕流堆積物の噴出時期については従来よりも若干新しい時期、つまり有尾式より新しく、諸磯ｃ式並行期よりは古い時期、実年代では約5,300年前と捉え直すのが妥当と考えられている（早津1995）。

大田切川火砕流堆積物は妙高山の東方から北東にかけての、古二俣川・関川・片貝川流域に分布する。噴出時期は考古遺物との関係では縄文時代中期末～後期初頭が考えられているが（早津・小島1985）、噴出年代は^{14}Ｃ年代値の測定値にばらつきがあるため、約4,000～4,500年前という幅をもった値が示されている（早津1985）。なお、前出の矢代川岩屑流堆積物はこれに覆われている。

2．周辺の遺跡（第２図）

妙高山東麓・関田山脈西麓および頸城平野における縄文時代の遺跡は主に山麓部に分布し、関川などの河川が作り出した沖積面や扇状地にはほとんど分布していない。当地域は妙高火山からの噴出物が関川左岸を中心に広い範囲を覆っている。とくに赤倉火砕流堆積物と大田切川火砕流堆積物は遺跡によっては厚く堆積し、その上位と下位の文化層を明瞭に区別している。その反面、関川左岸の妙高高原町田切から妙高村関山までの間は縄文時代中期末～後期初頭に堆積したと推定される大田切火砕流堆積物が非常に厚く堆積しているためか、縄文時代の遺跡の発見例は少ない。

草創期から早期の遺跡は妙高山東側の山裾に多く分布する。長野県との県境に近い大堀遺跡（立木ほか1996）、関川谷内Ａ・Ｂ遺跡（小池1995・滝沢1995）、中ノ沢遺跡（阿部1995）では比較的まとまった量の押型文土器が出土し、これまで空白であった当地の編年を作成する上で貴重な資料を提供している。このほかに押型文土器が検出された遺跡としては、妙高山麓では松ケ峯遺跡群（小島1993ほか）、高床山周辺の遺跡群（高橋1994）、古塔山西方の盆地地形に位置する中古遺跡（室岡1986ｂ）がある。

前期前葉から中葉の遺跡は、関川谷内Ａ遺跡（小池1995）と今回報告する三本木新田Ｂ遺跡などがある。これらの遺跡からは有尾式土器が出土しており、とくに関川谷内Ａ遺跡では赤倉火砕流堆積物の下位から有尾式土器が出土し、従来の赤倉火砕流堆積物の噴出時期を再検討する必要が生じた（小島1995）。

前期中葉から中期前葉の遺跡は、妙高山麓に湯ノ沢遺跡群（新潟県1980）、籠峰遺跡（小池1996・中郷村教委1996）・和泉Ａ遺跡（荒川1994・1995・1996）、横引遺跡（立木1996）、萩清水遺跡などがある。籠峰遺跡・和泉Ａ遺跡では赤倉火砕流堆積物と大田切川火砕流堆積物の間で当時期の遺構・遺物が検出されている。このほか、高床山南方の平坦地に道添遺跡（室岡1994・1995）、柿ノ木町遺跡（親跡1992ａ）、関川とその支流馬場川によって形成された段丘面上に大貝遺跡（岡本ほか1967）がある。

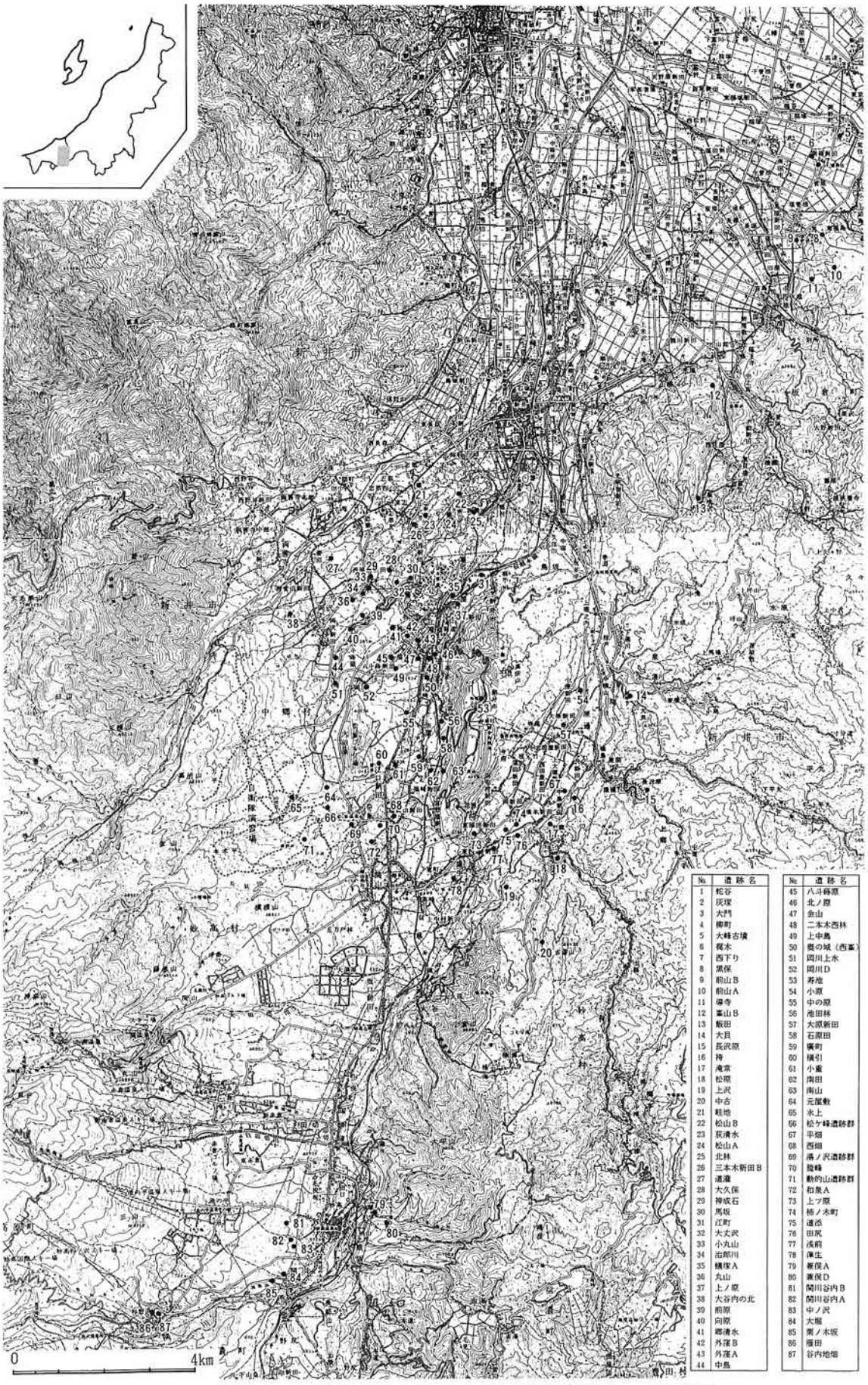
中期中葉から後期・晩期の遺跡は大田切川火砕流堆積物より上位の土層に遺物包含層をもつ。籠峰遺跡、葎生遺跡（中川ほか1967）、奥の城（西峯）遺跡・二本木西林遺跡（岡本1982）、小丸山遺跡（親跡1990）では石棺状配石遺構が検出されている。石棺状配石遺構は東頸城郡顕聖寺遺跡で検出されたのが県内の初例で（中川ほか1959）、現在妙高山麓のほか頸城平野東縁で検出例がある。このほか、兼俣遺跡Ａ地区（本間1976）で中期後葉から後期前葉、兼俣遺跡Ｄ地区（室岡1986ａ）で後期中葉から晩期、上ッ原遺跡（親跡1992ｂ）で晩期後葉の遺物が出土している。また、和泉Ａ遺跡では晩期終末の配石遺構が検出された（荒川1996）。

3．新潟県内の縄文時代前期中葉・後葉の遺跡分布（第１表・第３図）

Ａ．縄文時代前期中葉の遺跡分布

有尾式期・黒浜式期を前期中葉と捉え、その遺跡分布状況を概観する。型式名は報告者の分類による。

有尾式・黒浜式の土器を保有する遺跡は糸魚川市から巻町にかけての海岸部と、中魚沼の信濃川流域、魚野川上流域、関川上・中流域に分布している。遺跡数は有尾式９、黒浜式27であるが、両型式が認められるのは糸魚川市庭平遺跡・青海町大角地遺跡の２遺跡のみである。なお、堀之内町清水上遺跡では前段



No.	遺跡名
1	蛇谷
2	灰塚
3	大門
4	柳町
5	大峰古墳
6	梶木
7	西下り
8	黒保
9	前山B
10	前山A
11	導寺
12	峯山B
13	飯田
14	大貝
15	長沢原
16	袴
17	滝窯
18	松原
19	上沢
20	中古
21	畦地
22	松山B
23	荻清水
24	松山A
25	北林
26	三本木新田B
27	道瀧
28	大久保
29	神成石
30	馬坂
31	江町
32	大丈沢
33	小丸山
34	治郎川
35	横塚A
36	丸山
37	上ノ原
38	大谷内の北
39	前原
40	向原
41	郷清水
42	外窪B
43	外窪A
44	中島

No.	遺跡名
45	八斗蒔原
46	北ノ原
47	金山
48	二本木西林
49	上中島
50	奥の城（西墓）
51	岡川上水
52	岡川D
53	寿池
54	小原
55	中の原
56	池田林
57	大原新田
58	石原田
59	廣町
60	横引
61	小倉
62	南田
63	南山
64	元屋敷
65	永上
66	松ケ峰遺跡群
67	平畑
68	西畑
69	涌ノ沢遺跡群
70	龍峰
71	動的山遺跡群
72	和泉A
73	上ツ原
74	柿ノ木町
75	道西
76	田尻
77	浅前
78	陳生
79	兼保A
80	兼保D
81	関川谷内B
82	関川谷内A
83	中ノ沢
84	大堀
85	栗ノ木坂
86	雁田
87	谷内地畑

第２図　周辺の縄文時代の遺跡

原図：国土地理院発行　1：50，000地形図
昭和63年　高田西部・平成元年　高田東部・平成5年　妙高山・飯山

階（関山Ⅱ式並行）で東北系が主流だったのが、この時期になると東北系が激減し、多くを関東・中部高地系が占めるようになるとともに、「根小屋式」という越後系の土器が出現する（寺崎1996）。

有尾式・黒浜式の分類については、いまだ明確な基準が定まっているとは言い難い段階にあり、今後の両形式の研究の進展が望まれる。また、新たに登場した越後系の土器が周辺および遠隔地の影響を受けている点は、この時期の土器の交流を考える上で興味深い。

B．縄文時代前期後葉の遺跡分布

諸磯ａ～ｃ式期を前期後葉と捉えて、その遺跡分布状況を概観する。対象とした遺跡は、報告書等で型式名が「諸磯式」とされているもので、ａ式・ｂ式・ｃ式の細分は基本的には報告者の分類に従った。分布図には細分型式の不明な遺跡も記入したが、分布域を概観する際の対象には含めていない。

ａ～ｃ式期を通し、遺跡は中魚沼の信濃川流域に集中する。ちなみに、中里村と津南町に限って遺跡数の推移を見ると、ａ式期11、ｂ式期15、ｃ式期５である[註)]。次にこの地域以外の遺跡分布と遺跡数を見てみる。ａ式期は下田村・十日町市・妙高村各３、西山町・刈羽村・広神村・大潟町・吉川町・上越市・糸魚川市各１、ｂ式期は妙高村７、十日町市・塩沢町各４、湯沢町２、朝日村・西山町・長岡市・大潟町・吉川町・新井市各１である。ｃ式期の遺跡は十日町市11、妙高村５、川西町・塩沢町３、新発田市・長岡市・小千谷市・六日町・西山町・堀之内町・大潟町・吉川町・中郷村・妙高高原町各１である。

上記のような分布状況から気付く点を２、３あげてみたい。ａ式期には海岸部まで遺跡の進出が認められるが、ｂ式期・ｃ式期になると多くは山間部に後退する。後退後の中心地は依然として中魚沼の信濃川流域にあるが、ｂ式期には魚野川上流域にも分布域が広がっていく。遺跡数は全体でみるとａ式期25、ｂ式期37、ｃ式期38であるが、中魚沼の津南町・中里村の信濃川流域で見るとｂ式期からｃ式期にかけて遺跡数は減少し、全体とは異なる動きを見せる。ｂ式期からｃ式期の遺跡数の減少は、ｂ式期以降の遺跡分布の中心が魚野川流域に広がっていくのと関係がありそうである。

新潟県の縄文時代前期中葉の遺跡

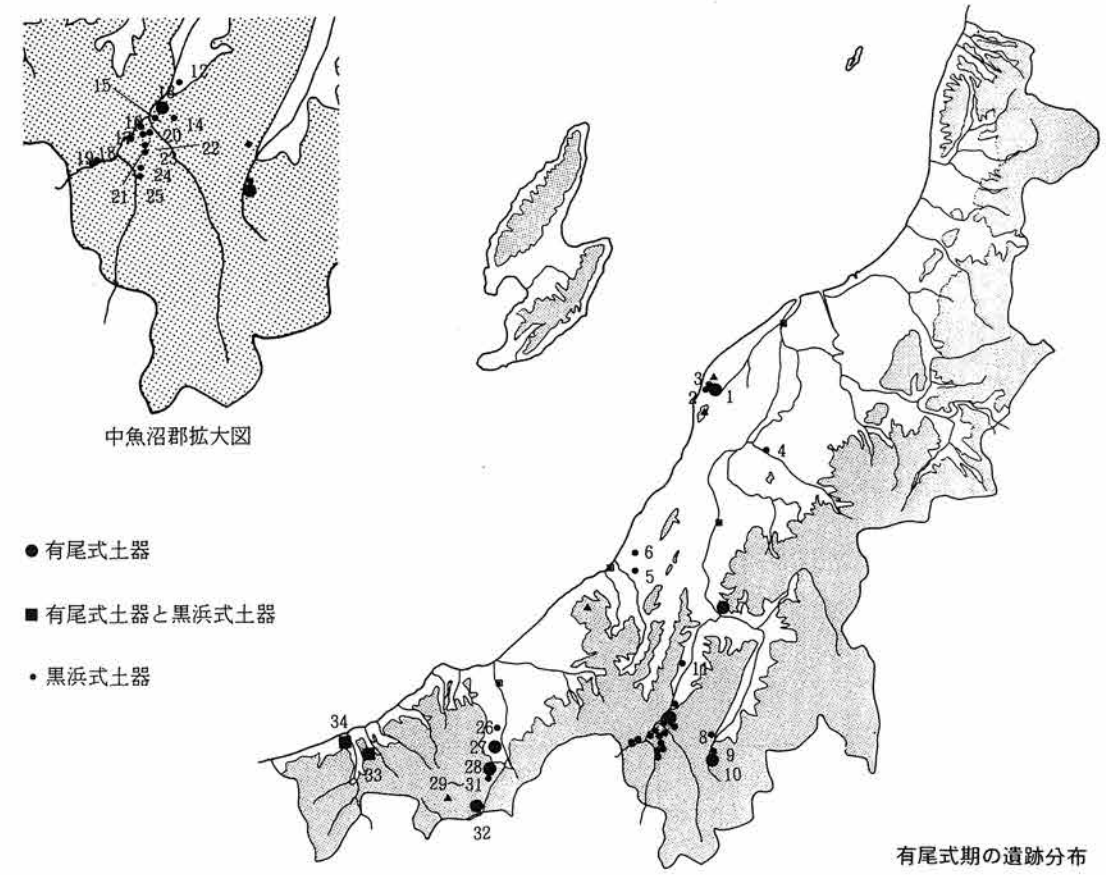
No.	遺跡名	所在地	有尾式	黒浜式
1	豊原	巻町	○	
2	新谷	巻町		○
3	中島	巻町		○
4	下山	下田村		○
5	赤坂	柏崎市		○
6	刈羽貝塚	刈羽村		○
7	清水上	堀之内町	○	
8	築ノ木平	塩沢町		○
9	十二木B	塩沢町		○
10	十二木	塩沢町	○	
11	寒風	川西町		○
12	干溝原	十日町市		○
13	干溝	中里村	○	
14	亀鳴寺	中里村		○
15	中段	津南町		○
16	卯ノ木	津南町		○
17	焼松	津南町		○
18	両留	津南町		○
19	尾滝	津南町		○
20	宮ノ上	津南町		○
21	桐ノ木平	津南町		○
22	神山A	津南町		○
23	小坂平	津南町		○
24	上正面しも	津南町		○
25	上正面かみ	津南町		○
26	新保新田	新井市		○
27	三本木新田B	新井市	○	
28	横引	中郷村	○	
29	松ケ峰遺跡群 No.202	妙高村		○
30	No.209			○
31	No.212			○
32	関川谷内A	妙高高原町	○	
33	岩平	糸魚川市	○	○
34	大角地	青海町	○	○

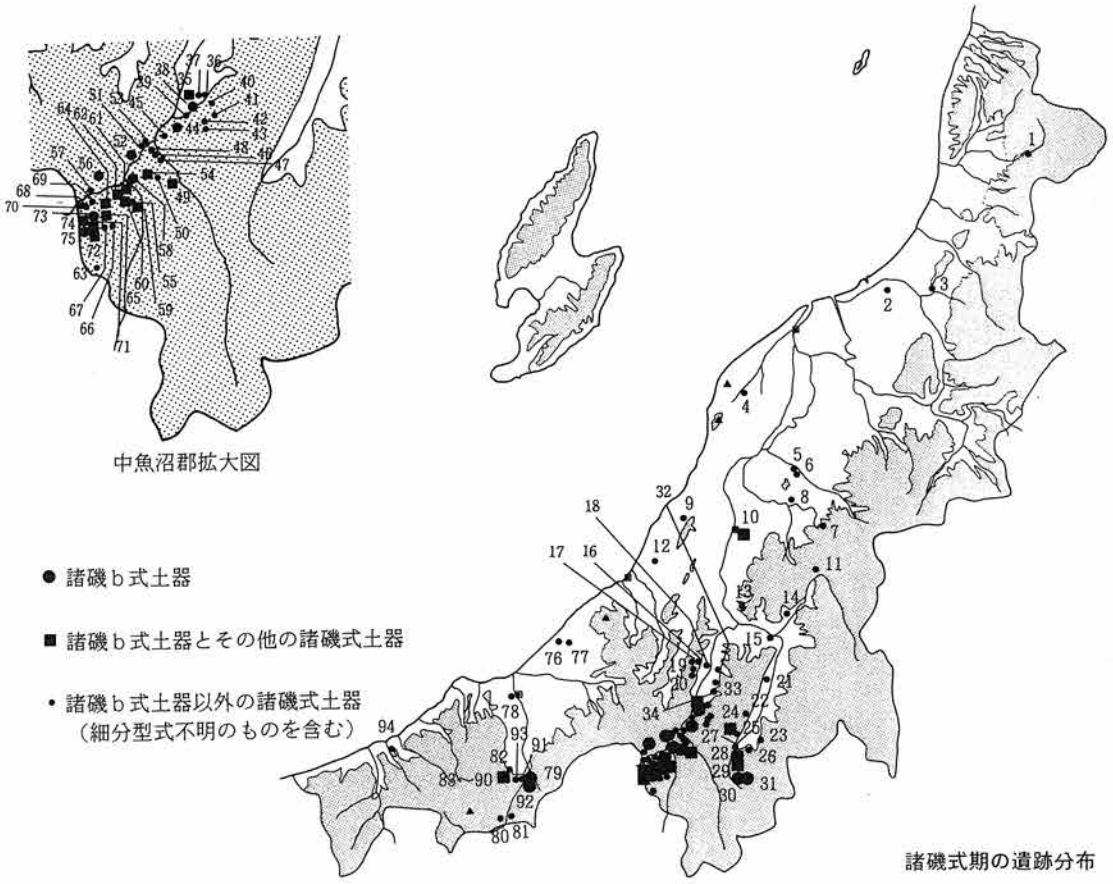
新潟県の縄文時代前期後葉の遺跡

No.	遺跡名	所在地	諸磯b	諸磯a 諸磯c ほか
1	樽口	朝日村	○	
2	二本松東山	豊浦町		c
3	二子沢A	新発田市		c
4	豊原	巻町		○
5	楠平B	下田村		a
6	楠平一之坂	下田村		○
7	布倉横遺跡	下田村		c
8	峠	見附市		a
9	多岐ノ脇	西山町	○	a・c
10	三貫堀	長岡市	○	c
11	[illegible]	[illegible]		○
12	刈羽貝塚	刈羽村		a
13	大明	小千谷市		c
14	小平尾	広神村		a
15	上の原	堀之内町		c
16	寒風	川西町		c
17	中子塚	川西町		○
18	品ノ木田	川西町		a
19	上ノ山	川西町		c
20	角鹿寺	川西町		c
21	横山	六日町		c
22	上ノ台B	六日町		○
23	太平	六日町		?
24	築ノ木平	塩沢町	○	c
25	寺林	塩沢町		○
26	防塚	塩沢町		○
27	五丁歩	塩沢町	○	
28	十二木	塩沢町	○	c
29	上ノ平	塩沢町	○	c
30	宮林B	湯沢町	○	
31	岩原B	湯沢町	○	
32	北原八幡	十日町市		c
33	南山	十日町市		c
34	新堀原A	十日町市		○
35	田沢上原B	十日町市	○	c
36	叔父ケ原A	十日町市		c
37	中山A	十日町市		○
38	城倉	十日町市	○	
39	寺山B	十日町市		c
40	深沢	十日町市		○
41	野祖原A	十日町市		○
42	つつじ原A	十日町市		c
43	赤羽根	十日町市		c
44	伊達	十日町市	○	
45	南原	十日町市		c
46	馬場神社	十日町市		c
47	カタガリ	十日町市		c
48	馬場館	十日町市		c
49	浅田A	十日町市	○	a
50	大井久保	十日町市		○
51	壁之巣	中里村		c
52	鶴森	中里村	○	
53	枝鳥山	中里村		○
54	亀原寺	中里村	○	a
55	下舟	中里村		a
56	丸山	津南町	○	
57	上野	津南町		c
58	中段	津南町	○	
59	天池	津南町	○	a
60	卯ノ木平	津南町	○	a
61	望翠田	津南町	○	c
62	焼松	津南町	○	a
63	大赤沢	津南町		○
64	神山A	津南町	○	a
65	小坂平	津南町	○	a
66	梅田	津南町		○
67	結東	津南町		a
68	反里	津南町		○
69	堂尻	津南町		○
70	尾滝	津南町		c
71	上正面しも	津南町	○	a
72	上正面かみ	津南町	○	
73	滝の上	津南町	○	
74	亀岡原東	津南町	○	a・c
75	妙法	津南町	○	a
76	丸山	大潟町	○	a・c
77	吉町B	吉川町	○	a・c
78	八反田	上越市		a
79	大貫	新井市	○	
80	兼俣	妙高高原町		c
81	中ノ沢	妙高高原町		○
82	横引	中郷村		c
83	松ケ峰遺跡群 No.201	妙高村	○	a・c
84	No.202			a
85	No.205			c
86	No.208		○	
87	No.210		○	a
88	No.212		○	
89	No.216			c
90	No.219			c
91	柿ノ木町	妙高村	○	c
92	中吉B	妙高村	○	
93	麻の沢B	妙高村		○
94	岩野下	糸魚川市		a

第１表　縄文時代前期の遺跡地名一覧

註）当該期の魚沼地方の遺跡分布については（佐藤1987）に詳しい。





第３図　新潟県における縄文時代前期の遺跡分布

第Ⅲ章　萩清水遺跡

1．調査の概要

A．グリッドの設定（第４図）

グリッドはＳＴＡ№334＋00の東幅杭とＳＴＡ№335＋00の東幅杭を結んだ直線を主軸に設定した。なお、ＳＴＡ№335＋00の国家座標は（Ｘ＝111648.3421，Ｙ＝－23810.9783）である。

グリッドの主軸は真北に対して約9.5°東偏する。大グリッドは10ｍ方眼とし、南北方向を南から１～10、東西方向を西からＡ～Ｊに分けて、「１Ａ」などのように組み合わせて呼称した。小グリッドは大グリッドを２×２ｍ方眼に分けて、各大グリッドの南西隅を起点、北東隅を終点として１～25の番号を付し、「１Ａ２」のように大グリッドと組み合わせて呼称した。

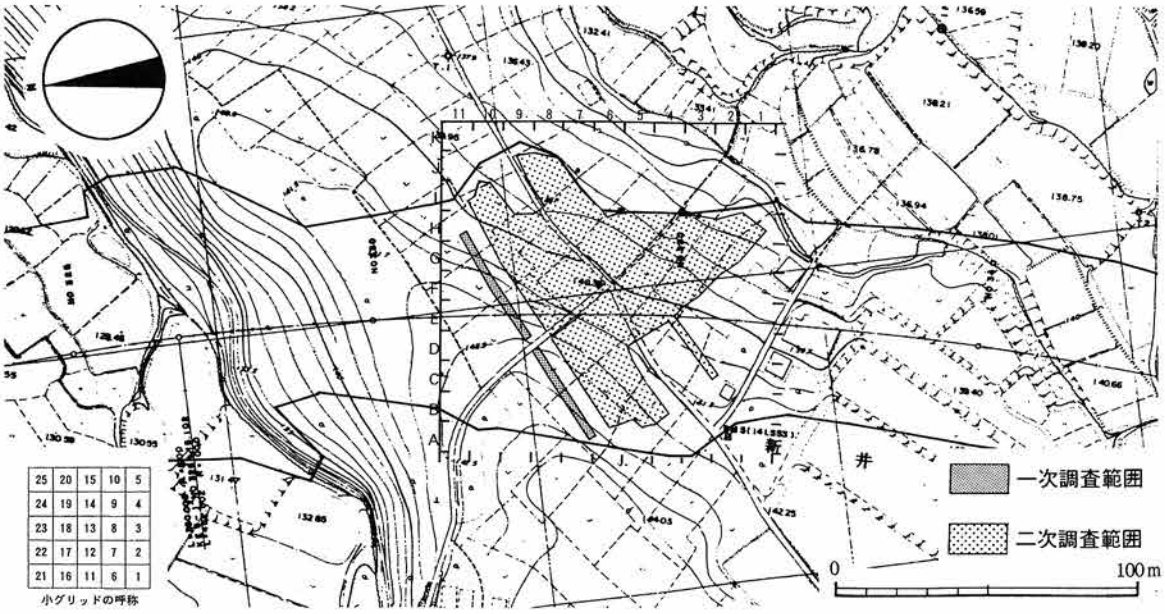
B．記録の方法

遺物　萩清水遺跡は一次調査の結果、遺構・遺物が検出されたトレンチを中心に拡張していくという調査方法をとった。そのため遺物の取り上げは、遺構出土のものは遺構単位であるが、包含層出土のものについては一次調査のトレンチ単位、あるいは大グリッド単位で行った。

遺構　調査範囲図・遺構平面図は平板測量で作図した。

2．基本層序（第５図）

調査地は斜面であるが堆積状況に大きな違いはなく、基本層序は次のとおりである。



第４図　萩清水遺跡　グリッド設定図

Ⅰ層：暗黒色土に赤褐色土ブロックが混じる。現代の耕作土である。

Ⅱ層：暗黒色土。

Ⅲ層：暗褐色土に赤褐色土ブロックが混じる。

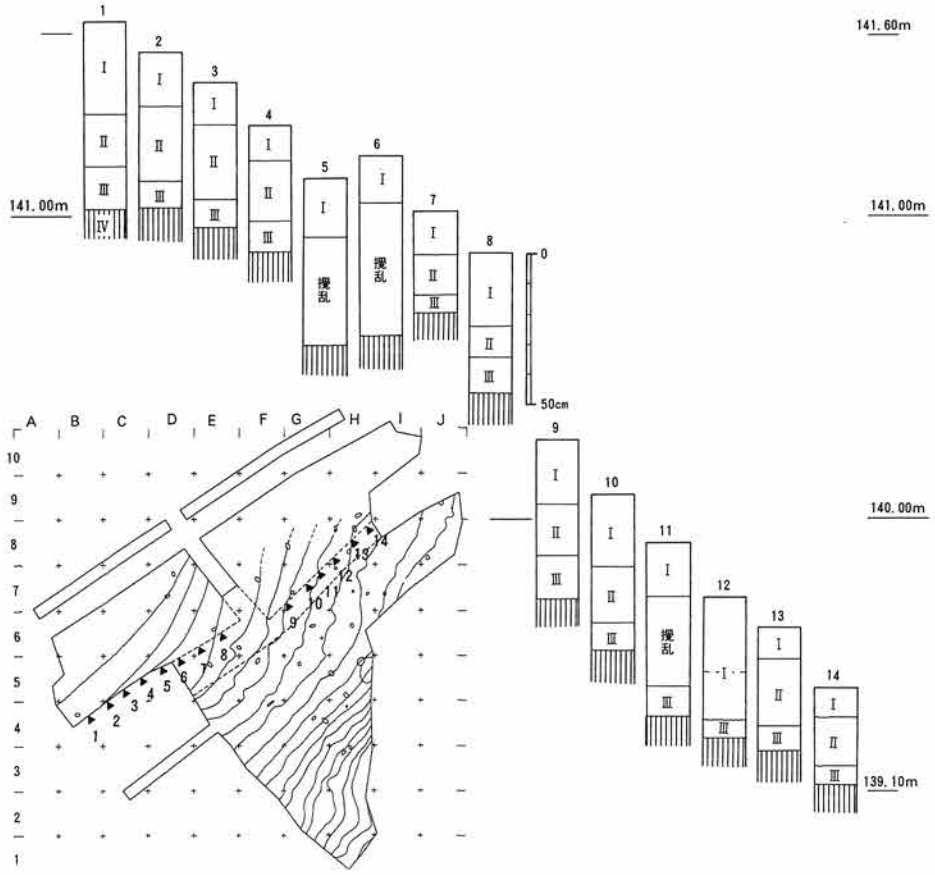
Ⅳ層：赤褐色粘土。二本木岩屑流堆積物と推定される。[註)]

なお、Ⅳ層上面の地形は北西から南東に向かって標高を下げる南向きの斜面になっており、標高は141.3～136.2mを測る。

遺物包含層はⅡ～Ⅲ層であるが、広い範囲にわたってⅣ層まで及ぶ攪乱を受けていた。そのため、出土遺物の多くが本来の位置から移動していると考えられる。また、遺構検出はⅣ層より上位の層が広く攪乱を受けていたため、Ⅳ層上面で行った。よって、遺構検出面と掘り込み面は必ずしも一致しない。

3．遺　　構

萩清水遺跡では竪穴住居１基、陥穴状土坑22基、土坑11基、ピット２基が検出された（図版５.）。ただし、調査前に包含層と遺構確認面のⅣ層が広い範囲にわたって攪乱を受けていたために、検出された遺構の多くは上部を破壊されていた。そのため、攪乱深度より浅い遺構が存在していたとしても検出不可能であり、また検出された遺構についても残存部分からその性格を推定せざるを得なかった。



第５図　萩清水遺跡基本層序

註）早津賢二氏のご教示による。

A．竪穴住居（図版１・25）

竪穴住居は１基検出された。

ＳＩ１　ＳＩ１の東半分は調査範囲外であったため、未発掘である。また、南東側は比較的深くまで攪乱が及んでおり、正確な立ち上がりは残っていなかった。住居の調査部分における長軸は5.95mで、検出面から床面までの深度は40cmである。平面形は隅丸方形に近いと推定される。

床面の施設には周溝とピットがある。周溝は西辺から南隅にかけて掘られている。周溝の幅は約10cm、深度は床面から12cmである。ピットは19基が検出されたが、いずれも小形で浅く配列も不規則なので、柱穴の決定には至らなかった。ＳＩ１－Ｐ９の覆土には炭化物が含まれていたが、形態的に炉跡とは考え難いものだった。これ以外に床面に焼土や炭化物の集中が認められることもなく、炉跡の推定はできなかった。

ＳＩ１の出土遺物には縄文土器と石器がある。石器（図版８・９－１～25）は破損品を含む砥石５点、擦切石器６点、石核２点、石錐１点、不定形石器４点、剥片14点、磨石類１点がある。砥石、擦切石器、石核は質の似る砂岩製である。１の砥石は床面を掘り込んだところに、砥面が床面と同じ高さになるようにして据えられていた。土器（図版６）はＡ群１類（２～９）・３類（10～12・18）・４類（13～17・19～25）・５類（26～29）とＣ群２類(1)・５類（30）が出土しており、主体となるのは前期後葉の土器Ａ群である。Ａ群は時期的に諸磯ｂ式期に並行することから、住居の構築もその頃と考えたい。

ＳＩ１では食物加工に関わるような石器がほとんど存在せず、石器組成が砥石類に偏ることや、床面に据えられた砥石の存在などから、何らかの研磨作業が行われていたと推定される。ただし、製作されていた製品や未製品の出土がないので被加工物は明言できない。

B．陥穴状土坑（図版１～４・25～30）

陥穴状土坑は22基検出された。

分類　分類は本来の形態をとどめていると推定される底部の形態をもとに行った。検出された22基の陥穴状土坑は、底部の小ピットの有無で２大別、底部の平面形で４細分される。

Ⅰ類：底部に小ピットを有するもの

Ⅱ類：底部に小ピットが無いもの

さらにⅠ類、Ⅱ類は底部の平面形によって、次の４つに細分される。

ａ類：隅丸長方形を呈するもの

ｂ類：隅丸方形を呈するもの

ｃ類：円形を呈するもの

ｄ類：溝状のもの

上記の分類項目を組み合わせてⅠａ類などと記載する。

Ⅰａ類は５基（ＳＫ５・７・11・13・26）、Ⅰｂ類は２基（ＳＫ27・33）である。小ピットの数はＳＫ26が２基であるほかは１基ずつである。

Ⅱａ類は６基（ＳＫ３・６・10・12・24・36）、Ⅱｂ類は３基（ＳＫ28・29・32）、Ⅱｃ類は５基（ＳＫ４・25・34・35・37）、Ⅱｄ類は１基（ＳＫ38）である。

配列　陥穴状土坑は標高141～137mの北西から南東に緩やかに下る斜面上に分布している。Ⅰａ類・Ⅰｂ類・Ⅱａ類は等高線に対してほぼ直行するか平行する向きで並んでいる。Ⅱｂ・Ⅱｃ類は等高線にほぼ平行して並んでいる。各分類ごとに配列をみると次のようになる（図版５）。

Ⅰａ類　Ⅰａ類は北東から南西へ並ぶＳＫ26・７・５の列と北西から南東へ並ぶ13・11の列がある。陥穴状土坑間の距離はＳＫ26とＳＫ７が４ｍ、ＳＫ５とＳＫ13が15m、ＳＫ13とＳＫ11が27mとばらつきがある。各陥穴状土坑の長軸は列に対してほぼ直行する。

Ⅰｂ類　ＳＫ33はⅠａ類の列上、ＳＫ５・13の間に存在する。ＳＫ27はほかの陥穴状土坑とは離れて単独で４Ｂ９に存在する。

Ⅱａ類　Ⅱａ類は北東から南西へ並ぶＳＫ６・36の列と、北西から南東へ並ぶＳＫ３・24・10・12の列の２列が認められる。陥穴状土坑間の距離はＳＫ６とＳＫ36が30m、ＳＫ３とＳＫ24が12m、ＳＫ24とＳＫ10が29m、ＳＫ10とＳＫ12が10mである。各陥穴状土坑の長軸は、ＳＫ12以外は列にほぼ直行する方向を向いている。

Ⅱｃ類　Ⅱｃ類は北から南へ並ぶＳＫ28・32・29・37の列と、それに並行する形で10mほど西側に並ぶＳＫ34・35・25の２列が認められる。陥穴状土坑間の距離はＳＫ34とＳＫ35が５ｍであるほかは、10～15mである。

Ⅱｄ類　Ⅱｄ類のＳＫ38は単独で４Ｆ20に存在する。

規模　上部は原形を留めていないので、底部で検討する。

底部の長軸長・短軸長の平均値は次のようである。Ⅰａ類76×41.1㎝、Ⅰｂ類72.5×52.25㎝、Ⅱａ類77.6×36.1㎝、Ⅱｂ類58.3×49.7㎝、Ⅱｃ類44.8×39.4㎝。深さは現存部分で70～90㎝である。なお、Ⅰａ類の小ピットの深さの平均値は18.8㎝である。

Ⅰａ類、Ⅰｂ類は短軸長で約10㎝の差があるが、長軸長はほぼ同じ長さであることが分かる。また、Ⅰａ類とⅡａ類は長軸・短軸ともほぼ同じ長さである。短軸長で比較すると、Ⅱｂ類はⅠｂ類に近い値を示し、Ⅱｃ類はⅠａ類・Ⅱａ類に近い値を示す。

覆土　残存部の覆土の堆積状況は、各類とも基本的に水平堆積である。覆土はⅡｂ類・Ⅱｃ類が暗褐色・褐色系、Ⅰａ類・Ⅰｂ類・Ⅱａ類が黒褐色・暗褐色・褐色系であり、そこに二本木岩屑流堆積物由来とみられる黄褐色土あるいは明黄褐色土の入った層が挟在している。

出土遺物　ＳＫ13から剝片１点と磨石類１点(図版９－28)、ＳＫ26の攪乱部分から縄文土器Ｂ群１類(図版６－37）が出土した。

Ｃ．その他の遺構（図版２・４・５・30～33）

(1)　焼土遺構

ＳＫ16　６Ｇ19に位置する。平面形は長楕円形を呈するが、本来は２基の土坑が切り合っていたものと推定される。底面に被熱した土の混じる層が堆積している。

ＳＫ18　９Ｊ12に位置する。この土坑の北側は調査範囲外であったので発掘したのは南側だけである。底面は被熱しており、底部には炭化物の多量に含まれる土が堆積している。

ＳＫ39　８Ｈ16に位置する。平面形は楕円形で、掘り形は擂鉢状を呈する。底部に炭化物を含む被熱した土が堆積している。

ＳＫ31　６Ｇ22に位置する。平面形が楕円形を呈する、ごく浅い皿状の土坑である。覆土には被熱した土がブロック状に含まれている。

(2)　土坑・ピット

ＳＫ１　７Ｈ13に位置する。平面形は楕円形を呈する。底面から直立する形で１個体分の縄文土器Ｃ群２類の下半部（図版６－31）が出土した。土器の下からは石匙（図版９－26）が１点出土した。また、覆土中から剥片、上面から砥石（図版９－27）が出土した。砥石は形態的に新しく、出土位置も土坑上面ということから、本来この土坑中にあったのではなく、後世の混じり込みと推定される。

ＳＫ２　５Ｈ20に位置する。平面形は円形で、掘り形は皿状を呈する。ＳＩ１の北西隅に切られている。土器片２点が出土したが、細片のため時期の特定にはいたらなかった。

ＳＫ８　９Ｈ16に位置する。平面形が隅丸長方形を呈し、掘り形が擂鉢状を呈する土坑である。検出面での規模・形態が陥穴状土坑Ⅱａ類に類似する。

ＳＫ14　５Ｈ６に位置する。平面形は隅丸長方形で、掘り形は浅い皿状を呈する。縄文土器（図版６）が６点出土し、Ａ群１類（32）やＣ群５類（33）などに分類される。

ＳＫ17　４Ｇ23に位置する。平面形は長楕円形、横断面形はＵ字形である。縄文土器Ｃ群２類が５点（図版６－34～36）出土した。

ＳＫ21　７Ｈ22に位置する。平面形は円形で、底面に小さな落ち込みがある。木の根による攪乱の可能性もある。

ＳＫ30　５Ｈ３に位置する。平面形は円形を呈し、掘り形は皿状である。縄文土器Ｃ群７類（図版６－38）と不定形石器１点（図版９－29）が出土した。

Pit20　９Ｊ17に位置する。覆土に炭化物が含まれている。

Pit23　４Ｈ10に位置する。覆土に焼礫が含まれる。

4．遺　物

Ａ．土　器（図版６・７・34・35）

本遺跡からは490点の縄文土器が発見され、その多くは1号住居跡およびその周辺の4～6Ｇ・Ｈ付近から出土している。時期的には縄文時代早期～晩期のものが認められるが、中心は前期である。胎土中に凝灰岩と考えられる白色で軟質な礫や砂の混入が目立った。器壁の厚みは７～８㎜のものが多く、過半数を占める。

(1)　分　類

分類は、以下のように時期ごとにＡ群・Ｂ群・Ｃ群に大別し、さらに群内を文様や器種によって細別した。

Ａ群　縄文時代前期後葉の土器

１類　縄文地上に半截竹管による平行沈線で文様が施文されている深鉢。

２類　無文地上に半截竹管による平行沈線で文様が施文されている深鉢。

3類　羽状縄文が施文されている深鉢。

4類　斜縄文が施文されている深鉢。

5類　無文の有孔鉢。

B群　縄文時代中期初頭の土器

1類　半截竹管による平行沈線と単沈線で斜格子目文が施文されている深鉢。

2類　縄文地上に半截竹管による平行沈線で文様が施文されている深鉢。

3類　無文地上に半截竹管による平行沈線で文様が施文されている深鉢。

C群　その他の土器

1類　縄文時代早期前半の土器

2類　縄文時代前期中葉の土器

3類　縄文時代前期末葉の土器

4類　縄文時代中期後葉の土器

5類　縄文時代後期後半の土器

6類　縄文時代晩期後葉の土器

7類　時期不明の土器

(2)　遺構出土の土器（図版6－1～38）

a．ＳＩ１（1～30）

1はＣ群2類に分類される。2～9はＡ群1類に分類され、前期後葉唯一の有文土器である。同一個体の可能性もある。6は焼成良好、2の外面にはスス状炭化物が付着している。10～12・18はＡ群3類である。10・12は焼成良好、12は内面の整形も丁寧である。また、12の外面にはスス状炭化物が認められる。13～17・19～25はＡ群4類で、縄文原体は13がＬＲ、16～18がＲＬ、23はＬである。13・14は口唇部に刻目状または指頭状の圧痕が認められる。16・20・24・25は焼成良好で、13～15・22は内面の整形が丁寧である。21・22・24は外面にスス状炭化物の付着が認められる。26～29はＡ群5類である。29は口縁から底部近くまでの破片が出土し、器形の推定復元がほぼ可能な土器である。法量は器高約19㎝・口径約28㎝と推定され、色調は内外面明褐色で、整形は内外面とも丁寧である。ほかでは26・27が内面の整形が丁寧である。30はＣ群5類である。縄文が帯状に磨消され、無文部はよく磨かれている。焼成は良好である。以上のように本住居跡からはＡ～Ｃ群土器が出土しているが、その主たるものはＡ群土器すなわち前期後葉の土器である。

b．ＳＫ１（31）

Ｃ群2類に分類される。底部から胴部下半にかけての大型破片である。底径約16㎝を測り、器面全体に羽状縄文が施されている。胎土中に繊維を含むほか、大量の凝灰岩が混入している。このほか補修孔が2か所に穿かれている。

c．ＳＫ14（32・33）

32はＡ群1類に、33はＣ群5類に分類される。32は口縁が波状となり、地文の縄文は羽状である。33は平口縁に小突起が付された深鉢である。無文地に単沈線で横位の平行沈線を引き、沈線間に左下がりと右下がりの単沈線を充塡して綾杉状の文様を描出している。凝灰岩を含み、焼成は良好である。

d．ＳＫ17（34～36）

いずれもＣ群2類に分類される。34は羽状縄文が施文されている。胎土中には繊維が少量含まれるほ

か、凝灰岩の混入も認められる。外面にはスス状炭化物が付着している。35はわずかに横位の沈線が認められ、以下はＬＲの縄文が施文されている。胎土中には繊維少量と凝灰岩が混入している。36は羽状縄文が施文され、胎土には繊維を混入する。34・35と同一個体の可能性がある。

ｅ．ＳＫ26（37）

Ｂ群１類に分類される。胎土中に金雲母が混入し、内面にスス状の炭化物が付着している。

ｆ．ＳＫ30（38）

Ｃ群７類に分類される。ＬＲの縄文が施文された土器で、胎土に凝灰岩が混じる。

(3)　遺構外出土の土器（図版６－39～50、図版７）

39・40はＡ群１類である。39は胎土に凝灰岩と雲母を含む。40はＲＬの縄文を地文として施文し、胎土に石英を含み、焼成は良好である。41～45はＡ群２類である。すべての胎土に凝灰岩を含む。46～58・62はＡ群３類である。やはり凝灰岩を含むものが目立つ。48・53・55は焼成が良好で、52は内面にスス状炭化物が付着し、53は内外面にスス状炭化物が認められる。48・50は住居跡の付近から出土しており、50は内面の整形が丁寧である。59～61・63～72・113はＡ群４類である。60はＲの縄文、61・65・70はＬＲの縄文、63・64・68はＲＬの縄文がそれぞれ施文されている。前述したものと同じく胎土中に凝灰岩を含むものが目立ち、65・69・72は焼成が良好、59は内面の整形痕が顕著である。113の底部は平底であるが、若干丸底気味である。焼成が良好で、内面にスス状炭化物が付着している。底径は約12㎝である。73～77はＡ群５類である。73は焼成良好である。77の内外面には漆のようなものが塗布されている。73～76は外面に磨きが認められ、73・76は特に丁寧である。

78～81はＢ群１類である。凝灰岩に代わって胎土中に雲母が含まれているものが目立つようになる。79～80は焼成が良好である。82～85はＢ群２類である。雲母の混入が目立ち、82・83は焼成が良好である。82は外面にスス状炭化物の付着が認められる。86～88はＢ群３類である。86・87は焼成が良好で、86は内面にオコゲ状炭化物、外面にスス状炭化物の付着が認められる。87は外面にスス状炭化物が付着している。

89はＣ群１類である。山形の押型文が横位帯状施文されており、焼成良好で器壁も薄い。90～93はＣ群２類である。90は単沈線で綾杉状の文様が施文されている。91～93は全面に縄文が施されているもので、92はＲＬの縄文が施文されている。91は外面にスス状炭化物が付着している。すべての胎土に繊維が混入しており、凝灰岩の混入も目立つ。94～96はＣ群３類である。94は「トロフィー形の土器」と呼ばれているものの脚部破片で、背竹管で施文された有節沈線で文様が施文されている。焼成良好で、内面にオコゲ状の炭化物が付着している。95・96は間隔をおいて数条の結節浮線が添付されている。97はＣ群４類である。キャリパー崩れの器形で、縄文地上に横位の幅広沈線が引かれている。98～105はＣ群５類と考えられるものである。98はやや幅広の沈線で横位区画を行い、その区画内に同一工具で綾杉状沈線文を充填したものである。焼成は良好である。99・100は縄文を施文したもので、共に住居跡付近から出土している。101～104は無文土器である。102は外面にオコゲ状炭化物が付着し、103～105の外面にはスス状の炭化物が認められる。101は内外面が磨かれている。106はＣ群６類である。107～112はＣ群７類である。縄文のみが施されており、時期の特定には無理があるが、108以外の胎土には凝灰岩が含まれていることから前期の可能性が考えられる。109はＬＲの縄文が施文されている。107・111の外面にはスス状炭化物が付着している。112は底部で、網代痕が認められる。

B．石　器（図版８～10・36～37）

萩清水遺跡出土の石器総数は61点である。その内42点は遺構からの出土で、残りは包含層あるいは風倒木痕からの出土である。

主な石器は砥石とその破損品および未製品５点、擦切石器６点、不定形石器７点、石匙２点、石鏃１点、剥片類などがある。石器組成が砥石類と剥片類に偏っていること、石材が砂岩と無斑晶質安山岩に偏っていることが特徴である。

なお、石器の分類は次に示すとおりである。

砥石　断面凹状の砥面や溝状の砥面をもつ石器。溝状の砥面をもつものは「筋砥石」として区別した。

擦切石器　剥片の縁辺にそれと並行する方向の擦り跡をもつ石器を擦切石器として一括した。

石鏃　「矢の先端につける石製の矢じり」(鈴木1991)。

石匙　「一端につまみ状の突起をもち縁辺を刃部とする石器」(田中1991)。

石錐　錐状の突出部をもつ石器。

不定形石器　従来「掻・削器類」・「スクレイパー」・「二次加工のある剥片」・「使用痕のある剥片」・「微細剥離のある剥片」・「不定形剥片石器」などといわれている石器を一括し、細分類は(高橋保雄1990)に従った。

磨石類　「素材となる礫（転石）の正面および側縁に磨痕・敲打痕・凹痕を有するもの」(北村1990)。使用痕の組み合わせで以下の７類に細分される（高橋保雄1990)。

Ａ類：磨痕。

Ｂ類：磨痕＋凹痕。

Ｃ類：磨痕＋敲打痕。

Ｄ類：磨痕＋凹痕＋敲打痕。

Ｅ類：凹痕。

Ｆ類：凹痕＋敲打痕。

Ｇ類：敲打痕。

以上の分類に従いながら、記載は実測図の左側を表面（背面)、右側を裏面（腹面）として行う。

分類	刃部形状			刃部ライン	素材	二次加工部数	細分類
A類	スクレイパー 中型・急角度・連続制離			－	縦長	側縁と端部	A１類
					横長	片側縁と底縁	A２類
B類	スクレイパー 小型・急角度・連続制離			外弯状	縦長	片側縁と端部	B１類
					横長	底縁	B２類
C類	鋸歯縁石器 大型・中型・急角度・鋸歯状制離			直線状	縦長・厚手	片側縁	C１類
					横長・厚手	底縁	
				内弯状	縦長・厚手	片側縁	C２類
					横長・厚手	底縁	
				外弯状	縦長・厚手	片側縁	C３類
					横長・厚手	底縁	
	スクレイパーと鋸歯縁石器の複合形			－	厚手	－	C４類
D類	鋭利な尖端部をもつ石器	大型・急角度制離		直線状	厚手	片側縁（一方の側縁は古い剥離面や折断面等を利用する）	D１類
				内弯状	厚手		
		大型・浅角度制離		直線状	厚手	片側縁(D１類と同じ)	D２類
						両側縁	
				内弯状	厚手	片側縁(D１類と同じ)	
						両側縁	
		小型制離		直線状	厚手	片側縁(D１類と同じ)	D３類
				内弯状		両側縁	
				直線状	薄手	両側縁	石錐
				内弯状			
E類	挟入石器（ノッチ）	大ノッチ	大型・中型・急角度制離	内弯状	縦長・厚手	側縁	E１類
					横長・厚手	底縁	
			大型・中型・浅角度制離		縦長	側縁	
					横長	底縁	
		小ノッチ	中型・急角度制離	内弯状	縦長	側縁	E２類
					横長	側縁・底縁	
			小型制離		縦長	側縁	
					横長	側縁・底縁	
F類	中型・小型・急角度・不連続制離			－	縦長	側縁	F１類
				端部に丸味	縦長	側縁と端部	F２類
				－	横長	底縁	F３類
						底縁と側縁	
G類	大型・中型・浅角度制離			直線状	縦長	側縁	G類
					横長	底縁	
				外弯状	縦長	側縁	
					横長	底縁	
H類	無加工（使用痕的微細制離・使用痕）小型・浅角度制離			外弯状	背面は自然面 横長	底縁	H類
I類	端部に小型・連続制離			端部に丸味	縦長・薄手	端部	I類
					横長・薄手		
J類	無加工（使用痕微細制離・使用痕）			－	縦長	側縁	J類
					横長	側縁・底縁	

※　ゴシック以外の明朝体は、一般的傾向を表したものが多い。

第２表　不定形石器分類表　（高橋1990）

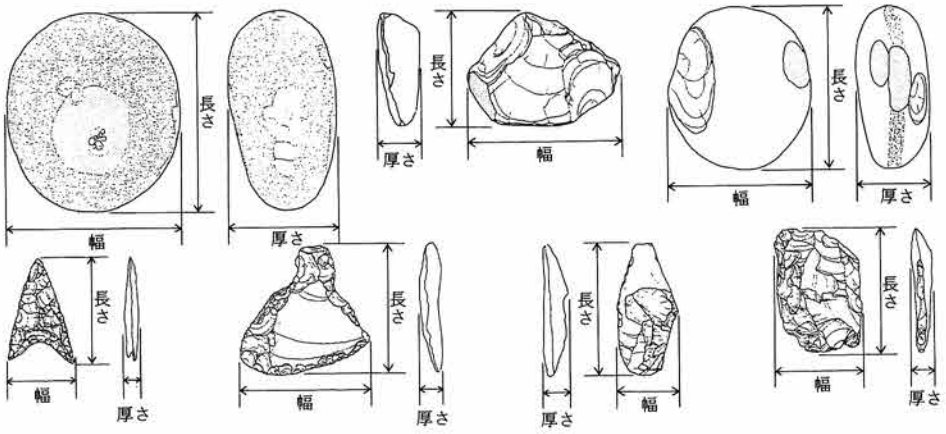
(1)　遺構出土の石器（１～29）

ａ．ＳＩ１（１～25）

ＳＩ１からは、破損品を含めた砥石５点、擦切石器６点、石核２点、不定形石器４点、石錐１点、剥片14点、磨石類１点が出土した。このほか、砥石類・擦切石器と同質の砂岩の破砕礫が３点ある。

砥石（１～５）砥石はすべて砂岩製であるが、目の細かいものと粗いもの[註)]がある。

註）砂岩の目の細かさの基準は（鈴木1991）によった。



第６図　石器の計測法

１はＳＩ１の中央の浅い掘り込みの中に表面を上にして据えられていた。(図版１）全面が敲打され円形に整えられている。側面と裏面には敲打痕が良く残っている。表面は敲打の後、中心付近が砥面とされている。また、砥面のほぼ中央には直径４㎜ほどの小穴が６個以上開いている。各穴とも先端ほど細くなっているので錐状の工具によりつけられたと推定される。裏面下半には幅広で浅い溝状砥面が２本ある。

２は表裏面に砥面をもつ筋砥石である。表面の砥面には長軸方向の２本の溝状砥面が走り、回転により生じたと思われる直径４㎜前後の漏斗状の窪みが３か所ある。裏面の砥面には深さ２～５㎜、長さ15～20㎜の表面に比べると深くて短い溝が長軸方向に６本、短軸方向に３本走っている。これも研磨作業によって生じたと思われるが、溝底は凹凸があり平滑ではない部分がある。砥面以外の部分には敲打痕が残っている。上下と右側面にある多数の剥離痕は、擦切石器の素材となる剥片が剥離されていた可能性がある。

３は筋砥石の破片で、浅くて短い溝状砥面をもつ。４は砥面はないが表面が敲打されていることから、砥石の未製品と考えた。

５は全面が敲打された後、中央に細長い砥面が設けられている。裏面と上半分を欠くが、上半分を失った際の剥離面の、砥面と接する稜線が擦れて鈍くなっていることから、破損後も使用されていたことが分かる。

擦切石器（６～11）砥石と同質の砂岩が用いられているが、目の細かさで微粒～極粗粒に分けられる。

擦切石器には側面に筋砥石の溝が残されているもの（６・７）や、砥面が残されているもの（８・９・11）があり、砥石を石核として素材が獲得されていたことが分かる。６に残る３本の溝状砥面は筋砥石の溝状砥面に比べて細くて深い。10のように砥面などがないものは、素材を石核から得ていたか、砥石からの剥離が進んだ段階で得られた剥片を素材としていたものと推定される。

刃部形態は直線的なもの（10・11）と曲線的なもの（６～９）がある。直線的な刃部の断面形は片刃に近い形態で稜線がある。曲線的な刃部の断面形は丸みを帯びたＵ字形をしている。

石核（12・13）石核はすべて砂岩製である。筋砥石の素材を作出したものと推定される。

12は表面に敲打面が残り、裏面に研磨された面が残る。13は右側面で大きく分割された後、左側面を作業面として剥片が剥離されている。作出される剥片の大きさに規格性はない。

石錐（14）剥片の打面部側に錐部を作り出しているが、短く、鋭さに欠ける。

不定形石器（15～18）15は上半を欠損しているが、剥片の末端に刃部が作出されている。16は右半分が節理面から折断された幅広の横長剥片が素材とされている。末端と左側縁に刃部が作出されている。17は横

長剝片の腹面下端部に微細な調整剝離痕が認められる。素材の打面は礫面を調整して得られた単剝離打面である。18は背面に礫面をもつ厚手の剝片が素材とされている。末端部が大きく剝離された後、微細な調整が背面側に加えられている。

剝片（19～24）剝片は14点出土した。使用石材の内訳は無斑晶質安山岩がもっとも多く７点、次いで砥石類と同質の砂岩６点、頁岩１点である。

19・20は無斑晶質安山岩製の剝片で背面を多方向からの剝離痕に覆われている。21～24は砂岩製の剝片で、擦切石器の素材になりそうなものである。21の背面には溝状の砥面が残されており、筋砥石から剝離されたことが分かる。

磨石類（25）　25はＣ類で、被熱して帯状にススが付着している。

ｂ．ＳＫ１（26・27）

ＳＫ１からは石匙、剝片、砥石が各１点出土した。

石匙（26）横形の石匙で、刃部は半月状を呈する。

砥石（27）ＳＩ１出土の砥石とは異なる凝灰岩製の砥石である。このような板状の砥石は古代以降に類例が見られることから、これも縄文時代のものというよりは古代以降のものが紛れ込んだ可能性が高い。

ｃ．ＳＫ13（28）

ＳＫ13からは剝片と磨石類Ｅ類（28）１点が出土した。28は表面に２か所の凹みをもち、裏面は節理面から割れている。剝片は背面に砥面とみられる滑らかな面をもつ。

ｄ．ＳＫ30（29）

ＳＫ30からは不定形石器Ｊ類（29）が１点出土した。29は無斑晶質安山岩製の横長の剝片である。打点は点打点で、腹面下半部が大きくヒンジフラクチャーを起こしている。剝片の上縁に刃こぼれ状の剝離痕が認められる。

(2)　遺構外出土の石器（30～38）

遺構外から出土した石器には石鏃、箆状石器、石匙、両面調整石器の破損品各１点、磨石類２点、不定形石器２点、剝片９点がある。このほかに水磨した黒曜石の転石２点があるが、石器の素材を獲得できるようなものではない。

石鏃（30）無斑晶質安山岩製の凹基無茎鏃である。左脚をわずかに欠く。

箆状石器（31）裏面中央部に素材の主要剝離面と見られる部分が残っていることから、素材は厚手の剝片であったと推定される。

石匙（32）三角形の石匙で、裏面には素材の主要剝離面が大きく残されている。

両面調整石器破損品（33）横方向からの力で器体半分を欠損していることから、製作途中での破損品と推定される。

不定形石器（34・35）34は上半分を欠くが、剝片の縁辺部に細かい剝離が施されている。35は左側面の礫面を打点とする横長の剝片が素材とされている。左側縁を中心に調整を施し、素材の形状を生かしながら尖頭状に仕上げられている。

剝片（36）無斑晶質安山岩製で、礫面を打面としている。

磨石類（37・38）37はＡ類で右側面の稜上とそれに接する表裏面の一部に磨面がある。38はＣ類で右側面の一部とそれに接する表面の一部分に磨面がある。周縁部には敲打痕が認められる。

5．まとめ

A．遺　構

(1)　竪穴住居

萩清水遺跡で検出された竪穴住居跡はＳＩ１のみである。ＳＩ１の構築時期は出土土器から諸磯ｂ式期並行期と推定される。

諸磯ｂ式期の住居跡の検出例は新潟県では吉川町古町Ｂ遺跡（泰1992)、中里村鷹之巣遺跡（島田1986）があるが、鷹之巣遺跡については出土土器から諸磯ｃ式期にかかる可能性もある。県外では長野県阿久遺跡(戸沢1988)、同県大倉崎遺跡(常磐井1990)、群馬県糸井宮前遺跡（関根1986)、埼玉県東光寺裏遺跡（中島1980）などがあるが、総じてこの時期の住居跡の検出例は少ないようである。

ここで、少ない検出例ではあるが、諸磯ｂ式期の住居について気付く点を２、３挙げておく。

平面形は有尾式・黒浜式の時期にあまり見られなかった円形のものが主体となり、隅丸方形のものは減少する。隅丸長方形のものは影をひそめてしまう。規模は直径約４～９ｍであり、有尾式・黒浜式期に比べ若干大形化している。周溝をもつものは古町Ｂ遺跡で確認されているが、全体では少数になる。柱穴は住居の壁に沿って並ぶようである。炉は地床炉が減り、石囲炉や土器埋設炉が目につくようになる。炉は基本的には住居中央に設置されていたようであるが、糸井宮前遺跡134号住居址では石囲炉や土器埋設炉が１つの住居内に複数存在するため、この限りではない。

さて萩清水遺跡のＳＩ１だが、東半分が未調査の不完全な資料であるため、わかる範囲で検討してみたい。平面形は隅丸方形、規模は約６ｍであり、当該期としては中程度の住居である。周溝は存在するが全周しない。炉や柱穴は特定できなかった。なお、ＳＩ１北西隅にあるＳＫ２については、古町Ｂ遺跡例のように壁際に貯蔵穴をもつ例もあるが、ここでは切り合い関係が認められており、同時存在の貯蔵穴とするには問題が残るだろう。

上記のとおり、ＳＩ１は砥石を据えた土坑があるほかは規模・形態とも諸磯ｂ式期の一般的な住居形態であるといえる。

(2)　陥穴状土坑

萩清水遺跡では22基の陥穴状土坑が検出された。これは新井市教育委員会によって調査された隣接地で検出された200基あまりからなる陥穴状土坑列と一連のものと考えられる。よって、ここでは配列については触れず、陥穴状土坑の構築時期の検討を行いたい。

検出された陥穴状土坑は底部の小ピットの有無で２大別、平面形で４大別される。Ⅰａ・Ⅱａ類は板倉町峯山Ｂ遺跡（泰1986）、湯沢町岩原Ⅰ遺跡（北村1990）・岩原Ⅱ遺跡（佐藤1987）で検出されている。峯山Ｂ遺跡では住居跡との切り合い関係から、同型のものの構築時期を縄文時代前期前葉以降末葉以前としている。また岩原Ⅱ遺跡の出土土器の主体が諸磯ｂ式土器であることから、萩清水遺跡のⅠａ・Ⅱａ類もおよそこれと近い時期に構築されたと考えられる。Ⅰｂ類は岩原Ⅰに類例があるが、時期を推定するような根拠に乏しい。Ⅱｂ・Ⅱｃ類は平面形は円形と隅丸方形で若干異なるが、掘り方は共に筒状である。このような細い筒状の陥穴状土坑の例をみないことから、おそらく漏斗形の陥穴状土坑の上半分が削平されて、筒状になったと推定される。漏斗形の陥穴状土坑の構築時期については岩原Ⅰ遺跡で早期末葉から

前期前葉、妙高高原町大堀遺跡（立木ほか1996）で早期前葉など、比較的古い時期が当てられている。萩清水遺跡でも少数だが早期の土器が出土しているので、上限を早期として前期前葉ぐらいまでの構築時期を仮定できるのではないか。Ⅱｄ類のような溝状のものは類例も多いが、構築時期は前期前葉から後期初頭までの幅があり形態からだけでは判断は難しい。

次に覆土を見ると、色調で２大別される。暗褐色・褐色系の覆土のⅡｂ・Ⅱｃ類、黒褐色・暗褐色・褐色系のＩａ・Ｉｂ・Ⅱａ類である。Ⅱｂ・Ⅱｃ類は前期前葉までの構築時期が仮定されたものであり、Ｉａ・Ⅱａ類は前期前葉以降末葉以前の構築時期が推定されたものである。よって、これらの陥穴状土坑は前期前葉の中で共存していたか、あるいは前期の中でⅡｂ・Ⅱｃ類→Ｉａ・Ⅱａ類の前後関係があったものと仮定できるのではないか。また、覆土が共通するということは構築時期の同時性は証明できないが、埋没時期は近いことが推定できる。よって、Ｉｂ類については構築時期は推定できないものの、埋没時期はＩａ・Ⅱａ類に近いと考えられる。

B．遺　物

(1)　土　器

先述したように当遺跡からは、前期後葉を中心に早期前半～晩期後葉の土器が断続的に出土している。そして、それらの土器は時期や文様・器種によって３群15類に分類されている。しかし、出土量は決して多くはなく、１回の発掘調査の出土量としてはむしろ少量の部類に含まれる。それゆえ、分類された土器全体について検討を加えることは無理があり、差し控えたい。そこで、ここでは当遺跡を特徴づけるＡ群１類土器に限り、その器形・文様、分布、編年的位置などについて少し検討を加えてみたい。

まずは器形と文様である。両者は、完形品や大形破片が出土していないことから不明な点が多い。しかし、出土している破片から推測してみると次のようなことが言える。器形は、口縁形は平口縁（８）や緩やかな波状（3・32）および小突起(4)をもち、口縁部は直立（4・８・32）または内彎気味(3)、胴部は筒状(40)である。文様は、平行沈線による文様施文は口縁部に限られ、胴部は斜行または羽状の縄文のみが施文されている。口縁部文様は、口縁と頸部に数条の平行沈線が巡って平行沈線帯を作り、それらの平行沈線帯間に数条１組の平行沈線で直線・曲線文様が施文されている。

第７図　Ａ群１類土器の分布

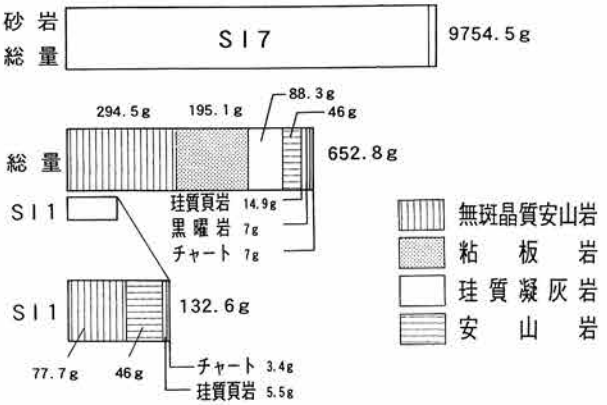
次にその出土遺跡と分布であるが、第７図の様に今のところ県内では当遺跡の他、巻町豊原遺跡（小野・前山ほか1988、小野1994）、刈羽村刈羽貝塚（八幡1958、柏崎市史編さん委員会1987）、吉川町古町Ｂ遺跡（泰・小林ほか1992、寺崎1997）、柿崎町鍋屋町遺跡（室岡・寺村1960、寺村・三井田・関1959）の４か所で、県外では長野県飯山市大倉崎遺跡（高橋・中島・金井1976、高橋ほか1990）の計５遺跡で出土が確認されている。分布は、今のところ本県西部の海岸部を中心に、妙高山麓および長野県の飯山盆地で認められる。これらの土器を概観してみると、器形では口縁形態において、前述したもののほか明確な波状を呈するものが大倉崎遺跡で認められる。文様では施文技法において、縄文地上に平行沈線のみで文様を描くものと平行沈線で文様を描き、その沈線間に同一の半截竹管で爪形を施したものの２者が存在する。編年的位置付けについては、１号住居跡でＡ群４類の29が伴うことから諸磯ｂ式に並行することはある程度理解できるが、本遺跡出土のもののみではこれ以上踏み込んで言及することはできない。そこで、同タイプの土器が出土している古町Ｂ遺跡、大倉崎遺跡、刈羽貝塚の事例を参考にこの問題を少し考えてみたい。

古町Ｂ遺跡では27竪穴住居跡から同タイプの土器が出土している。それによると同タイプの土器と諸磯ｂ式新段階の土器、刈羽式土器、蜆ケ森式土器が伴出している。この刈羽式土器は、刈羽貝塚の混貝土層出土の刈羽式土器と同タイプである。一方、諸磯ｂ式の古段階に並行すると考えられる５号竪穴住居跡出土の土器の中にはＡ群１類土器は認められない。大倉崎遺跡では実測図化が可能な大形破片などがＢ地点１号住居跡から出土しており、やはり諸磯ｂ式新段階の土器が伴出する。刈羽貝塚からは、当遺跡のＡ群１類土器よりも古手と目される土器が貝層中から、Ａ群１類土器と並行かやや古手と考えられる土器が貝層よりも上位の混貝土層から出土している。また、豊原遺跡では爪形が施されたものは、施されないものよりもやや古いとの所見が述べられている。

以上のように、Ａ群１類土器は諸磯ｂ式に並行する在地の土器で、時期的には爪形をもたない「新段階」と爪形が施された「古段階」に２分される。当遺跡出土のものは爪形をもたないことから「新段階」に比定され、諸磯ｂ式新段階に並行するものと考えられる。なお、豊原遺跡や刈羽貝塚および古町Ｂ遺跡の出土状況を見てみると、同一層位や同一遺構に刈羽式土器が伴出している。これらの状況から、Ａ群１類土器は刈羽式を構成する有文土器の一角を占めるのではないかと考えられる。

(2)　石　器

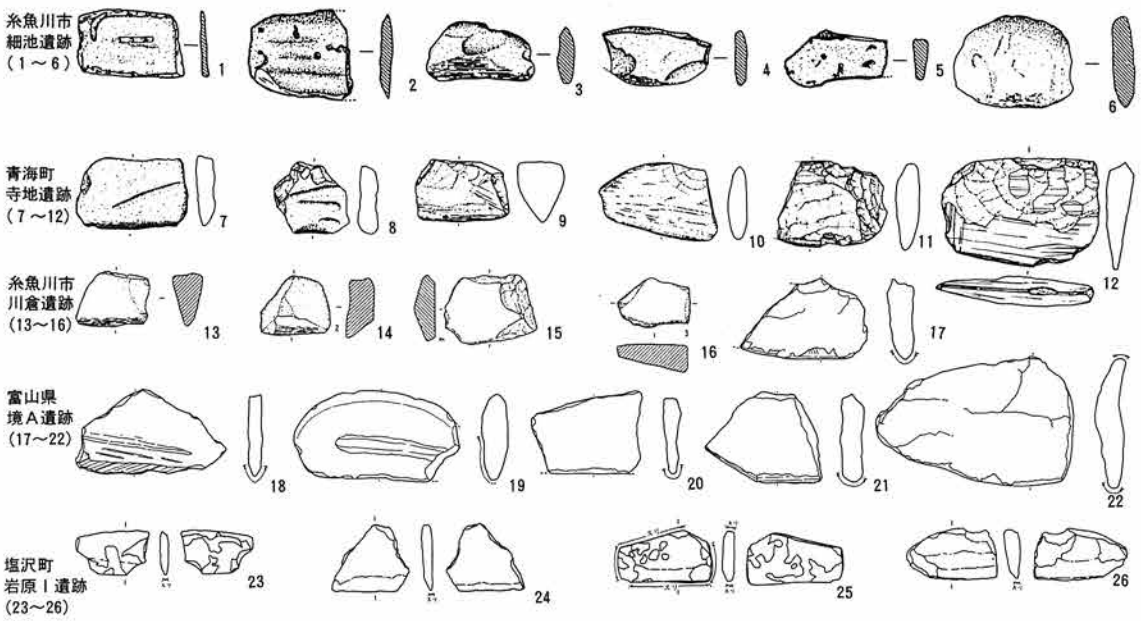
萩清水遺跡ＳＩ１出土の砥石類は、破損品を含めた砥石５点、擦切石器６点、石核２点がある。砥石のうち３点は溝状の砥面がある筋砥石である。ただ、未製品や製作途中で出る屑などが出土していないことから、被加工物は不明である。そのため他遺跡と比較しながら、萩清水遺跡の砥石類、特に筋砥石と擦切石器の対象物を考えてゆきたい。ただし、縄文時代前期の遺跡で、筋砥石や擦切石器が出土した例はほとんど無いので、比較する遺跡は縄文時代前期～晩期の遺跡とした。



第８図　萩清水遺跡の砂岩および剝片石器の重量構成

ａ．擦切石器について

擦切石器が出土した県内の遺跡には湯沢町岩原Ｉ遺跡（北村1990）、塩沢町五町歩遺跡（高橋1992）・小千谷市城之腰遺跡（藤巻1991）、



第９図　擦切石器集成図

糸魚川市長者ケ原遺跡（土田ほか1986）・岩野Ｂ遺跡・川倉遺跡・細池遺跡（土田1986）、青海町寺地遺跡（寺村ほか1987）がある。近県では富山県境Ａ遺跡（山本1990）・石川県チカモリ遺跡（増山1984・南1984ａ・ｂ）などがある。

境Ａ遺跡では玉類と磨製石斧が製作されていた。境Ａ遺跡の擦切石器には刃部が直線的なものと、外彎したり内彎したりするものがある。直線的なもの、あるいは外彎するものは擦切技法に用いられた可能性が高いが、内彎したり波状になるものはほかの軟質材料の擦切に用いられたか、別の使用法を考える必要があるとされている（山本1990）。

糸魚川市の４遺跡では青海川の川底から産出した硬玉を原料に玉造が行われていた。そのため、これらの遺跡の擦切石器は主に玉造の工具として使用されていたと推定できる。擦切石器は刃部を下にした場合の最大幅が～９㎝ほどで、刃部形態は直線的なものと曲線的なものがある。刃部断面形はＶ字形、Ｕ字形、凵字形があり、一定ではない。器体の最大厚は0.5～２㎝の幅がある。石材は砂岩である。

岩原Ⅰ遺跡の擦切石器は滑石の原石に残る擦切痕に完全に一致することから、原石を分割するために用いられたと推定されている。刃部は長さが～７㎝、断面形は片刃に近いＶ字状を呈する。

これに対して萩清水遺跡の擦切石器は最大幅～9.7㎝で、刃部形態は直線的なものと曲線的なものがある。刃部断面形はＵ字形あるいは片刃に近いＶ字形である。器体の最大厚は１～３㎝の幅がある。

砥石という石器の性質上、大きさの上での厳密な比較はあまり有効ではないと思うが、萩清水遺跡の擦切石器は大きさの点では糸魚川や岩原Ⅰ遺跡のものに近いといえる。刃部形態も凵字形が認められないほかは共通する。以上のように、萩清水遺跡の擦切石器は玉類研磨のための擦切石器に類似するといえる。

ｂ．筋砥石について

筋砥石の研磨対象については、玉類、磨製石斧のほか骨角器、木製品などが挙げられているが、中でも骨角器の研磨が主体であった可能性が高いと指摘されている（宮下1987）。五丁歩遺跡でも擦切石器と共に筋砥石が出土しているが被加工物の出土はなく、骨角器が対象として挙げられている。なお玉類と磨製石斧の両方を製作していた境Ａ遺跡では筋砥石の研磨対象は玉類であり、磨製石斧は対象とならないことが指摘されている（山本1990）。磨製石斧の製作址である神奈川県尾崎遺跡（鈴木1977）や新発田市館ノ

内D遺跡（鶴巻1992）にも筋砥石はなく平砥石のみであり、これを裏付けている。

遺跡から出土した筋砥石を新潟県を主体にまとめたのが第10図である。1～9は玉類の研磨に使用されたと推定される筋砥石であり、10～29は共伴石器に玉類の未製品や敲石が無いことから、玉類の製作に伴わない筋砥石であると考えられる。玉類の製作に伴う筋砥石は溝状砥面の幅が均一かつ直線的であり、溝状砥面が複数ある場合は単位ごとに平行してほぼ等間隔に走っている。これに対して、玉類の製作に伴わない筋砥石の溝状砥面は1本1本が直線的ではなくとぎれとぎれに走っており、幅も一定していない。複数の溝状砥面がある場合は平行せず、不規則に並んでいる。このように、玉類を研磨した筋砥石とそれ以外の筋砥石では、溝状砥面のあり方に違いが認められる。この結果と萩清水遺跡の筋砥石を比較してみる。

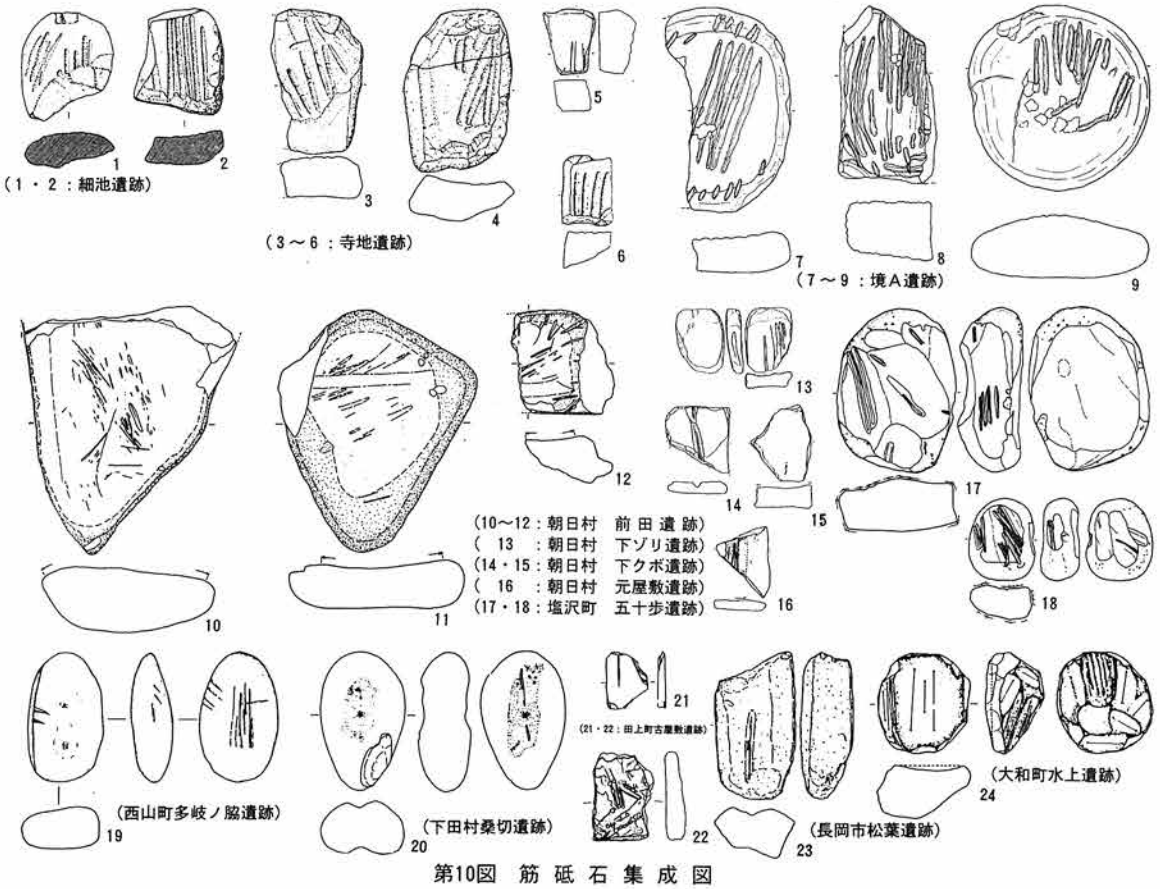
萩清水遺跡の筋砥石の溝状砥面はいずれもごく浅く、幅や走行方向が一定ではない。これは玉類製作用ではない筋砥石の特徴を示している。組成に未製品や敲石が無いことからも萩清水の筋砥石は玉類以外のもの、骨角器など？を研磨対象にしていた可能性が高いといえよう。

c．ＳＩ１における作業内容について

最後にＳＩ１で行われていた作業内容について検討してみたい。

ＳＩ１の床面には砥石が据えつけられた土坑があった。この砥石は両面に砥面があることから、土坑に据えられたまま常に一定の向きで固定されていたわけではなく、必要に応じて向きを変えて使用されていた可能性が高い。砥石を土坑に保管していたとも考えられるが、土坑の位置が保管のためのものにしては住居の中心に近く、その可能性は低いと思われる。

以上のことから、ＳＩ１では筋砥石や土坑の中に固定された砥石を用いて、ほぼ恒常的に骨角器などの研磨作業が行わていたと推定される。擦切石器については玉類の細部加工に用いられたとも考えられるが、判断材料に乏しいので言及は避けたい。



第10図　筋砥石集成図

第3表　萩清水遺跡　遺構観察表

遺構名	位　置	長軸方向	上端 長軸(cm)	上端 短軸(cm)	下端 長軸(cm)	下端 短軸(cm)	深度(cm)	備　考
S I 1	5H18～20 5HH22～25	－	(595)	－	(566)	－	40	東半分は調査範囲外のため未発掘 竪穴住居跡　砥石類多数・縄文土器
SI1－P1	5H19	－	24	19	14	12	28.7	
SI1－P2	5H19	－	22	19	8	8	6.5	
SI1－P3	5H19	－	27	22	21	15	3.5	
SI1－P4	5H18	－	18	18	9.5	9.5	26.6	
SI1－P5	5H18	－	23.5	19	13	13	27.8	
SI1－P6	5H18	－	20	15.5	11	10.5	19.8	
SI1－P7	5H22	－	24	14	7	6	57.6	
SI1－P8	5H23	－					9.2	東半分は調査範囲外のため未発掘
SI1－P9	5H23	－	56	32	20	18	22.5	覆土に炭化物が含まれる
SI1－P10	5H23	－	19.5	15	8	6.5	14	
SI1－P11	5H23	－	20	12	14	7.5	9.5	
SI1－P12	5H23・24	－	22	13.5	8	7	16.5	
SI1－P13	5H24	－		(56)		(38)	5	一部調査範囲外のため未発掘
SI1－P14	5H24	－	16.5	15	7	7	10.5	
SI1－P15	5H24	－	28	(22)	11	11	45	P16に切られる
SI1－P16	5H24	－	33	28	21.5	11	15	P15を切る
SI1－P17	5H24	－	24	21	14	13	21	
SI1－P18	5H24	－	26	22	13.5	13.5	14	
SI1－P19	5H24・25	－	15	13	8	6	10.5	
S K 1	7H12・13	N－72°－E	80	49	46	32	32	縄文土器(図版6－31)・石匙(図版9－26)・剥片・砥石(図版9－27)
S K 2	5H19・20	N－45°－E	156	－	129.5	92	56	縄文土器　東側をSI1に切られている
S K 3	7D7・12	N－63°－E	84.5	62	68	40.5	78.5	陥穴状土坑Ⅱa類
S K 4	7D14・15	N－50°－E	80	68.5	26	23	61.5	陥穴状土坑Ⅱc類
S K 5	7F9－14	N－40°－W	123	93	86	31	74.5	陥穴状土坑Ⅰa類　底面ピット1基
S K 6	8G2・3	N－11°－W	125	62	100	24	75.5	陥穴状土坑Ⅱa類
S K 7	8H4・5	N－7°－E	114.5	65.5	88	43.5	83	陥穴状土坑Ⅰa類　底面ピット1基
S K 8	9H11～16	N－68°－E	131	62	23	21.5	71	陥穴状土坑Ⅱa類に類似
S K 10	4G18・19	N－59°－E	92	54	84	36.5	76	陥穴状土坑Ⅱa類
S K 11	3H9・10	N－47°－E	106	74	71	32	70	陥穴状土坑Ⅰa類　底面ピット1基
S K 12	3H15・4H11	N－33°－W	92	65.5	60	41.5	68	陥穴状土坑Ⅱa類
S K 13	5F10－15	N－42°－E	121	58	78	30	90	陥穴状土坑Ⅰa類　底面ピット1基
S K 14	5H6－11	N－37°－W	112.5	81.5	78	53.5	26	縄文土器(図版6－32・33)
S K 16	6G14・19	N－87°－E	132	68.5	23	13	40	焼土あり
S K 17	4G23・24	N－61°－W	165	97	78.5	44	61.5	縄文土器(図版6－34～36)
S K 18	9J12	N－18°－W	(86)	(102)	(80)	(91)	31.5	焼土あり
S K 21	7H22	N－66°－E	71	58	44	43	34	攪乱か?
S K 24	6E8・9・13・14	N－72°－E	104	73	75.5	31	77	陥穴状土坑Ⅱa類
S K 25	7G2・3・7・8	N－55°－E	78.5	65.5	48.5	36.5	86	陥穴状土坑Ⅱc類
S K 26	8H14・15	N－14°－W	168.5	91.5	139	69	78	陥穴状土坑Ⅰa類　底面ピット2基
S K 27	4B9・14	N－22°－W	92	86	67	55.5	89.5	陥穴状土坑Ⅰb類
S K 28	8J1・2・6	N－19°－W	84	64	55	52	73.5	陥穴状土坑Ⅱb類
S K 29	6H14	N－38°－E	80	66	53	51	89	陥穴状土坑Ⅱb類
S K 30	5G23・24・5H3・4	N－4°－E	114	106	90	86	39	縄文土器(図版6－38)・不定形石器(図版9－29)
S K 31	6G17・22	N－83°－W	61.5	45.5	39	30	7	焼土あり
S K 32	7I2・7	N－56°－W	80	73	67	46	78	陥穴状土坑Ⅱb類
S K 33	6E21・6F1	N－47°－W	89	70	78	55	80	陥穴状土坑Ⅰb類
S K 34	8H7・12	N－68°－E	93	86	56.5	55.5	90	陥穴状土坑Ⅱc類
S K 35	7H5	N－41°－W	73	57	43	34	84	陥穴状土坑Ⅱc類
S K 36	5E9・10・14・15	N－25°－W	124.5	81	78	43	77	陥穴状土坑Ⅱa類
S K 37	5G9・10	N－22°－E	74.5	73.5	50	48	66.5	陥穴状土坑Ⅱc類
S K 38	4F20・5F16	N－62°－E	195	32	147	6	64	陥穴状土坑Ⅱd類
S K 39	8H11・12・16・17	N－42°－W	115	79	39	35.5	61.5	焼土あり
Pit 20	9J17	N－20°－W	33	31	16	14	37	
Pit 23	4H10・15	N－20°－W	36	33	17	14	33	焼礫含む

第4表　萩清水遺跡石器観察表

番号	形　　態	出土位置	長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)	石　材	備　考
1	砥石	ＳＩ１	17.0	14.8	9.3	2,790	砂岩（中粒）	
2	砥石破損品	ＳＩ１（５Ｔ）	22.65	13.0	8.5	2,980	砂岩（粗粒）	
3	砥石	ＳＩ１	5.4	7.05	4.0	143.8	砂岩（粗粒）	
4	砥石未製品	ＳＩ１（５Ｔ）	5.9	8.7	2.6	148.2	砂岩（細粒）	
5	砥石	ＳＩ１	17.4	11.35	5.0	500	砂岩（粗粒）	
6	擦切石器	ＳＩ１（５Ｔ）	6.45	7.5	4.6	192.9	砂岩（極粗粒）	
7	擦切石器	ＳＩ１（５Ｔ）	3.05	4.4	1.3	17.3	砂岩（極粗粒）	
8	擦切石器	ＳＩ１	7.2	9.7	2.7	159.2	砂岩（粗粒）	
9	擦切石器	ＳＩ１	7.6	8.75	3.65	233.7	砂岩（中粒）	
10	擦切石器	ＳＩ１（５Ｔ）	3.9	4.45	1.5	23.0	砂岩（粗粒）	
11	擦切石器	ＳＩ１	2.8	2.6	1.1	8.5	砂岩（微粒）	
12	石核	ＳＩ１	9.35	7.8	5.8	425.7	砂岩（粗粒）	
13	石核	ＳＩ１	11.5	7.4	7.9	581.9	砂岩（微粒）	
14	石錐	ＳＩ１	2.15	2.0	0.8	3.4	チャート	
15	不定形石器	ＳＩ１	8.4	3.9	1.65	46.0	安山岩	Ｂ２類
16	不定形石器	ＳＩ１	1.9	2.45	0.5	3.2	無斑晶質安山岩	Ｂ１類
17	不定形石器	ＳＩ１	2.7	4.9	0.9	9.0	無斑晶質安山岩	Ｅ２類
18	不定形石器	ＳＩ１	5.2	3.6	1.0	20.1	無斑晶質安山岩	Ｈ類
19	剥片	ＳＩ１（５Ｔ）	2.7	2.7	0.7	6.0	無斑晶質安山岩	
20	剥片	ＳＩ１	2.8	4.7	0.9	10.9	無斑晶質安山岩	
21	剥片	ＳＩ１	5.4	7.5	2.2	82.7	砂岩（極粗粒）	
22	剥片	ＳＩ１	3.2	3.65	0.75	10.0	砂岩（中粒）	
23	剥片	ＳＩ１	3.85	5.45	2.65	43.7	砂岩（中粒）	
24	剥片	ＳＩ１	4.05	3.1	0.75	6.8	砂岩（微粒）	
25	磨石類	ＳＩ１	13.7	8.6	5.5	896.7	安山岩	Ｃ類
26	石匙	ＳＫ１	4.6	4.5	1.0	16.0	無斑晶質安山岩	
27	砥石	ＳＫ１（４Ｔ）	3.3	3.75	0.8	11.9	凝灰岩	
28	磨石類	ＳＫ13　５Ｆ	10.15	5.9	0.7	165.6	粘板岩	Ｅ類
29	不定形石器	ＳＫ30　５Ｈ	2.9	6.7	1.2	20.8	無斑晶質安山岩	Ｊ類
30	石鏃	６Ｆ	3.35	2.15	0.45	2.0	無斑晶質安山岩	
31	箆状石器	（３Ｔ）	9.0	4.4	2.3	88.3	凝灰岩	
32	石匙	６Ｈ	4.1	4.15	0.7	9.4	珪質頁岩	
33	両面調整石器破損品	７Ｈ	2.05	2.6	0.8	3.6	チャート	
34	不定形石器	（２・３Ｔ）	2.3	4.1	0.5	5.5	無斑晶質安山岩	Ｋ類
35	不定形石器	表採	3.4	5.4	1.3	18.4	無斑晶質安山岩	Ｄ３類
36	剥片	６Ｈ	4.65	3.7	0.8	18.1	無斑晶質安山岩	
37	磨石類	（３Ｔ）	13.2	6.05	3.65	357.5	安山岩	Ａ類
38	磨石類	（４Ｔ）	10.35	9.25	4.7	562.9	安山岩	Ｃ類

第5表　萩清水遺跡　石器組成表

出土位置	形態	石材												小計
		砂岩					無斑晶質安山岩	頁岩	チャート	凝灰岩	安山岩	粘板岩	黒曜石	
		極粗	粗	中	細	微								
S I 1	砥石		3	1	1									5
	擦切石器	2	2	1		1								6
	石核		1			1								2
	破砕礫		1	1		1								3
	石錐								1					1
	不定形石器						3				1			4
	剥片	2		3		1	7	1						14
	磨石類										1			1
	小計	4	7	6	1	4	10	1	1		2			36
S K 1	石匙						1							1
	剥片									1				1
	砥石（古代？）									1				1
	小計						1			2				3
S K 13	剥片		1											1
	磨石類											1		1
	小計		1									1		2
S K 30	不定形石器						1							1
	小計						1							1
包含層	石鏃						1							1
	箆状石器									1				1
	石匙							1						1
	両面調整石器破損品								1					1
	不定形石器						2							2
	剥片				1		5			1	2			9
	磨石類										2			2
	転石												2	2
	小計				1		8	1	1	2	4		2	19
総計		4	8	6	2	4	20	2	2	4	6	1	2	61

第Ⅳ章　三本木新田Ｂ遺跡

1．調査の概要

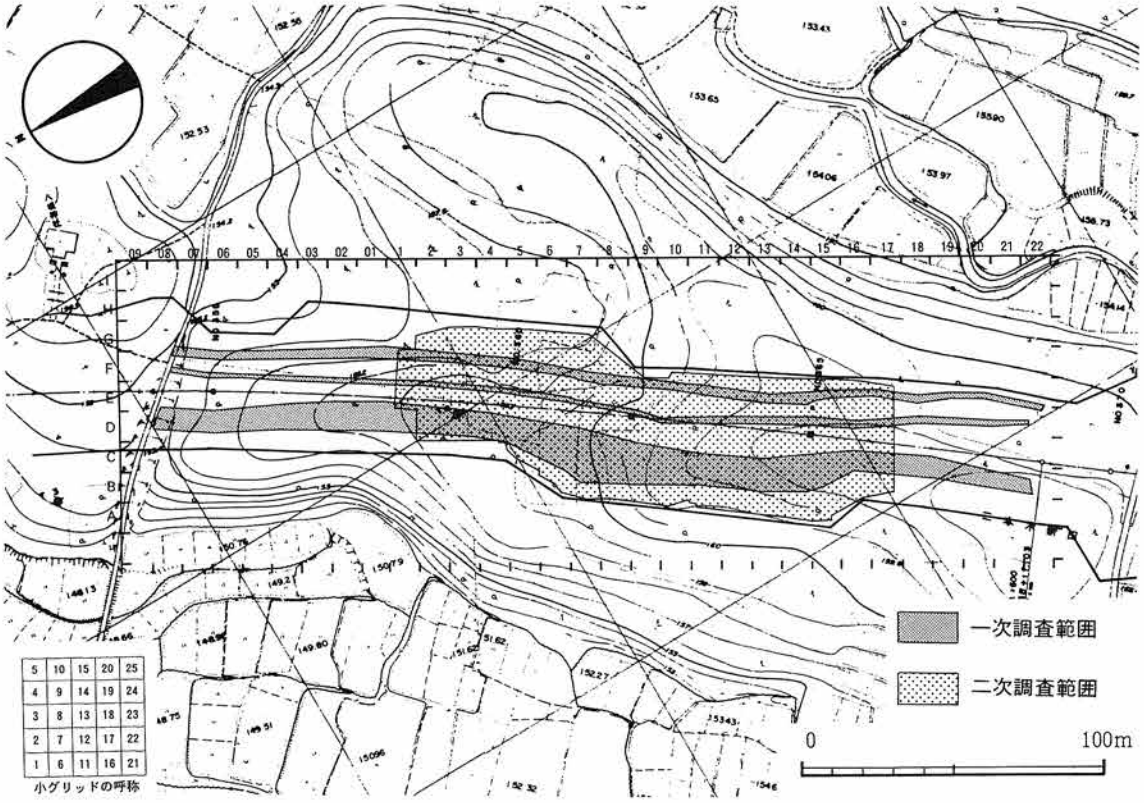
A．グリッドの設定（第11図）

グリッドはＳＴＡ№362＋00（Ｘ＝111160.6692，Ｙ＝－24029.6921）とＳＴＡ№365＋00（Ｘ＝111112.6071，Ｙ＝－24065.6077）を結んだ直線をＸ軸、これに直交する線をＹ軸とし、これを基に方眼を組んだ。Ｘ軸は真北に対して約37°東偏する。大グリッドは10m方眼とし、南北方向を北から１～20、東西方向を西からＡ～Ｇに分けて、「１Ａ」などのように組み合わせて呼称した。小グリッドは大グリッドを２×２m方眼に分けて各大グリッドの北西隅を起点、南東隅を終点として、１～25の番号を付し、「１Ａ２」のように大グリッドと組み合わせて呼称した。

B．記録の方法

遺物　遺物の取り上げは遺構出土のものは遺構単位であるが、包含層出土のものは大グリッド単位で行った。

遺構　調査範囲図・遺構平面図は平板測量で作図した。



第11図　三本木新田Ｂ遺跡　グリッド設定図

2．基本層序（第12図）

三本木新田Ｂ遺跡の調査範囲は南西から北東にかけて下る斜面で、標高は約155～162mである。土層堆積状況は層厚に幅があるほかは一様で、以下のとおりである。

Ⅰ層：黒褐色土。現表土である。層厚10～30cm。

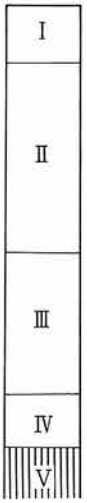
Ⅱ層：黒褐色土でⅠ層よりやや固くしまりが良い。層厚10～30cm。

Ⅲ層：黒褐色土。小礫が多く含まれる。層厚20～60cm。

Ⅳ層：褐色土。Ⅴ層への漸移層で場所により拳大～人頭大の礫が含まれる。層厚10～30cm。

Ⅴ層：明褐色土のロームである。

遺物包含層はⅡ～Ⅳ層、遺構確認面はⅣ層あるいはⅤ層上面である。基本層序の確認は昭和61年度の一次調査時に行ったが、一次調査終了後の埋め戻しに際してⅡ～Ⅳ層の土を誤って広範囲にわたり攪乱してしまった。そのため、昭和62年度の二次調査では遺物の出土位置に関する充分な情報を得ることができなかった。



第12図
三本木新田Ｂ
遺跡基本層序

3．遺　　構

三本木新田Ｂ遺跡では縄文時代の竪穴住居２基（３基？）、陥穴状土坑１基、土坑10基が検出された。遺構は北東～南東斜面の標高158.5～159.5mのところに分布する。グリッドでいえば８～９・Ｃ～Ｅのおよそ30m四方にまとまっているが、ＳＩ７が少し外れた13Ｅにある。ＳＫ６は一次調査時にＳＴＡ351付近で単独で検出された。このほか、一次調査時に９Ｄ10付近で検出されたＳＤ３があるが、二次調査時に攪乱と判断された（第13図）。

Ａ．竪穴住居（図版12・13・38）

ＳＩ７　13Ｅで検出されたが、南東隅は調査範囲外であったので調査できなかった。

後に示すような床面施設のあり方からＳＩ７を３基の住居跡に分離した。分離した３基の住居跡を北からＳＩ７ａ・ＳＩ７ｂ・ＳＩ７ｃと呼称する。なお、「ＳＩ７」はＳＩ７ａ～ｃの総称である。

ＳＩ７は長軸約11m、短軸約6.5mで、長軸方向はＮ－12°－Ｅである。

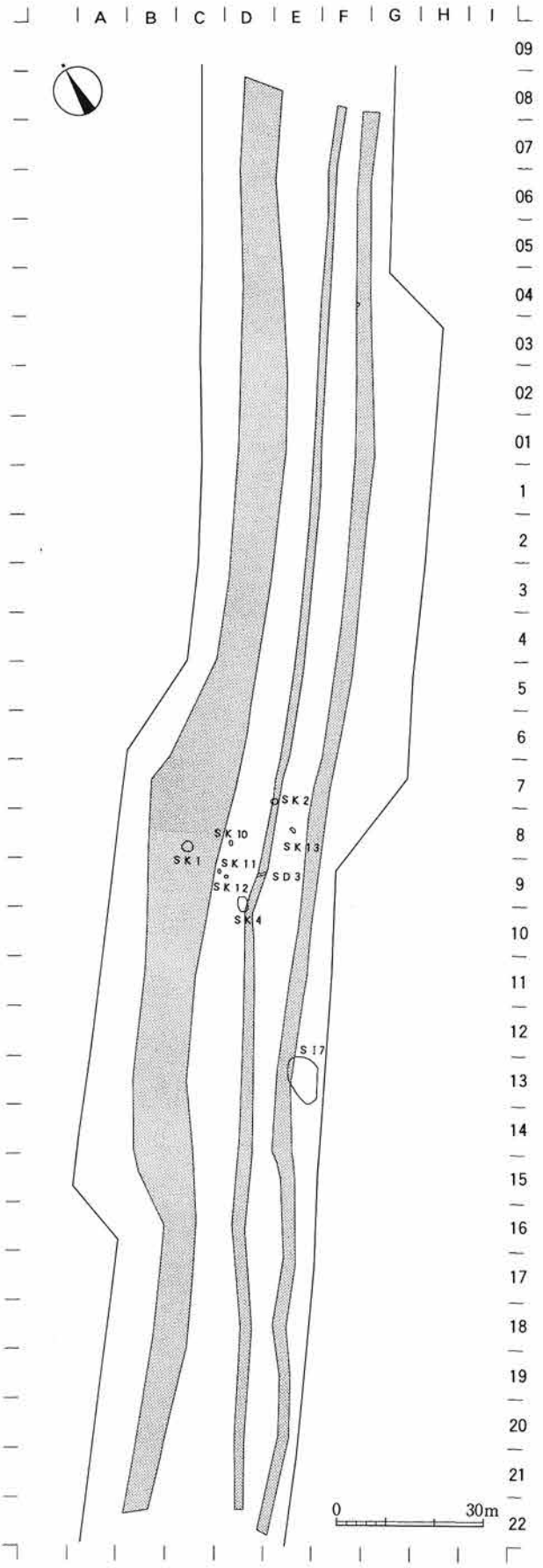
ＳＩ７の床面は張り床・敲き締め・焼き締めなどは行われておらず、凹凸が認められた。北壁・西壁・南壁には周溝がめぐるが、西壁の周溝は壁面中間付近でいったん途切れる。周溝の底面は平滑ではなく、凹凸が激しい。床面からの深さは最大で15cmである。炉は地床炉で、ＳＩ７の中央部から若干北寄りのところが直径80cm・深さ10cmの皿状に掘り窪められており、中から焼土と焼礫２点が検出された。このほかに、Ｐ10の西側に約30cmの範囲で焼土が検出されたが、炉として使用されていた形跡はない。

柱穴と推定されるピットはＰ１～11である。平面形は円形のもの（Ｐ１～６・９・10）と隅丸方形のもの（Ｐ７・８・11）がある。大きさは円形のものが直径約40～70cm、隅丸方形のものが長軸長約55～80cmでややばらつきがある。深さは25～50cmである。

西壁の周溝がＰ８のところで途切れていること、炉を中心にＰ１～８の柱穴がめぐることから、この範囲を１基の住居跡と捉えＳＩ７ａとする。この場合、ＳＩ７ａは一辺約７ｍのほぼ正方形の竪穴住居となる。柱穴の配列はＰ１～８をひとまとまりと考え、炉を中心とした円形の配列、あるいはＰ２とＰ７を結んだ線を主軸にＰ１－Ｐ３、Ｐ４－Ｐ５、Ｐ６－Ｐ８の３本の横軸が交わる配列が考えられる。

残るＰ９～10はＳＩ７ａを南側へ拡張した住居跡ＳＩ７ｂのものと推定される。拡張と考えた理由は、西壁の周溝がＳＩ７ａの西壁の延長線上にのること、P11がＳＩ７ａの主軸と推定したＰ２－Ｐ７のほぼ延長線上にのり、またその場合Ｐ９とP10を結んだ線はＰ１－Ｐ３などの線と同様に主軸に交わる形をとることなどである。炉はＳＩ７ａのものを使用していたのだろう。なお、拡張に際してＳＩ７ａの南壁周溝は掘り飛ばされたものと考えられる。ＳＩ７ｂはＳＩ７ａを合わせた大きさで、長軸10.24m、短軸6.48mの隅丸長方形の竪穴住居だったと推定される。ＳＩ７ｂの南壁外側から南へ向けて伸びる住居の周溝らしきものとピットが検出されたが、大部分が調査範囲外であり詳細は不明である。一応住居跡と考え、ＳＩ７ｃとした。切り合い関係から、ＳＩ７ｃの構築時期はＳＩ７ｂに先行すると判断できる。

遺物は、床面から出土したものに縄文土器（図版15）Ｂ群１類ａ（１～３・８）・Ｂ群１類ｂ（４～７・９～23）・５類（29～68・76）・Ｂ群２類（24～26）・Ｂ群３類（70～73）・Ａ類２群(69)・Ｃ群２類（74・75）・Ｆ群（77・78）・Ｇ群（79）と石器があり、石器（図版19・20）には不定形石器Ｇ類（４）、磨石類Ｃ類（11）・Ｄ類（12）・Ｆ類（14）、筋砥石(15)がある。出土位置は壁際や周溝内に偏る。とくに縄文土器54



第13図　三本木新田Ｂ遺跡　遺構配置図（一次調査）

～56はＳＩ７ａの南東隅のＳＩ７ｂとの境付近からまとまって出土した。覆土から出土した縄文土器（図版15～17）はＡ群、Ｂ群１・２・３類、Ｃ群２類、Ｅ群３類、Ｆ群のものがある。石器（図版19）は石匙１点（３）、両極石器１点（５）、剥片類５点（７ｂ）、石核１点（７ａ）、磨石類３点（９・10・14）、磨製石器１点（６）がある。

ＳＩ７ａとＳＩ７ｂの床面出土土器は有尾式期のものに限定されることから、住居の構築・拡張ともこの時期に行われたと考えられる。また、周溝や柱穴の方向が拡張前後でほぼ共通することなどから、ＳＩ７ａからＳＩ７ｂへの移行は連続するものだったと推定される。

なお、ＳＩ７ｂ内にあるＳＫ14がＳＩ７ｂの付帯施設なのか後から掘り込んだものなのかは、土層観察で明らかにすることができなかった。ＳＩ７ａ内のＳＫ15は検出面がＳＩ７と同一であることから、ＳＩ７より後の掘り込みである可能性が高い。

Ｂ．陥穴状土坑（図版14・38）

ＳＫ６　ＳＴＡ351付近で単独で検出された。確認面はⅢ層である。平面形は隅丸長方形で断面形は漏斗形をしている。底面にピットが１基ある。覆土の堆積状況は底部付近が水平堆積、中間部が壁の崩落とみられる不規則な堆積、上部が水平堆積をしている。１基のみの検出であるため、配列などは不明である

Ｃ．土坑（図版13・14・38・39）

土坑は分布に規則性がなく遺物量も少ないため、個々の性格や相互の関係は不明である。

ＳＫ１　８Ｃ17付近に位置する。直径2.1ｍ、深さ７㎝の皿状の土坑で、底面中央部に深さ26㎝の円形のピットが１基ある。底面北東部からは縄文土器が多数出土した。出土土器（図版16）はＢ群１類ａ（81）・２類（84・85）・４類（80）・５類（82・83・86～88）に分類される。

ＳＫ２　７Ｅ21付近に位置する。平面形は隅丸長方形で長軸長140㎝、短軸長117㎝、深さ34㎝である。底面に深さ８㎝の小ピットが１基ある。

ＳＫ４　９Ｄ23付近に位置する。一辺約3.1ｍの隅丸方形の皿状の土坑で、深さは20㎝である。南壁面中央立ち上がり部分に１基、底面に２基のピットがある。底面中央のピットは浅く、深さ約５㎝である。覆土から縄文土器と剥片３点・磨石類１点（図版20－16～19）が出土した。縄文土器（図版16）はＢ群４類（89）・５類（90・91）、Ｃ群３類（92）に分類される。

ＳＫ５　10Ｄ23に位置する。平面形は楕円形で長軸長50㎝、深さ48㎝である。Ｂ群５類土器（図版16－93）が出土した。

ＳＫ10　８Ｄ16付近に位置する。平面形は楕円形で長軸長115㎝、深さ15㎝である。

ＳＫ11　９Ｃ10付近に位置する。平面形は不整楕円形で長軸長86㎝、深さ15㎝である。

ＳＫ12　９Ｄ６付近に位置する。平面形は不整楕円形で長軸長110㎝、深さ41㎝である。掘り形は皿状で壁面の立ち上がりは急である。底面西側に深さ約14㎝の小ピットがある。

ＳＫ13　８Ｅ８付近に位置する。南東部分を大きく攪乱されているが、平面形は楕円形だったと推定される。

ＳＫ14　ＳＩ７ｂの中、13Ｅ25付近に位置する。ＳＩ７ｂとの切り合い関係を土層で確認することが困難

だったため、ＳＩ７ｂより新しいものかＳＩ７ｂの付帯施設なのか断定しかねる。平面形は円形で直径約170cm、深さ22cmである。遺物はＢ群５類の縄文土器（図版16－97）と剥片（図版19－８）が出土した。

ＳＫ15　ＳＩ７ａの中、13Ｅ４付近に位置する。ＳＫ14と同様にＳＩ７ａとの関係は不明だが、検出面がＳＩ７と同一面であったこと、ＳＩ７－Ｐ１を切っているとみられることからＳＩ７ａ埋没後に掘り込まれた可能性が高い。平面形は楕円形で長軸長は205cm、掘り方は皿状で深さ24cmである。Ｂ群５類土器（図版16－96）が出土した。

4．遺　物

A．土　器（図版15～18・40～43）

(1) 概　略

本遺跡からは平箱で17箱余りの土器が出土している。出土土器は、縄文時代早期から晩期までとほぼ各時期のものが認められるが、その時期的な内訳は縄文時代前期中葉が圧倒的に多く、次いで同早期末葉、同中期末葉の順である。出土は住居跡からが突出しており、グリッドでは10Ｄからの出土がやや目立つ程度である。胎土は全体には凝灰岩を含むものが目立ち、縄文時代早期末葉から同前期中葉にかけては当然のことながら繊維を含むものが多い。焼成は、全体的に見て良好なものがやや多い。器壁の厚さは６～８mm位のものが最も多く、中でも７mm位のものが目立った。器壁への炭化物の付着はあまり多くはなく、付着しているものの大半はスス状炭化物であった。

(2) 分　類

分類は、以下のように時期ごとに大別し、ある程度まとまりのある時期をＡ群からＥ群、まとまりのないものを一括してＦ群、時期不明のものをＧ群とした。そして、さらに群内を文様を中心に類別した。なお、出土した土器はＢ群３類を省けばほとんどが深鉢である。

Ａ群　縄文時代早期末葉の土器

１類　口縁部を中心に絡条体圧痕等で文様が施文されているもの。

２類　器面の内外面に条痕文や縄文または撚糸文が施文されるもの。１類の胴部破片も含まれる。

Ｂ群　縄文時代前期中葉の土器

１類　口縁部～頸部にかけて半截竹管を施文具とした爪形で文様が施文されているもの。爪形が点列状である「ａ」と爪形が連続する「ｂ」に２分される。有尾式土器の範疇に含まれる土器である。

２類　口縁部～頸部にかけて平行沈線で文様が描かれているもの。これも有尾式土器の範疇に含まれる土器である。

３類　口縁部だけでなく頸部～胴部にもコンパス文や平行沈線文などが密に施文されている鉢で焼成は良好である。根小屋式土器（寺崎1996）と考えたい。

４類　コンパス文が描かれているもの。内面の整形が丁寧で、焼成も良好なものが目立つ。北陸地方の朝日Ｃ式土器の影響を受けていると考えられる。

５類　全面に縄文が施文されているもの。１・２類の胴部破片も含まれる。

６類　上記の分類に当てはまらないもの。

７類　当期に比定される底部。

Ｃ群　縄文時代前期末～中期初頭の土器

１類　結節状浮線で施文されているもの。

２類　半截竹管により平行沈線や爪形、ヘラ状工具により単沈線などが施文されているもの。

３類　結び目縄文が施文されているもの。

Ｄ群　縄文時代中期末葉の土器

１類　縄文地上に微隆帯で区画を施し、区画外の縄文を磨消したもの。

２類　沈線で区画し、区画内に縄文を充塡したもの。

３類　胴部に条線を施文したもの。

４類　縄文のみを施文したもの。

Ｅ群　縄文時代後期後葉の土器

１類　磨消縄文で施文されているもの。

２類　単沈線で施文されているもの。

３類　縄文のみが施文されているもの。

４類　無文のもの。

Ｆ群　その他の時期の土器

Ｇ群　時期不明の土器

(3)　遺構出土の土器（図版15、図版16－67～107）

ａ．ＳＩ７ａ・ｂ（１～79）

１～３・８はＢ群１類ａに分類される。１・８は点列状の爪形が巡り、その間は横位平行沈線で満たされている。両者とも胎土には繊維は含まれていない。１はＳＩ７ａの床面より出土している。２はＬＲの縄文地上に爪形でユニオンジャック風の文様を施文している。３は無文地上に爪形が施される口縁部～胴部上半の破片で、胴部は縄文が施文されている。４～７・９～23はＢ群１類ｂに分類される。４～７は口縁に数条の爪形が巡り、その下位には縄文が施文されている。７の原体はＲＬである。５・６の胎土には繊維は含まれていない。４・６の外面にはスス状の炭化物の付着が認められる。９～13は頸部～胴部上半の破片である。胴部には縄文が施文され、９の原体はＬＲ、10・12・13は羽状縄文である。14～19は無文地の口縁部に数条の爪形が巡り、それらの爪形間に「Ｄ」字状の点列爪形が施されている。19は覆土上層から出土している。焼成は良好なものが多く、器面整形も丁寧である。17の外面にはスス状の炭化物の付着が認められる。20・21は縄文地上に爪形や平行沈線で文様が描かれている。22・23は無文地上に数条の細かい爪形が巡る。両者とも器壁が薄く、23の胎土には繊維が含まれず、内外面の整形も丁寧である。24～26はＢ群２類に分類される。25は波状口縁で、原体はＲＬである。26の原体はＬＲである。27・28・70～73はＢ群３類に分類される。焼成は良好である。72はＳＩ７ａの床面から出土している。73は28と同一個体である。29～68・76はＢ群５類に分類される。29～53・63・66は羽状縄文、54～62・64・65・67・68・76は斜縄文が施文されている。43・47・48・52・53はＳＩ７ａの床面、50・76はＳＩ７ｂの床面、49はＰ8上面、29はＳＩ７ｂ上層、51・64・66は覆土上層から出土している。54・56・60・65・67・68の原体はＲＬ、55・57・58・66の原体はＬＲである。29・63・76は胎土中に繊維を含んでいない。50・51の外面と65の内面にスス状炭化物、68の内面にタール状炭化物の付着が認められる。31と32、37と38は同一個体である。61は土器片利用の土製品、67は口縁に細隆帯が巡る。76は、口縁部分が無文帯で胎土中に繊維を

含まず、焼成良好、器壁薄く、内面の整形も丁寧である。時期を後期後葉とするか前期中葉とするか迷ったが、胎土の質感や出土地点が住居跡の床面であることから後者とした。

69はA群2類に分類される。外面に縄文、内面に条痕文が施文されている。胎土中には繊維の他に凝灰岩や石英を含む。74・75はC群2類に分類される。同一個体であり、覆土上層から出土している。77・78はF群に分類される。77は諸磯a式土器で、縄文地上に円形刺突と3本沈線で肋骨文が施文されている。内面の整形は丁寧である。78は晩期後葉に比定され、器面に横位あるいは斜位の条痕文が施文されている。内面にスス状炭化物の付着が認められる。79はG群に分類される。焼成良好で、底径9.2cmを測る上げ底気味の底部である。覆土上層より出土している。

b．SK1（80～88）

80はB群4類、81はB群1類aに分類される。81の原体はRLである。82・83・86～88はB群5類に分類される。82・83は羽状縄文、86～88は斜縄文が施文されている。87・88は同一個体である。84・85はB群2類に分類される。沈線内に細かい押し引き状の刺突が加えられている。84・85は同一個体である。

c．SK4（89～92）

89はB群4類に分類される。口縁部にコンパス文が密に施文され、胴部文様との境界には1条の点列状の爪形が巡り、胴部には原体LRの縄文が施文されている。90・91はB群5類に分類される。縄文の原体は共にLRである。92はC群3類に分類される。縦位の結び目縄文が施文されている。

d．SK5（93）

B群5類に分類される。原体LRの縄文が施文されている。器壁は11mmと厚い。

e．SK14（97）

B群5類に分類される。胎土中には凝灰岩や繊維の他に礫を含む。

f．SK15（94～96）

94・95はB群1類bに分類され、同一個体の可能性がある。94は頸部～胴部上半の破片である。胴部には菱形様になる羽状縄文が施文されている。95は、無文地の口縁部に3条の爪形が巡り、爪形間に「D」字状の点列爪形が施されている。胴部には縄文が施文されている。焼成良好で内面の整形も丁寧である。外面にスス状炭化物の付着が認められる。96はB群5類に分類される。原体RLの縄文が施文されている。焼成は良好で、器壁も4mmと薄い。

g．SD3（98・99）

98・99はF群に分類され、共に晩期後葉に比定される。98は口縁に2条の沈線が巡る鉢形土器である。99は無文で、外面にスス状炭化物の付着が認められる。内外面の整形は丁寧である。

h．一括土器（100～107）

12Aから次のような土器が一括して出土した。100はB群4類に分類される。焼成良好で、内面の整形も丁寧である。101～103はB群3類に分類される。共に同一個体で、焼成は良好である。104～107はB群5類に分類される。104・106は羽状縄文、105・107は斜縄文であり、105・107の原体はRLである。

(4)　遺構外出土の土器（図版16－108～129、図版17、図版18）

A群（108～130）　108～117は1類に分類される。108・110は5C、109・112は6B、111は13D、113は12B、115は10D、116・117は10Eから出土している。108・113の地文は撚糸、114の地文は縄文である。116・117は同一個体である。

118～130は２類に分類される。118～122は10Ｅ、123・124・126・129は５Ｃ、127・128は７Ｂ、130は６Ｂから出土している。125は表採である。124の内面にはスス状炭化物の付着が認められる。125は内面に撚糸文、127・129は外面撚糸文・内面条痕文、124・126は外面撚糸文、130は外面縄文・内面条痕文が施文されている。118～120は同一個体である。

Ｂ群（131～195）　131～140は１類ｂに分類される。133は16Ｅ、134は12Ｂ、135は12Ｅ、136は16Ｏ、137は12Ｃ、138は13Ａ、139は14Ｃ、140は8Ｄから出土している。131・132は表採である。138の原体はＬＲである。139の胎土には繊維が含まれず、135・137の内外面の整形は丁寧、焼成はほとんどが良好である。

141～143は２類に分類される。141は10Ｄ、142は12Ｅ、143は13Ａから出土している。141は波状口縁の深鉢で胎土に繊維が含まれず、焼成も良好である。142は内面の整形が丁寧で、外面にはスス状炭化物の付着が認められる。143には「ハ」の字状の刺突が認められる。145・146は３類に分類される。146は13Ｅから出土し、145は表採である。両者とも焼成良好で、145の外面にはスス状炭化物の付着が認められる。144は４類に分類される。内面の整形は丁寧である。

147～175・177～179・181～192は５類に分類される。147は７Ｂ、148・176は12Ｂ、149～153は２Ｅ、154は13Ｄ、155・177は９Ｂ、156・181は16Ｃ、157・164・165・188は14Ｅ、158・183は９Ｄ、159は14Ｃ、160・186は10Ｄ、162・163・189は6Ｅ、166～169は16Ｄ、170・187は12Ｄ、167・171～174は14Ｄ、175は11Ｂ、178～180は８Ｂ、182は13Ｃ、184は12Ｃ、185・195は５Ｃ、190は11Ｅ、191・192は12Ｅから出土している。161は表採である。147～160・174・181・182・187・191・192は羽状縄文、これら以外は斜縄文が施文されている。151・161・163・166・170・173・175・184・188・189の原体はＲＬ、162・164・167・169・171・172・186・190の原体はＬＲである。ほとんどの胎土に繊維を含むが、162には含まれていない。157・186の外面にはスス状炭化物、150の内面にはスス状炭化物・外面にはオコゲ状炭化物、152の内面にはタール状炭化物・外面にはスス状炭化物、151・153・159・168の内面にはオコゲ状炭化物、155・161の外面にはオコゲ状炭化物の付着が認められる。191・192の内面の整形は丁寧である。191には補修孔らしき孔が穿かれている。

176・180は６類に分類される。176は12Ｂ、180は８Ｂから出土している。176は縄文地上に5条の櫛歯状沈線が斜行する。180は外面に条痕が施されているもので、胎土等の様子からＢ群とした。193～195は７類に分類される。193の原体はＲＬ、焼成良好で器壁も４㎜と薄い。194の原体はＬＲで底径は10㎝を測る。195も底径10㎝余りで、形状は上げ底気味である。

Ｃ群（196～205）　196～198は１類に分類される。196は13Ｄ、197・198は９Ｄから出土している。197・198は同一個体である。199・200・205は２類に分類される。199は10Ｄ、200は14Ｅ、205は７Ｂから出土している。199は波状口縁である。201～204は３類に分類される。201は11Ｅ、202～204は10Ｄから出土している。202～204は同一個体で、原体はＲＬ、底径は15.2㎝を測る。

Ｄ群（206～218）　206～210は２類に分類される。いずれも９Ｄから出土しており、同一個体である。充塡縄文の原体はＬＲである。加曽利ＥⅣ式土器と考えられる。218は１類に分類される。９Ｄから出土している。外面にスス状炭化物の付着が認められる。206～210と同様に加曽利ＥⅣ式土器またはそれに並行する土器と考えられる。211・212・216・217は３類に分類される。211は16Ｅ、212は16Ｄ、216は15Ｅ、217は17Ｄから出土している。縦位の波状条線や直線状の条線が施文されている。211の内面と217は外面にはオコゲ状炭化物の付着が認められる。211・212は同一個体の可能性がある。213～215は４類に分類さ

れる。213は10Ｅ、214・215は９Ｄから出土している。214･215は同一個体で、原体はＬＲである。

Ｅ群（219～228）　221・225は１類に分類される。221は13Ｄから出土し、225は表採である。221は、やや膨らみのある胴部をもち、そこから口縁部は直立気味に立ち上がり、口唇部には４単位の突起が付けられ、口径は28.5㎝と推定される。口縁には２条の沈線が巡り、その沈線間およびその上位には立て刻み状の刺突が２条にわたって加えられている。それ以下の口縁部は１条の沈線によって上下に２分され、上位は羽状縄文が施文されているが下位は羽状縄文が磨消されて無文帯となっている。頸部には３条の沈線が巡り、その沈線間には口縁と同様の施文技法による刺突が２条加えられている。胴部も１条の沈線で上下に２分されるが、上下とも縄文地上に５本１単位の沈線が羽状に施されている。内外面にスス状炭化物の付着が認められる。225は原体ＲＬの縄文が施文され、外面にはスス状炭化物の付着が認められる。219・220・223・224は２類に分類される。219は６Ｄ、220は９Ｄからの出土である。223・224は表採である。219は波状口縁である。瘤が添付される可能性が高い。220は口径24㎝を測る浅鉢である。口縁部に三叉状の文様が描かれ、それ以外は無文である。内外面の整形は丁寧である。223は断面形から221に類似する器形を呈するものと推定できる。224はその傾きから壺と考えられる。226は３類に分類され、表採である。頸部付近が無文帯となり、以下には縄文が施文されている。断面形からして223と同一個体である可能性も考えられる。222・227・228は４類に分類される。222は７Ｂから出土し、227・228は表採である。222は内外面の整形が丁寧であり、227は赤彩されている。

Ｆ群（229～243）　229は13Ｅから出土し、横位の山形が施されている押型文土器である。232は9Ｂ、233は18Ｄ、235は5Ｃ、234は一次調査の３トレンチから出土している。236は表採、237は出土地点不明である。原体はいずれも０段多条の燃糸の可能性がある。[註)] 前期初頭に比定されるものと考えられる。230・231は10Ｂから出土している。原体は異なるが、232～237と同時期と考えられる。238は17Ｄ、239～243は６Ｂから出土している。238は原体ＲＬの縄文地上に半截竹管で文様が描かれている。中期前葉に比定されるであろう。239～243は、同一個体である。キャリパー形を呈し、器面全体に縄文のみが施文されている。器形などから中期に比定される可能性が高い。内外面にスス状炭化物の付着が認められる。

Ｇ群（244～255）　244・247・250・254は10Ｄ、245は6Ｅ、246・249は13Ｄ、251・252は15Ｅ、253・255は17Ｄから出土している。248は表採である。244は無文地上に半截竹管を用いた平行沈線で文様が施文されている。胎土中に雲母が含まれている。施文技法や胎土および同一グリッドから中期初頭の土器が出土していることから中期初頭に比定される可能性がある。245は口縁部下位と思われる箇所が無文帯となり、以下には原体Ｒの撚糸文が横方向に施文されている。246は原体Ｌの撚糸文が施文されている。248は平口縁の深鉢で、口縁は縄文がなぞられて無文帯となり、以下には原体ＬＲの縄文が施文されている。焼成は良好である。247は原体ＲＬの縄文が施文されている。250は縄文が施文され、器壁は12㎜と厚い。254は250と同一個体である。無文で底径16㎝を測り、焼成は良好である。底部は外側にやや突出し、胴部との境界は屈曲気味である。249は原体ＲＬの縄文が施文され、内面にスス状炭化物の付着が認められる。251・252は無文で、焼成は良好、整形も丁寧である。253は、体部の立ち上がる角度から見て底径10㎝を測る浅鉢と考えられる。焼成は良好、内外面の整形も丁寧で器壁も4㎜と薄い。255は底径13㎝を測る底部破片で、底部には網代痕らしき痕跡が認められる。

註）群馬県埋蔵文化財調査事業団　谷藤保彦・関根慎二両氏のご教示による。

Ｂ．石　器（図版19～24・44～47）

三本木新田Ｂ遺跡出土の石器総数は112点である。そのうち24点は遺構からの出土で、残りは包含層あるいは攪乱からの出土である。

主な石器には磨石類29点、砥石６点、石皿３点、剥片43点、両極石器10点、不定形石器10点、石鏃４点、石匙２点などがある。

石器の分類・記載の方法は萩清水遺跡と同様であるが、萩清水遺跡に無い形態の石器について以下のように分類基準を示す。

両極石器　両極に打痕・剥離痕のあるものを両極石器とした。２個１対の極をもつものと４個２対の極をもつものがある。

石皿　中央を凹めた皿形の石器（鈴木1991）

(1)　遺構出土の石器（１～19）

ａ．ＳＩ７（１～15）

ＳＩ７からは石鏃２点、石匙１点、不定形石器１点、両極石器１点、石核１点、剥片６点、磨石類６点、磨製石器１点、筋砥石１点などが出土した。

石鏃（１・２）１は凹基無茎鏃で裏面に素材の主要剥離面が残っている。２は表裏面に素材の剥離面が広く残っていることから、石鏃の未製品と推定される。

石匙（３）横形の石匙で打瘤の厚みを除去しながらつまみを作り出している。つまみ上端には素材の剥片の打面が残されている。打面は礫打面である。

不定形石器（４）礫面を打面とする板状の剥片を素材としている。左側面は礫面である。右側縁の裏面に剥離を施し刃部が作り出されている。

両極石器（５）４極２対の両極石器である。

磨製石器（６）表裏面に多方向からの研磨痕が認められる。形態から磨製石斧の刃部と推定される。

石核（７・７ａ・７ｂ）打面部と裏面の一部に礫面が残る石核である。剥片１点（７ｂ）が接合している(7)。７ｂを剥離する前に下端から両面に比較的浅い剥離が施されている。剥離の順序は表面→裏面の順である。７ｂ表面左側縁の剥離痕はこのときのものである。７ｂを剥離する際の衝撃で、表面右半分が同時に剥落している。この剥離痕を切る剥離痕が表面にあることから、その後も下端部からの剥離が続けられていたことがわかる。

剥片（８）８はＳＩ７の中のＳＫ14から出土した。複剥離打面の剥片である。なお、石器製作に伴うような調整剥片は出土しなかった。

磨石類（９～14）Ｃ類３点（９～11）、Ｄ類１点（12）、Ｅ類１点（13）、Ｆ類１点（14）がある。13はＳＩ７内のＰ９からの出土である。９は両側縁に３対（４対？）の刻み目が入っている。刻み目の断面形は浅いＶ字状である。

筋砥石（15）表面に非常に浅い数条の溝状砥面が長軸に並行して走っている。右側面は割れ面であるが、稜線が摩耗していることから破損後も使用されていたことがわかる。

b．ＳＫ４（16～19）

ＳＫ４からは剥片３点と磨石類１点が出土した。

磨石類（16）Ｇ類で、右側面に敲打痕がある。

剥片（17～19）17の打面は礫打面で、背面は対向方向の剥離痕に覆われている。18は打点が剥離時の衝撃で失われている。19の背面は多方向からの剥離痕に覆われている。

(2)　遺構外出土の石器（20～72）

包含層出土の石器には石鏃、石匙、不定形石器、両極石器、剥片類、磨石類、砥石類、石皿などがある。石器組成では磨石類と両極石器が多いのが特徴である。

石鏃（20・21）20は凹基無茎石鏃である。21は左脚を欠くが、凹基無茎石鏃あるいは平基無茎石鏃と推定される。

石匙（22）薄手の横形石匙であるが、平面形は倒卵形をしており、3のような細身のものとは異なる。素材の剥片は打面側が右側縁になるように置かれている。打瘤は折断などの方法で除去したものと推定される。

不定形石器（23～31）不定形石器は９点あり、内訳はＢ類３点（23～25）、Ｇ類２点（26・27）、Ｊ類４点（28～31）である。

23は礫面を打面とする剥片を素材としている。背面の両側縁に連続する剥離が施され刃部が作出されている。25は横長剥片を素材とする。末端部表裏面に階段状の小剥離が施されている。24は背面が礫面に覆われた剥片を素材としている。腹面側末端部に連続する剥離が施され、弧状の刃部が作出されている。

26は礫面を打面とする板状の大形剥片を素材としている。右側面は礫面である。背面左側縁に連続する剥離が施され、刃部が作出されている。末端部にも刃こぼれ状の小剥離がある。27は背面左側縁に刃部が作り出されており、右側縁には使用痕とみられる微細な剥離痕がある。

30は剥片の右側縁腹面側に微細な刃こぼれ状の剥離が認められる。上半部を欠損している。31は背面右側縁上半に微細な剥離痕がある。

両極石器（32～40）２極１対のもの（32～39）と４極２対のもの（40）がある。大きさはまちまちで、36のような2.6cmのものから32のような6.9cmのものまである。

剥片（41～44）剥片は34点出土した。18点が無斑晶質安山岩であるが、１か所から集中して出土したわけではない。石材は無斑晶質安山岩のほかに砂岩（41・42）、凝灰岩（43・44）、滑石？などがある。

磨製石器未製品（45・48）45は薄手の楕円礫で表裏に擦痕がある。一応未製品に分類したが、別に用途をもつものかもしれない。48は磨製石斧の未製品あるいは磨製石斧破損品の転用品と推定される。刃部は片刃である。上部も刃部同様研磨され、縦断面形は扁平な紡錘形を呈する。

磨石類（46・47・49～67）磨石類は22点が出土し、内訳はＡ類４点（46・47・49・50）、Ｂ類２点（51・52）、Ｃ類６点（53～58）、Ｄ類４点（59～62）、Ｅ類１点（63）、Ｆ類２点（64・65）、Ｇ類２点（66・67）、不明のもの１点である。

62は四角錐状の礫の５面が機能面として用いられている。53は柱状の礫を素材とし、稜上に磨面があることから特殊磨石に分類可能である。

石皿（68・69）69は風化が激しいため不明瞭となっているが、右側面に弧状の彫刻が認められる。68は掃き出し口側を欠損しているが、残存部には磨面から左側面に４本、下縁に２本、右側面に１本の筋状の彫刻が垂下している。

砥石（70～72）70は角柱状の砂岩を素材とする大形の置砥石である。稜線は敲打されている。上下を欠損するが、下側は割口の稜線にも砥面が及んでいることから、欠損後も使用されていたことが分かる。裏面にはごく浅い円形のくぼみが複数あるが、人為的なものというよりは節理に沿って割れた痕跡とみられる。71は扁平な砂岩の両面に砥面が設けられている。表面には幅５㎜、断面Ｕ字状の浅い筋状の砥面が２条ある。72は全面が敲打で整えられた後、砥石として使用されている。表面を主要な砥面とし、右側面には狭いが断面Ｖ字状に近い砥面がある。

5．ま と め

A．遺　　構

三本木新田Ｂ遺跡で検出されたＳＩ７は出土遺物から有尾式期の住居跡と推定される。新潟県内のこの時期の住居跡の検出例は少なく、中里村千溝遺跡（佐藤ほか1994）、青海町大角地遺跡（寺村ほか1979）、堀之内町清水上遺跡（大杉1996）で確認されている程度である。県外では長野県有尾遺跡（戸沢1988）・舅屋敷遺跡（小林ほか1982）・十二ノ后遺跡（樋口ほか1986）、群馬県糸井宮前遺跡（関根1986）・分郷八崎遺跡（柿沼1986）・見立溜井遺跡（都丸ほか1985）などに例がある。

これらの遺跡の住居跡から当該期の住居形態を概観してみることにする。平面形は隅丸正方形か隅丸長方形で多くのものは周溝を有する。規模は一辺の長さ４～８ｍ程度、掘り込みの深さは最大で60㎝程度である。床面は糸井宮前遺跡では固いローム層を利用しているが、分郷八崎遺跡では客土し踏み締める、あるいは焼き締めるなどして構築されている。炉は地床炉で、浅い土坑をそのまま、または縁辺の一部に礫が据えられている。炉の位置は住居の中央にある例は少なく、どれか１辺に寄っている場合が多い。主柱穴は住居の大小にもよるが４本あるいは６本が対をなすことが多いようである。

さて、三本木新田Ｂ遺跡のＳＩ７についてみると、規模は拡張前のＳＩ７ａが１辺約７ｍと標準的な大きさであるのに対して、拡張後のＳＩ７ｂの長軸長は約10ｍであり、この時期にしてはやや大形の住居といえよう。床面は張り床や敲き締めなどはされておらず、固い地山面が利用されている。周溝や炉のあり方はほかの遺跡のあり方と大きく違うものではない。以上のように、有尾式土器の分布の中心地である長野県や群馬県の住居跡とＳＩ７の形態を比較してみたが、ＳＩ７とそれらの間に、大きな相違点を見出すことはできなかった。

ところで、当遺跡から出土したＢ群１類ｂの土器は次のＢ.(1)で述べるように、ｂ１類とｂ２類に細分される。ｂ１類は在地化はしつつあるが、まだ有尾式土器の範疇で捉えられる土器、ｂ２類は有尾式土器と北陸の朝日Ｃ式土器の影響下に成立し在地化が進んだ土器である。ＳＩ７の床面から出土したのはｂ１類である。

ＳＩ７の床面出土の土器がすべて在地色の薄い有尾式土器であること、住居形態が有尾式土器の分布の中心地のものと類似することなどから、この住居の構築がまだ在地化の進まない有尾式土器を保有する文化の影響下に行われたことが推定できるのではないだろうか。

B．遺　物

(1) 土　器

当遺跡からは、早期後半・前期中葉・前期末葉～中期初頭・中期末葉・後期後葉の土器がある程度のまとまりを持って出土したが、それらの中でも前期中葉のものが圧倒的に多い。その前期中葉でB群1類bに分類した中で主体を占めているもの、具体的には4～7・14～19・131～137などについて検討を試みたい。

この土器は、器種は深鉢である。器形は、すべて破片資料であることから全体を伺い知ることは出来ないが、17や131などから推定して筒状を呈するものと考えられる。口縁形は、平口縁（4・17・135ほか）と波状口縁⒂および小突起が付されたもの⒁が認められるが、平口縁が多数を占める。口縁部は直立（7・17・131）または緩やかに外傾（4～6・135）するが、内彎気味のもの（16・133・134）もある。文様は、胴部と口縁部とに2分され、胴部には斜縄文もしくは羽状縄文が施文されているのみである。口縁部には2～3条の爪形文が密接して巡るもの（4・5・7）、2～3条の爪形文が間隔を空けて巡りその間に「D」字形ないしは三角形状の刺突が加えられるもの（15～19・134ほか）がある。それらの8割強は胎土中に繊維を含むが、約3割弱が繊維を含まないか含んでも少量である。焼成や整形は6割が良好であるが、その内訳は前者の爪形密接が約4割、後者の爪形と刺突の組み合わせが約8割で、後者の焼成や整形のよさが目立つ。器壁の厚さは平均約7㎜であるが、前者の平均が約7㎜、後者の平均が約6.5㎜と後者がやや薄い。

以上のようにB群1類bで主体を占める土器は、4～7のように口縁部文様が爪形のみで施文されるグループと15～19といったように口縁部文様が前者と同様な爪形と「D」字形ないしは三角形状の刺突で施文され、前者よりも製作技法が繊細なグループに2分できることが明らかになった。仮に前者をb1、後者をb2としてその出自系統と編年的位置を探ってみたい。

まず出自系統であるが、b1は、口縁部に菱形文を構成しない有尾式（谷藤1997、下平・贄田1997）に類似し、施文されている爪形文も有尾式土器のそれに近い。また、製作技法も当地域出土の有尾式土器に近似する。b2は、爪形文はb1と同じであるが、「D」字形ないしは三角形状の刺突は他にほとんど類例がなく、刈羽村刈羽貝塚の最下層に当る黒土層出土の土器（八幡1958）や吉川町古町B遺跡6竪穴住居跡出土の土器（泰・小林1992）および石川県小牧大杉谷内遺跡の朝日C式段階の土器（本多・山本・木下・工藤1997）にそれらしきものがわずかに認められる程度である。また、爪形文と刺突文を横位に交互施文する点（本多・山本・木下・工藤1997）や製作技法が繊細な点は、朝日C式土器と共通する。それゆえ、b2は有尾式土器と朝日C式土器の両者の影響を受けて、b1よりも在地化がより進んだものといえよう。一方、b1は在地化はしつつあるが、まだ有尾式土器の範疇で捕らえられるものである。なお、b2のような土器を有尾式土器として捉えるか否かは今後の課題である。

編年的位置については、b1・b2に施文されている爪形文が連続またはそれに近いものであることから、谷藤編年Ⅱ期の後半以降（谷藤1997）に比定されるであろう。むしろここで問題となる点は、まだ不明となっている有尾式土器と朝日C式土器の並行関係である。b2を媒体とした場合、前述した様にb2の文様や製作技法から朝日C式土器は有尾式土器の後半段階（谷藤1997）かそれ以降に並行する可能性が出てきた。この可能性は、今後の資料の蓄積を待って事実関係を把握しかつ証明していかなければならない問題である。その場合、妙高山麓や頸城平野といった中部高地と北陸を結ぶ地域が重要な鍵を握っているものと考えられる。これらの地域における発掘調査や整理・報告および資料紹介などといった研究活動の進展を期待したい。

(2)　ＳＩ７の石器組成について

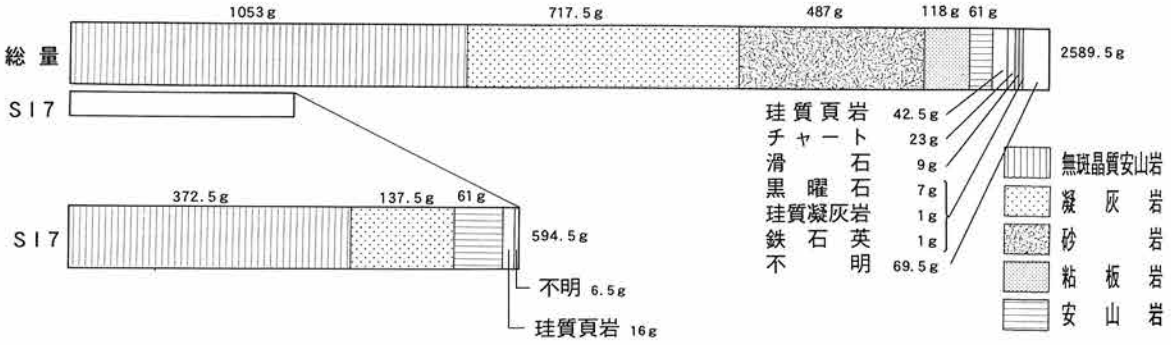
三本木新田Ｂ遺跡のＳＩ７は２基あるいは３基の住居跡が重複しているが、所属時期はいずれも縄文時代前期中葉の有尾式期と推定される。そのため、出土石器は有尾式期の石器組成の一端を表していると考えられる。

有尾式期の住居跡は標識遺跡の長野県有尾遺跡(戸沢1988)のほか、新潟県干溝遺跡（佐藤ほか1994)、群馬県分郷八崎遺跡(右島1986)、加茂遺跡(藤巻1984)、見立溜井遺跡(都丸ほか1985)、糸井宮前遺跡（関根1986）などで検出されている。これらの遺跡の立地はいずれも河川近くの扇状地か台地である。

上記の住居跡の石器組成と三本木新田Ｂ遺跡ＳＩ７の石器組成を比較検討してみたい。

半数以上の住居跡で保有しているのが石匙・磨石類・不定形石器（スクレイパーを含む）である。４割程度の保有率まで下げると打製石斧・磨製石斧・石皿・敲石が入ってくる。よって大摑みではあるが有尾式期の標準的な石器組成として石匙・磨石類・不定形石器を主体に、打製石斧・磨製石斧・石皿・敲石が伴うという形を考えておきたい。また、石錘を保有しないのも特徴的である。

三本木新田Ｂ遺跡ＳＩ７の石器組成は有尾式期の主体となる器種、石匙・磨石類・不定形石器のほか、石鏃・両極石器・剥片・石核・筋砥石・磨製石器からなる。この内ほかの有尾式期の住居跡であまり見られないものは両極石器と筋砥石である。筋砥石は非常に浅い溝状の砥面の形状から、玉造などの石器製作に伴うものとは性格が異なるものと考えられる。被加工物は木器や骨角器など比較的軟質のものであった可能性が高い。以上のように、ＳＩ７は点数は少ないものの有尾式期としては安定した石器器種組成であったことがわかる。石材組成は第14図に示したとおり無斑晶質安山岩が卓越している。



第14図　三本木新田Ｂ遺跡の剥片石器の重量構成

遺跡住居	所在	石錐	打斧	石皿	磨石	石錘	磨斧	不定形	石匙	石核	砥石	敲石	台石	その他
分郷八崎5号住	群馬				8		3	5	1	1		1		
分郷八崎7号住	群馬			2	1		1	7	1			2		
分郷八崎6号住	群馬	2							4	4				
分郷八崎8号住	群馬	3	3	1	5		3	9		2	2	2		
糸井宮前4号住	群馬			1	4			3	1			1		
糸井宮前64号住	群馬		1	3	12		4	6					2	
糸井宮前67号住	群馬		1	3	12		4	6	2				2	
糸井宮前72号住	群馬	1			9			3	3					
糸井宮前79号住	群馬		1		7		1				1	1	2	
糸井宮前86号住	群馬		2		4				4			2	1	1
糸井宮前100号住	群馬							1						
糸井宮前111号住	群馬			2	19			5	10		1	1	1	槍1
糸井宮前114号住	群馬				1			3						
糸井宮前116号住	群馬		1	2	31		1	11	3	1		3	2	耳飾
糸井宮前135号住	群馬			4	3			1	3			4	2	
糸井宮前142号住	群馬						1	1					1	
糸井宮前143号住	群馬		2		3		1	3	2			2	2	

遺跡住居	所在	石錐	打斧	石皿	磨石	石錘	磨斧	不定形	石匙	石核	砥石	敲石	台石	その他
糸井宮前144号住	群馬				3			5	1		4			
糸井宮前147号住	群馬		1		8							1	1	
糸井宮前152号住	群馬		1					2	6					
賀茂J-2号住	群馬		2	1	4							1		環状石器1
賀茂J-4号住	群馬				2			1				1		
見立溜井J6号住	群馬	1	3	1	4		2	9				1		礫器1
見立溜井J7号住	群馬		3	5	22		5	22	6	1				礫器1 槍1
見立溜井J9号住	群馬			1	2			12						礫器1
有尾	長野	4		1	10		1		3					
十二ノ后56号住	長野	4			4		1	1						
十二ノ后73后住	長野	1						1	2					
十二ノ后74号住	長野	6			3				4					
十二ノ后93号住	長野	1	1		2				4					玉1
十二ノ后111号住	長野	6		1			1	9	4	2		1		
干溝1号住	新潟		1											
干溝3号住	新潟							2	1					
住居数(33)		10	14	14	25	0	14	24	20	6	4	15	10	
保有率		30.3	42.4	42.4	75.8	0	42.4	72.7	60.6	18.2	12.1	45.5	30.3	

第６表　有尾式期の住居の石器組成

第７表　三本木新田Ｂ遺跡　遺構観察表

遺構名	位　　置	長軸方向	上　端		下　端		深度 cm	備　　考
			長軸 cm	短軸 cm	長軸 cm	短軸 cm		
ＳＩ７ａ	13E 3～5 7～10	N-12-°E	(700)	(630)	?	?	22	
ＳＩ７ｂ	13E 3～5 7～10 19・20 24～25 13E 6・11・16	N-12-°E	(1012)	(630)	?	?	22	ＳＩ７ａを拡張？
ＳＩ７ｃ	13F21	－	－	－	－	－	18	ＳＩ７ｂに切られる
ＳＩ７－Ｐ１	13E 5・10	N-44°-W	54	52	45	32	19.5	
ＳＩ７－Ｐ２	13E 4	N-13°-E	58	50	22	22	33	
ＳＩ７－Ｐ３	13E 8	N-19°-W	74	56	10	15	36	
ＳＩ７－Ｐ４	13E10	N-24°-E	44	40	16	16	40	
ＳＩ７－Ｐ５	13E13	N-47°-E	47	41	14	12	30	
ＳＩ７－Ｐ６	13E15	N-21°-E	80	66	52	38	18.5	
ＳＩ７－Ｐ７	13E19・20	N-59°-W	53	42	16	16	28.5	
ＳＩ７－Ｐ８	13E19	N-47°-E	60	50	36	35	32.5	
ＳＩ７－Ｐ９	13F16	N-67°-E	80	(64)	18	18	33.5	
ＳＩ７Ｐ10	13E19	N-45°-W	64	53	14	14	49.1	
ＳＩ７Ｐ11	13E25・13F21	N-38°-W	81	51	58	37	14	
ＳＩ７　炉	13E 9・14	N-8°-E	90	80	61	55	10	焼土・焼礫あり
ＳＫ　1	8C17・18・22・23	N-57°-E	223	216	218	209	7	底面ピット１基　縄文土器
ＳＫ　2	7E16・21	N-39°-W	140	117	106	97	34	底面ピット１基
ＳＫ　4	9D22～24 10D 2～4	N-37°-E	321	287	309	264	20	底面ピット３基
ＳＫ　5	10D23	N-64°-W	50	30	?	?	48	
ＳＫ　6	04F13	N-40°-W	106	57	80	42	95	底面ピット１基　陥穴状土坑
ＳＫ　10	8D16・17	N-38°-E	115	92	97	67	15	
ＳＫ　11	9C10・9D6	N-37°-E	86	80	76	76	15	
ＳＫ　12	9D6・11	N-39°-W	110	90	86	84	41	底面ピット１基
ＳＫ　13	8E8・13	N-57°-W	?	70	?	44	(38)	南側を広く攪乱されている。
ＳＫ　14	13E20・25	N-47°-W	176	161	153	132	23	土器・石器・ＳＩ７ｂの付帯施設？
ＳＫ　15	13E 4・5・9・10	N-13°-W	205	158	152	151	24	土器・石器　ＳＩ７ｂの付帯施設？

第８表　三本木新田Ｂ遺跡　石器観察表

番号	形　　態	出土位置	長cm	幅cm	厚cm	重量g	石　　材	備　　考
1	凹基無茎石鏃	ＳＩ７	2.0	1.45	0.45	1.2	珪質凝灰岩	
2	石鏃　未製品	ＳＩ７	3.5	1.9	0.5	4.0	無斑晶質安山岩	
3	石匙	ＳＩ７	4.0	5.8	11.0	16.0	珪質頁岩	横形
4	不定形石器	ＳＩ７	7.5	5.5	1.5	54.8	無斑晶質安山岩	Ｇ類
5	両極石器	ＳＩ７	2.3	2.65	0.8	4.5	無斑晶質安山岩	４極２対
6	磨製石器　未製品	ＳＩ７	3.9	2.2	0.87	6.6	滑石？	耳飾？
7	石核　接合資料	ＳＩ７	6.0	10.75	3.9	252.9	無斑晶質安山岩	７ａと７ｂの接合資料
7a	石核	ＳＩ７	6.0	10.75	3.9	228.8	無斑晶質安山岩	７ｂと接合
7b	剥片	ＳＩ７	4.8	3.7	1.6	24.1	無斑晶質安山岩	７ａと接合
8	剥片	ＳＩ７（ＳＫ14）	5.7	6.45	1.8	52.5	無斑晶質安山岩	
9	磨石類	ＳＩ７	12.0	5.0	3.8	333.4	砂岩	Ｃ類　彫刻あり
10	磨石類	ＳＩ７	11.7	7.9	5.6	677.5	安山岩	Ｃ類
11	磨石類	ＳＩ７	12.4	8.8	6.0	829.1	安山岩	Ｃ類
12	磨石類	ＳＩ７	13.6	5.9	3.0	310.6	安山岩	Ｄ類
13	磨石類	ＳＩ７　Ｐ９	6.3	5.3	3.0	155.6	安山岩	Ｅ類
14	磨石類	ＳＩ７	14.0	5.5	3.4	325.3	砂岩	Ｆ類
15	筋砥石	ＳＩ７	16.4	8.5	6.6	981.1	砂岩	
16	磨石類　破損品	ＳＫ４	6.7	6.2	2.4	128.8	砂岩	Ｇ類
17	剥片	ＳＫ４	2.5	3.4	0.6	4.0	珪質頁岩	
18	剥片	ＳＫ４	5.3	4.4	1.1	21.5	無斑晶質安山岩	
19	剥片	ＳＫ４	4.3	3.0	0.9	7.0	チャート	
20	凹基無茎石鏃	表面採集	2.3	1.3	3.0	0.8	珪質頁岩	
21	凹基無茎石鏃	８Ｄ　攪乱	2.3	1.6	0.5	1.6	チャート	左脚欠損
22	石匙	10Ｂ	3.4	4.4	0.6	9.0	無斑晶質安山岩	横形
23	不定形石器	ＳＫ４西　攪乱	2.9	2.6	0.6	5.7	珪質頁岩	Ｂ１類？　下端欠損
24	不定形石器	17Ｄ	7.8	8.9	1.7	118.8	粘板岩	Ｂ２類
25	不定形石器	表面採集	7.6	3.7	1.4	38.6	無斑晶質安山岩	Ｂ１類
26	不定形石器	５Ｃ	9.9	7.4	2.5	144.5	凝灰岩	Ｇ類
27	不定形石器	14Ｄ	6.4	6.7	1.3	48.9	無斑晶質安山岩	Ｇ類
28	不定形石器	ＳＫ４西　攪乱	2.3	4.5	0.8	6.4	無斑晶質安山岩	Ｊ類
29	不定形石器	表面採集	13.2	7.9	2.7	228.9	凝灰岩	Ｊ類
30	不定形石器	11Ｂ	6.1	4.5	1.4	38.3	無斑晶質安山岩	Ｊ類
31	不定形石器	16Ｂ	6.1	4.4	1.4	35.3	無斑晶質安山岩	Ｊ類
32	両極石器	14Ｄ	6.9	2.0	2.0	25.1	無斑晶質安山岩	２極１対
33	両極石器	13Ｄ	3.7	2.4	1.0	8.5	無斑晶質安山岩	２極１対
34	両極石器	10Ｄ	3.9	2.9	0.55	8.0	チャート	２極１対

35	両極石器	14E	3.7	4.5	1.5	26.7	無斑晶質安山岩	2極1対
36	両極石器	表面採集	2.6	1.7	0.6	2.2	黒曜石	2極1対
37	両極石器	10D	3.4	4.3	0.9	12.1	珪質頁岩	2極1対
38	両極石器	1E　攪乱	6.6	7.5	2.2	109.5	無斑晶質安山岩	2極1対
39	両極石器	8B	4.3	7.0	2.2	85.1	無斑晶質安山岩	2極1対
40	両極石器	12D	4.8	5.5	1.5	37.0	無斑晶質安山岩	4極2対
41	剥片	6B	6.5	9.4	2.0	94.9	砂岩	
42	剥片	16C	5.9	3.6	1.2	23.5	砂岩	
43	剥片	12C	8.6	9.7	1.9	122.7	凝灰岩	
44	剥片	6B	5.1	7.0	2.1	52.9	凝灰岩	
45	磨製石器　未製品	表面採集	4.1	2.3	0.82	12.7	蛇紋岩	
46	磨石類	11D	10.0	8.4	4.1	404.2	安山岩	A類
47	磨石類	14C	12.1	9.0	3.5	605.5	安山岩	A類
48	磨製石器　未製品	14E	4.7	3.4	0.9	24.6	蛇紋岩	磨製石斧の転用品？
49	磨石類	6D	7.2	4.6	8.0	341.3	安山岩	A類
50	磨石類	13B	7.7	5.6	4.6	364.6	安山岩	A類
51	磨石類	15E	14.1	10.6	6.4	910.8	安山岩	B類
52	磨石類	14D	11.2	8.0	5.0	580.2	安山岩	B類
53	磨石類	14D	14.1	5.3	7.4	828.7	砂岩	C類
54	磨石類	5C	17.8	8.1	4.4	852.5	安山岩	C類
55	磨石類	15E	11.8	5.3	4.5	459.7	砂岩	C類
56	磨石類	10D	11.6	11.2	4.9	782.8	安山岩	C類
57	磨石類	12D	16.4	9.4	7.6	1500.0	安山岩	C類
58	磨石類	11A	9.7	9.5	5.1	607.8	安山岩	C類
59	磨石類	12D	9.5	7.2	5.1	369.6	安山岩	D類
60	磨石類	13D	10.5	5.6	3.6	230.2	安山岩	D類
61	磨石類	14D	9.9	7.4	5.3	527.7	安山岩	D類
62	磨石類	12E	9.4	7.6	6.7	460.5	安山岩	D類
63	磨石類	16C	10.8	9.7	3.1	419.1	安山岩	E類
64	磨石類	12B	5.4	6.5	3.1	123.1	安山岩	F類
65	磨石類	12D	9.4	9.7	4.8	647.1	花崗岩	F類
66	磨石類	3T	9.6	8.4	5.6	600.9	安山岩	G類
67	磨石類	13C	9.6	9.3	5.7	759.1	安山岩	G類
68	石皿	12C	14.5	17.0	6.0	1840.0	安山岩	両側面と掃出口に彫刻あり
69	石皿	13E	23.6	17.1	6.1	2320.0	安山岩	右側面に彫刻あり
70	砥石	12C	21.2	11.5	8.0	2770.0	砂岩	
71	砥石	12D	10.6	8.7	3.4	325.3	砂岩	筋あり
72	砥石	14D	18.5	12.3	9.2	2500.0	砂岩	

第９表　三本木新田Ｂ遺跡　石器組成表

出土位置	形　態	石材										小計
		無斑晶質安山岩	珪質頁岩	チャート	凝灰岩	黒曜石	粘板岩	安山岩	砂岩	滑石	その他	
ＳＩ７	石鏃	1			1							2
	石匙		1									1
	不定形石器											
	Ｇ類	1										1
	両極石器	1										1
	剥片	4			1			1				6
	石核	1										1
	磨石類											
	Ｃ類							2	1			3
	Ｄ類							1				1
	Ｅ類							1				1
	Ｆ類								1			1
	筋砥石								1			1
	磨製石器									1？		1
		8	1	0	2	0	0	5	3	1		20
ＳＫ４	剥片	1	1	1								3
	磨石類											
	Ｇ類											1
		1	1	1					1			4
包合層	石鏃		1								鉄石英	2
	石匙	1										1
	両極石器	6	1	1		1						9
	不定形石器											
	Ｂ類	1	1				1					3
	Ｇ類	1			1							2
	Ｊ類	3			1							4
	剥片	18	2	2	5	1		1	4	1？	流紋1	35
	磨石類											
	Ａ類							4				4
	Ｂ類							2				2
	Ｃ類							5	1			6
	Ｄ類							4				4
	Ｅ類							1				1
	Ｆ類							1			花崗１	2
	Ｇ類							2				2
	不明							1				1
	砥石								4			4
	筋砥石								1			1
	石皿							2	1			3
	磨製石斧？										蛇紋2	2
		30	5	3	7	2	1	23	11	1	5	88
総　計		39	7	4	9	2	1	28	15	2	5	112

要　　約

萩清水遺跡

1．萩清水遺跡は新井市三本木新田字萩清水９－１他に所在する。遺跡は妙高山麓から流れ出て日本海へ注ぐ関川の支流、矢代川右岸の火砕流台地の上に立地する。

2．発掘調査は国道18号上新バイパスの道路法線内に遺跡が存在したことに起因する。一時調査は昭和61年８月23日から９月７日、二次調査は昭和61年９月８日から10月17日にかけて実施した。調査面積は約4,000㎡である。

3．調査の結果、縄文時代前期の土器・石器や、竪穴住居跡、陥穴状土坑などが検出された。

4．竪穴住居跡は１基検出されたのみだが、砥石が大量に出土したことや砥石を据えた土坑が存在することなどから何らかの研磨作業が行われていた場所であったと推定される。構築時期は諸磯ｂ式期とみられる。

5．陥穴状土坑は22基検出されたが、台地を全面的に調査したわけではないので、全体の配列などは明らかにすることはできなかった。構築時期は形態から縄文時代前期前葉から末葉までの可能性が高い。

6．出土土器は前期後葉を主体として早期前半から晩期後葉のものが断続的にある。

三本木新田Ｂ遺跡

1．三本木新田Ｂ遺跡は新井市三本木新田字長峯559他に所在する。遺跡は妙高山麓から流れ出て日本海へ注ぐ関川の支流、矢代川右岸の火砕流台地の上に立地する。

2．発掘調査は国道18号上新バイパスの道路法線内に遺跡が存在したことに起因する。一次調査は昭和61年８月27日から９月26日、二次調査は昭和62年８月18日から10月20日にかけて実施した。調査面積は約8,650㎡である。

3．調査の結果、縄文時代前期の土器・石器や、竪穴住居、土坑などが検出された。

4．竪穴住居跡は前期の有尾式期に構築されたと推定され、拡張の痕がみられた。

5．土器は前期中葉を主体に早期後半・前期中葉・前期末葉～中期初頭・中期末葉・後期後葉のものがある程度のまとまりをもって出土した。

引用・参考文献

阿部朝衛　1987　「第６章　磨製石斧生産の様相」『史跡　寺地遺跡』新潟県西頸城郡青海町寺地遺跡発掘調査報告書　青海町

阿部雄生　1995　「中ノ沢遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成６年度』㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団

荒川隆史　1994　「和泉Ａ遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成５年度』㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団

荒川隆史　1995　「和泉Ａ遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成６年度』㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団

荒川隆史　1996　「和泉Ａ遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成７年度』㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団

石川智紀　1995　「第Ⅴ章５　石器」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅳ　元屋敷遺跡Ⅰ』朝日村教育委員会

今村啓爾　1973　「霧ケ丘遺跡の土坑群に関する考察」『霧ケ丘』霧ケ丘遺跡調査団

池田亨・細谷菊治　1990　「第Ⅴ章第２節　石器」『水上遺跡』新潟県南魚沼郡大和町名木沢．水上遺跡発掘調査概報　大和町埋蔵文化財調査報告第４号　大和町教育委員会

宇佐美篤美・高橋保　1987　「赤坂遺跡」『柏崎市史資料集　考古篇　１』柏崎市史編さん委員会

大杉真実　1996　「第Ⅳ章６・Ａ遺構」『清水上遺跡Ⅱ』関越自動車道堀之内インターチェンジ関連発掘調査報告書　新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集　㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団

岡本郁栄・宮腰公健・小島幸雄　1982　『奥の城（西峯）遺跡　第二次調査該報－昭和56年度－』中郷村教育委員会

岡本勇ほか　1967　『新井市史第二次調査報告』新井市史編修委員会

小熊博史　1994　「Ⅳ３(2)石器」『松葉遺跡－中山間地域農村活性化総合整備事業に伴う発掘調査－』長岡市教育委員会

小野　昭・古川知明ほか　1982　『原通八ツ塚』新井市教育委員会

小野　昭・前山精明ほか　1988　「巻町豊原遺跡の調査」『巻町史研究』Ⅳ　巻町

小野　昭　1994　「豊原遺跡」『巻町史』　巻町

柿沼恵介　1986　「Ⅲ２(2)住居跡」『分郷八崎遺跡』関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書　群馬県北橘村教育委員会

川上貞雄　1985　「Ⅲ　遺物」『多岐ノ脇遺跡発掘調査報告書』西山町教育委員会

北村　亮　1990　『岩原Ⅰ遺跡　上林塚遺跡』関越自動車道関係発掘調査報告書　新潟県埋蔵文化財調査報告書第56集　新潟県教育委員会

楠本政助　1987　「４．骨角貝器　製作・用法実験」『縄文文化の研究７　道具と技術』雄山閣

小池義人　1995　「関川谷内Ａ遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成６年度』㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団

小池義人　1996　「第Ⅳ章　籠峰遺跡」『横引遺跡　籠峰遺跡　柳平遺跡』上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅰ　新潟県埋蔵文化財調査報告書第74集　㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団

小林康男　1982　『舅屋敷』塩尻市教育委員会

小林義広　1988　「５．遺物」『桑切遺跡発掘調査報告書』下田村文化財調査報告書第26号

小島正巳・早津賢二　1992　「妙高山麓松ケ峰No.237遺跡採集の押型文土器－日計式の波及－」『長野県考古学会誌』64　長野県考古学会

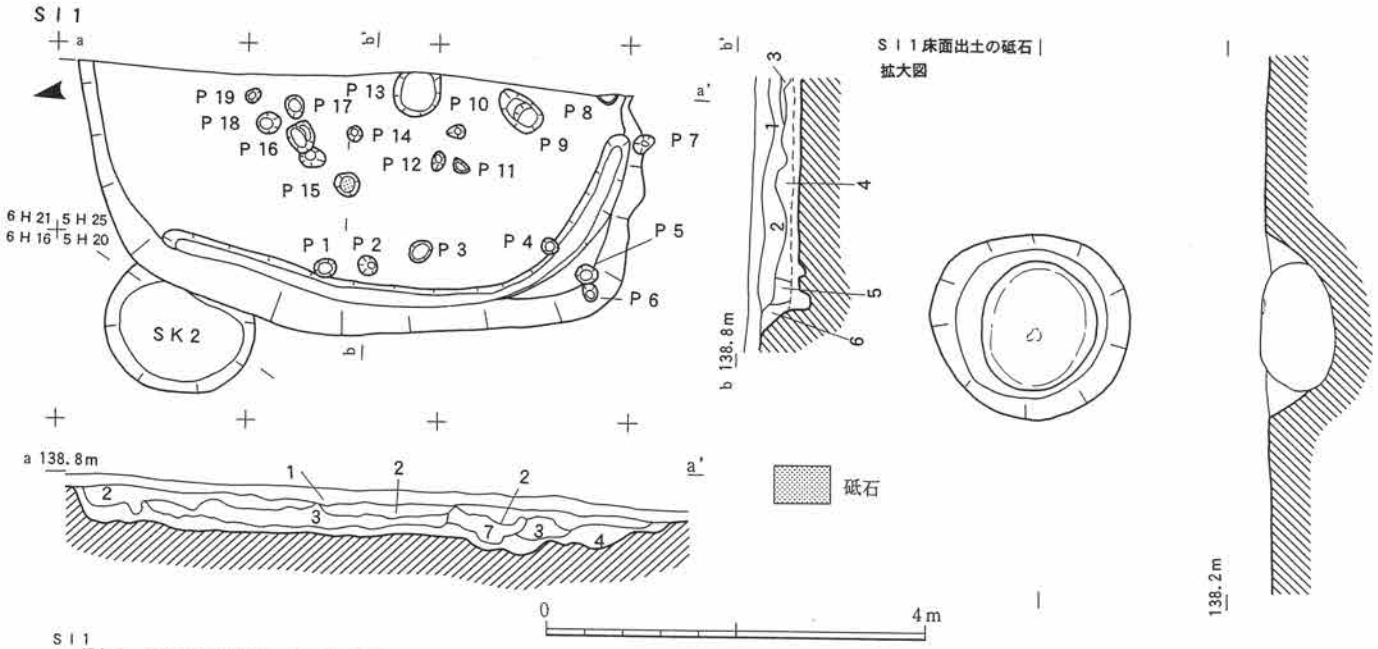
小島正巳　1993　「妙高山麓松ケ峰No.237遺跡の縄文時代早期土器」『新潟考古』第４号　新潟県考古学会

小島正巳　1995　「妙高山麓における最近の考古学事情」『妙高火山研究所　年報』第３号　妙高火山研究所
小日向正　1976　「第４章　第１節(2)石器」『古屋敷遺跡』田上町文化財調査報告書第２輯　田上町教育委員会
駒形敏朗・石原正敏・小熊博史　1984　「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(1)」『長岡市立科学博物館研究報告』第19号
駒形敏朗・石原正敏・小熊博史　1985　「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(2)」『長岡市立科学博物館研究報告』第20号
駒形敏朗・石原正敏・小熊博史　1986　「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(3)」『長岡市立科学博物館研究報告』第21号
駒形敏朗・石原正敏・小熊博史　1987　「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(4)」『長岡市立科学博物館研究報告』第22号
駒形敏朗・小熊博史　1988　「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(5)」『長岡市立科学博物館研究報告』第23号
駒形敏朗・小熊博史　1989　「新潟県における縄文早期・前期の基礎的研究(6)」『長岡市立科学博物館研究報告』第24号
齊藤基生　1972　「Ｖ２　石器」『羽黒遺跡』新潟県見附市羽黒遺跡発掘調査報告　見附市教育委員会
佐藤雅一　1987　『岩原Ⅱ遺跡』湯沢町埋蔵文化財報告書第７輯　湯沢町教育委員会
佐藤雅一・石坂圭介ほか　1994　『中里村文化財調査報告書第６輯　干溝遺跡』県営圃場整備事業桔梗原地区に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（その１）
島田靖久　1986　『鷹之巣遺跡』新潟県中魚沼郡中里村文化財調査報告書第３集　中里村教育委員会
下平博行・贄田　明　1997　「長野県における前期中葉の土器群について」『第10回縄文セミナー　前期中葉の諸様相』　縄文セミナーの会
鈴木次郎　1977　「第Ⅵ章第２節　石器」『尾崎遺跡』神奈川県埋蔵文化財調査報告13　神奈川県教育委員会
鈴木道之助　1991　『図録　石器入門事典　縄文』柏書房
関根慎二　1986　「第Ⅰ章　検出された遺構と遺物」『糸井宮前遺跡Ⅱ』関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書第14集　群馬県教育委員会
高橋　桂・中島庄一・金井正三　1976　「北信濃大倉崎遺跡調査報告」『信濃』28－４　信濃史学会
高橋　桂ほか　1990　『上野遺跡・大倉崎遺跡』小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ　飯山市埋蔵文化財調査報告書第21集　飯山市教育委員会
高橋　勉　1985　「Ⅱ　地理的・歴史的環境」『月岡遺跡　範囲確認緊急調査報告書』新井市教育委員会
高橋　勉　1989　「第Ⅱ章　遺跡の位置及び周辺の遺跡」『杉明遺跡　発掘調査報告書』新井市教育委員会
高橋　勉　1994　「高床山遺跡群」『新井市遺跡確認調査報告書』新井市教育委員会
高橋保雄　1990　「第Ⅳ章２節　石器」『清水上遺跡』関越自動車道関係発掘調査報告書　新潟県埋蔵文化財調査報告書第55集　新潟県教育委員会
高橋保雄　1992　「第Ⅳ章Ｂ　石器類」『五丁歩遺跡　十二木遺跡』関越自動車道関係発掘調査報告書　新潟県埋蔵文化財調査報告書第57集　新潟県教育委員会
滝沢規朗　1995　「関川谷内Ｂ遺跡」『新潟県埋蔵文化財調査事業団年報　平成６年度』㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団
田中　靖　1988　「第Ⅴ章第６節２．出土石器について」『原山遺跡　大塚遺跡』北陸自動車道糸魚川地区発掘調査報告書Ⅳ　新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集
田中　靖　1991　「第Ⅳ章２Ｃｄ　石匙」『城之腰遺跡』関越自動車道関係発掘調査報告書　新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集　新潟県教教育委員会
谷藤保彦　1997　「北関東地域における前期中葉土器群の実相」『第10回縄文セミナー　前期中葉の諸様相』縄文セミナーの会
親跡　喬　1990　『図録　小丸山遺跡』中郷村教育委員会

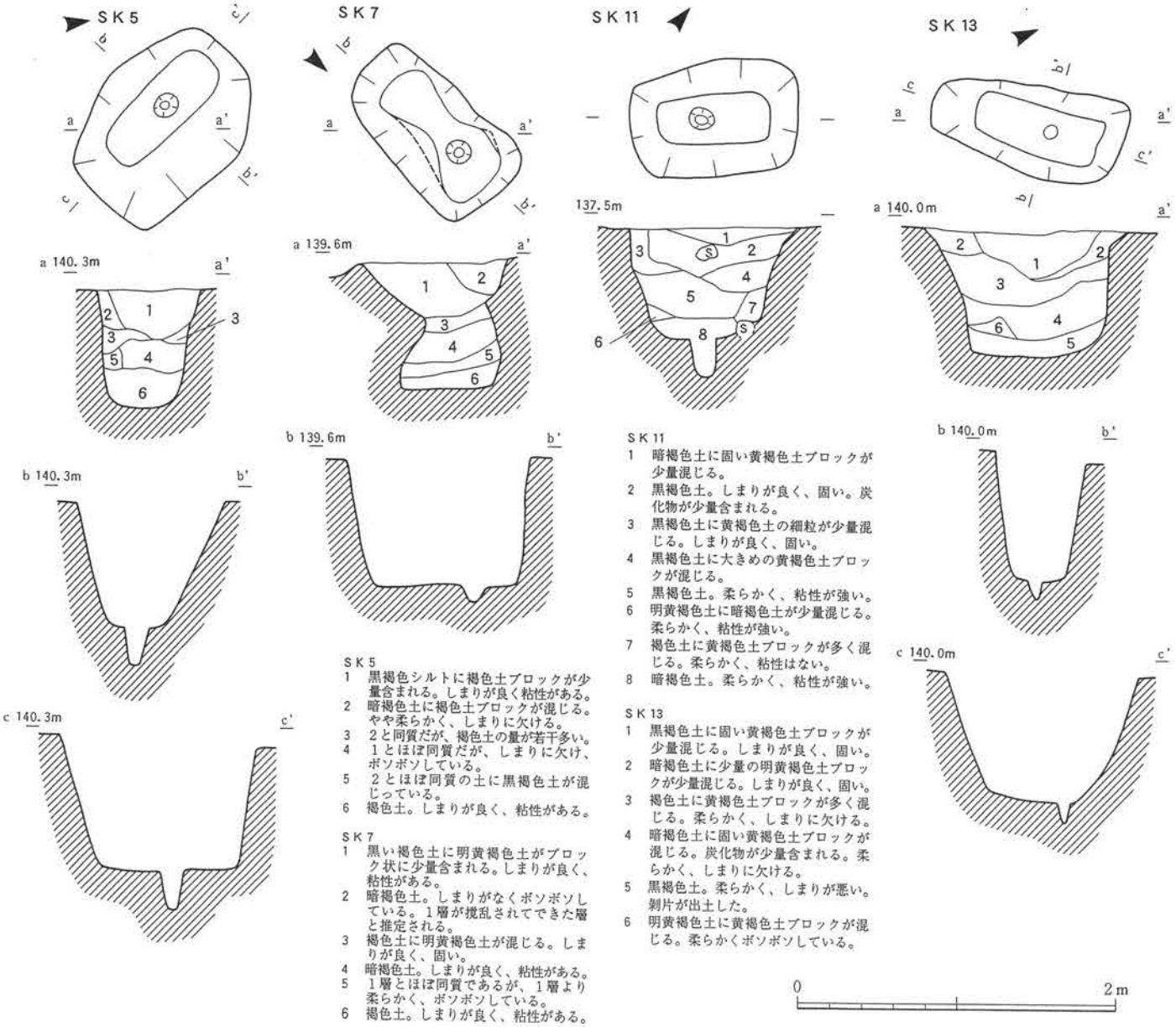
親跡　喬　1992ａ　『図録　柿ノ木町遺跡』妙高村教育委員会
親跡　喬　1992ｂ　『上ッ平遺跡発掘調査　概況報告書』妙高村教育委員会
土田孝雄　1986　『糸魚川市史　資料集－考古編－』糸魚川市役所
鶴巻康志　1992　「Ⅲ６．石器・骨角器」『館ノ内遺跡Ｄ地点の調査』新発田市教育委員会
寺崎裕助　1988　「刈羽式土器について（予察）」『新潟県考古学談話会会報』第１号　新潟県考古学談話会
寺崎裕助　1995　「新潟県における中期初頭の土器－関東・中部高地系土器を中心として－」『第８回縄文セミナー　中期初頭の諸様相』縄文セミナーの会
寺崎裕助　1996　「縄文時代前期前半の土器について」『清水上遺跡Ⅱ』新潟県埋蔵文化財調査報告書第72集　㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団
寺崎裕助　1997　「吉川町古町Ｂ遺跡について」『新潟考古学談話会会報』第17号　新潟考古学談話会
寺村光晴　1987　「第３章　硬玉工房址と攻玉技術－寺地遺跡の硬玉生産をめぐって－」『史跡　寺地遺跡』新潟県西頸城郡青海町寺地遺跡発掘調査報告書　青海町
寺村光晴・三井田忠・関　雅之　1959　「新潟県中頸城郡柿崎町鍋屋町遺跡概報」『上代文化』第29輯　國学院大学考古学会
寺村光晴・安藤文一・千家和比古　1979　『大角地遺跡－飾玉とヒスイの工房址－』青海町教育委員会
田海義正　1993　「第Ⅳ章５　石器」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅲ　前田遺跡（下ゾリ・下クボ遺跡道路部分）』朝日村教育委員会
富樫秀之　1990　「第Ⅳ章２Ｂ　石器」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅰ　下ゾリ遺跡』朝日村教育委員会
富樫秀之　1991　「第Ⅳ章５　石器」『奥三面ダム関連遺跡発掘調査報告書Ⅱ　下クボ遺跡』朝日村教育委員会
常磐井智行　1990　「第３編第２章１　遺構」『上野遺跡・大倉崎遺跡』小沼湯滝バイパス関係遺跡発掘調査報告Ⅱ　飯山市埋蔵文化財調査報告書第21集　飯山市教育委員会
戸沢充則　1988　「Ⅳ２　縄文時代の住居と集落」『長野県史』考古資料編全１巻(4)遺構・遺物　長野県
都丸　肇・茂木允視　1985　『見立　溜井遺跡　見立大久保遺跡－関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書ＫＣ－Ｖ－』群馬県勢多郡赤城村教育委員会
立木(土橋)由理子　1996　「第Ⅲ章　横引遺跡」『横引遺跡　籠峰遺跡　柳平遺跡』上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅰ　新潟県埋蔵文化財調査報告書第74集　㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団
立木(土橋)由理子ほか　1996　『大堀遺跡』一般国道18号妙高野尻バイパス関係発掘調査報告書Ⅰ　新潟県埋蔵文化財調査報告書第75集　㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団
中川成夫・岡本　勇・小松芳男・泰　繁治　1959　『顕聖寺遺跡』浦川原村教育委員会
中川成夫・岡本　勇・加藤晋平　1967　「葎生遺跡」『頸南』新潟県教育委員会・頸南地区総合学術調査会
中郷村教育委員会　1987　『籠峰遺跡発掘調査概報』
中郷村教育委員会　1988　『籠峰遺跡発掘調査概報Ⅱ』
中郷村教育委員会　1989　『縄文人の心と手－籠峰遺跡発掘調査概報Ⅱ』
中郷村教育委員会　1996　『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅰ』遺構編
中島　宏　1980　「Ｖ１.(1)住居跡」『伊勢塚・東光寺裏遺跡』上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ　埼玉県遺跡発掘調査報告書第26集　埼玉県教育委員会
野村忠司　1996　「第Ⅱ章　籠峰遺跡の環境」『籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅰ』遺構編　中郷村教育委員会
新潟県　1980　『新潟県遺跡地図』新潟県教育委員会
新潟県　1983　『新潟県史　資料編１　原始・古代一　考古編』新潟県
秦　繁治　1986　「Ｖ４　陥し穴状遺構」『峯山Ｂ遺跡』新潟県中頸城郡板倉町峯山Ｂ遺跡発掘調査報告書　板倉町埋蔵文化財調査報告第１　板倉町教育委員会
秦　繁治　1992　「Ⅳ２．縄文時代の遺構」『古町Ｂ遺跡発掘調査報告書』吉川町教育委員会
秦　繁治・小林義広　1992　『古町Ｂ遺跡発掘調査報告書』吉川町教育委員会

早川正一　1987　「３．石器Ⅱ　磨製石斧」『縄文文化の研究７　道具と技術』雄山閣
早津賢二　1985　『妙高火山群－その地質と活動史－』第一法規
早津賢二　1995　「妙高火山－赤倉火砕流の14Ｃ年代」『道添遺跡Ⅱ』妙高村教育委員会
早津賢二・古川成光　1981　「妙高火山赤倉火砕流堆積物と田口泥流堆積物の^{14}Ｃ年代」『第四紀研究』20
早津賢二・小島正己　1985　「火山噴出物と先史時代遺物包含層との層位関係」『妙高火山群－その地質と活動史－』第一法規
樋口昇一ほか　1986　十二之后遺跡『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－諏訪市その４－』長野県教育委員会
藤巻正信　1991　「第Ⅳ章Ｃ１）ｒ砥石・ｕ擦切具等」『城之腰遺跡』関越自動車道関係発掘調査報告書　新潟県埋蔵文化財調査報告書第29集　新潟県教育委員会
藤巻幸男　1984　『加茂遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団
星奈津子　1996　「第Ⅱ章　２．周辺の遺跡」『横引遺跡　籠峰遺跡　柳平遺跡』上信越自動車道関係発掘調査報告書Ⅰ　新潟県埋蔵文化財調査報告書第74集　㈶新潟県埋蔵文化財調査事業団
本田秀生・山本正敏・木下哲夫・工藤俊樹　1997　「北陸における縄文時代前期中葉の土器様相」『第10回縄文セミナー　前期中葉の諸様相』　縄文セミナーの会
本間信昭・室岡博　1976　『兼俣遺跡』妙高高原町文化財調査報告書第１集　妙高高原町教育委員会
前山精明　1987　「巻町伏部採集の擦切石斧」『まきの木』第37号　巻町郷土資料館友の会
増山仁　1984　「13　擦切石器」『金沢市新保本町チカモリ遺跡－石器編－』金沢市教育委員会
右島和夫　1986　「Ⅲ－２（石器）」『分郷八崎遺跡』関越自動車道（新潟線）地域埋蔵文化財発掘調査報告書　群馬県北橘村教育委員会
南久和　1984ａ　「12　有溝砥石」『金沢市新保本町チカモリ遺跡－石器編－』金沢市教育委員会
南久和　1984ｂ　「縄文時代後晩期の木器・骨角器及び北陸の石器組成の諸問題について」『金沢市新保本町チカモリ遺跡－石器編－』金沢市教育委員会
宮下健司　1987　「３．石器Ⅱ　有溝砥石」『縄文文化の研究７　道具と技術』雄山閣
宮下健司　「縄文時代の道具　砥石」『長野県史』
妙高団体研究グループ　1969　「妙高火山の形成史と山麓の水理地質－新潟県の第四系・そのＸ－」『新潟大学教育学部高田分校研究紀要』№14
室岡　博　1986ａ　『兼俣遺跡（Ｄ地区）』妙高高原町文化財調査報告書第７集　妙高高原町教育委員会
室岡　博　1986ｂ　『中古遺跡』妙高村教育委員会
室岡　博　1994　『道添遺跡Ⅰ』妙高村教育委員会
室岡　博　1995　『道添遺跡Ⅱ』妙高村教育委員会
室岡　博・寺村光晴　1960　『鍋屋町遺跡』柿崎町教育委員会
八幡一郎　1958　『刈羽貝塚』新潟県教育委員会
山本暉久　1982　「竪穴住居」『縄文文化の研究』第８巻　社会・文化　雄山閣
山本正敏　1990　「Ⅱ　石器各説」『境Ａ遺跡－石器編－（本文）』北陸自動車道遺跡調査報告－朝日町編５－富山県教育委員会

図　　版



S I 1
1　褐色土。炭化物が少量混じっている。しまりに欠け、さらさらしている。遺物が最も多く含まれている層である。
2　暗褐色土に小礫が少量混じる。炭化物も1層より多く含まれている。しまりが良く、固い。
3　黒褐色土に明黄褐色土の小粒が混じっている。炭化物が最も多く含まれている層である。しまりが良く、固い。
4　褐色土に明黄褐色土ブロックが混じる。小礫が少量含まれている。しまりが良く、固い。遺物は含まれていない。
5　褐色土に明黄褐色土ブロックが混じる。明褐色土ブロックの割合が4層より多い。小礫が少量含まれる。しまりが悪い。
6　明黄褐色土に褐色土が混じる。炭化物が少量含まれる。しまりが良く、固い。
7　明黄褐色土に少量の黄褐色土ブロックが含まれる。小礫が多く含まれる。しまりが良く、非常に固い

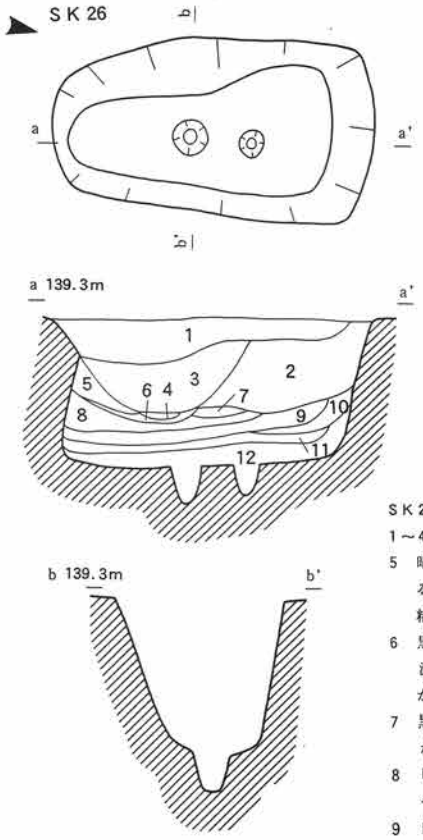


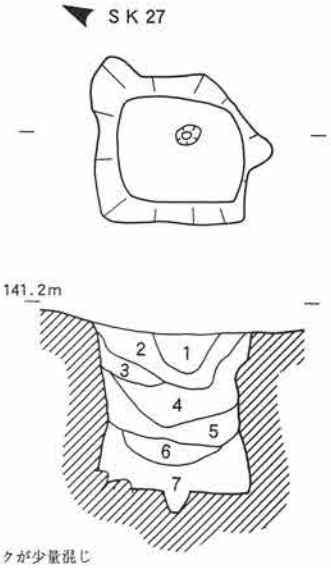
SK 5
1　黒褐色シルトに褐色土ブロックが少量含まれる。しまりが良く粘性がある。
2　暗褐色土に褐色土ブロックが混じる。やや柔らかく、しまりに欠ける。
3　2と同質だが、褐色土の量が若干多い。
4　1とほぼ同質だが、しまりに欠け、ボソボソしている。
5　2とほぼ同質の土に黒褐色土が混じっている。
6　褐色土。しまりが良く、粘性がある。

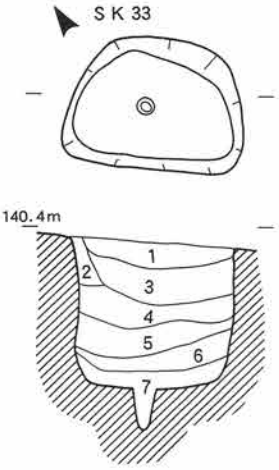
SK 7
1　黒い褐色土に明黄褐色土がブロック状に少量含まれる。しまりが良く、粘性がある。
2　暗褐色土。しまりがなくボソボソしている。1層が撹乱されてできた層と推定される。
3　褐色土に明黄褐色土が混じる。しまりが良く、固い。
4　暗褐色土。しまりが良く、粘性がある。
5　1層とほぼ同質であるが、1層より柔らかく、ボソボソしている。
6　褐色土。しまりが良く、粘性がある。

SK 11
1　暗褐色土に固い黄褐色土ブロックが少量混じる。
2　黒褐色土。しまりが良く、固い。炭化物が少量含まれる。
3　黒褐色土に黄褐色土の細粒が少量混じる。しまりが良く、固い。
4　黒褐色土に大きめの黄褐色土ブロックが混じる。
5　黒褐色土。柔らかく、粘性が強い。
6　明黄褐色土に暗褐色土が少量混じる。柔らかく、粘性が強い。
7　褐色土に黄褐色土ブロックが多く混じる。柔らかく、粘性はない。
8　暗褐色土。柔らかく、粘性が強い。

SK 13
1　黒褐色土に固い黄褐色土ブロックが少量混じる。しまりが良く、固い。
2　暗褐色土に少量の明黄褐色土ブロックが少量混じる。しまりが良く、固い。
3　褐色土に黄褐色土ブロックが多く混じる。柔らかく、しまりに欠ける。
4　暗褐色土に固い黄褐色土ブロックが混じる。炭化物が少量含まれる。柔らかく、しまりに欠ける。
5　黒褐色土。柔らかく、しまりが悪い。剝片が出土した。
6　明黄褐色土に黄褐色土ブロックが混じる。柔らかくボソボソしている。







SK 26

1～4　攪乱

5　暗褐色土に黄褐色土ブロックが少量混じる。炭化物が少量混じる。やや柔らかく、粘性がある。

6　黒褐色土に大きめの黄褐色土ブロックが混じる。炭化物が多く含まれる。柔らかく、粘性がある。

7　黒褐色土に黄褐色土の細粒が少量含まれる。

8　明黄褐色土に明褐色土が混じる。やや柔らかく、粘性がある。

9　暗褐色土に黄褐色土ブロックがごくわずかに混じる。やや柔らかく、粘性がある。

10 褐色土に明黄褐色土が多く混じる。

11 黒褐色土に黄褐色土の細粒が含まれる。炭化物が多く含まれる。柔らかく、粘性がある。

12 褐色土に黄褐色土ブロックが多く含まれる。やや柔らかく、粘性がある。

1～4層から土器片が出土した。

SK 27

1　褐色土。しまりが良く、固い。

2　暗褐色土。ややしまりに欠ける。

3　暗褐色土。炭化物を含む。しまりが良く、粘性がある。

4　黒褐色土。柔らかく、粘性が強い。

5　褐色土に明黄褐色土が混じる。

6　明黄褐色土。柔らかくボソボソしている。

7　褐色土。やや柔らかく、粘性が強い。

SK 33

1　黒褐色土に固い黄褐色土ブロックがごく少量含まれる。しまりが良く、固い。

2　暗褐色土に黒褐色土が少量混じる。しまりが良く、固い。

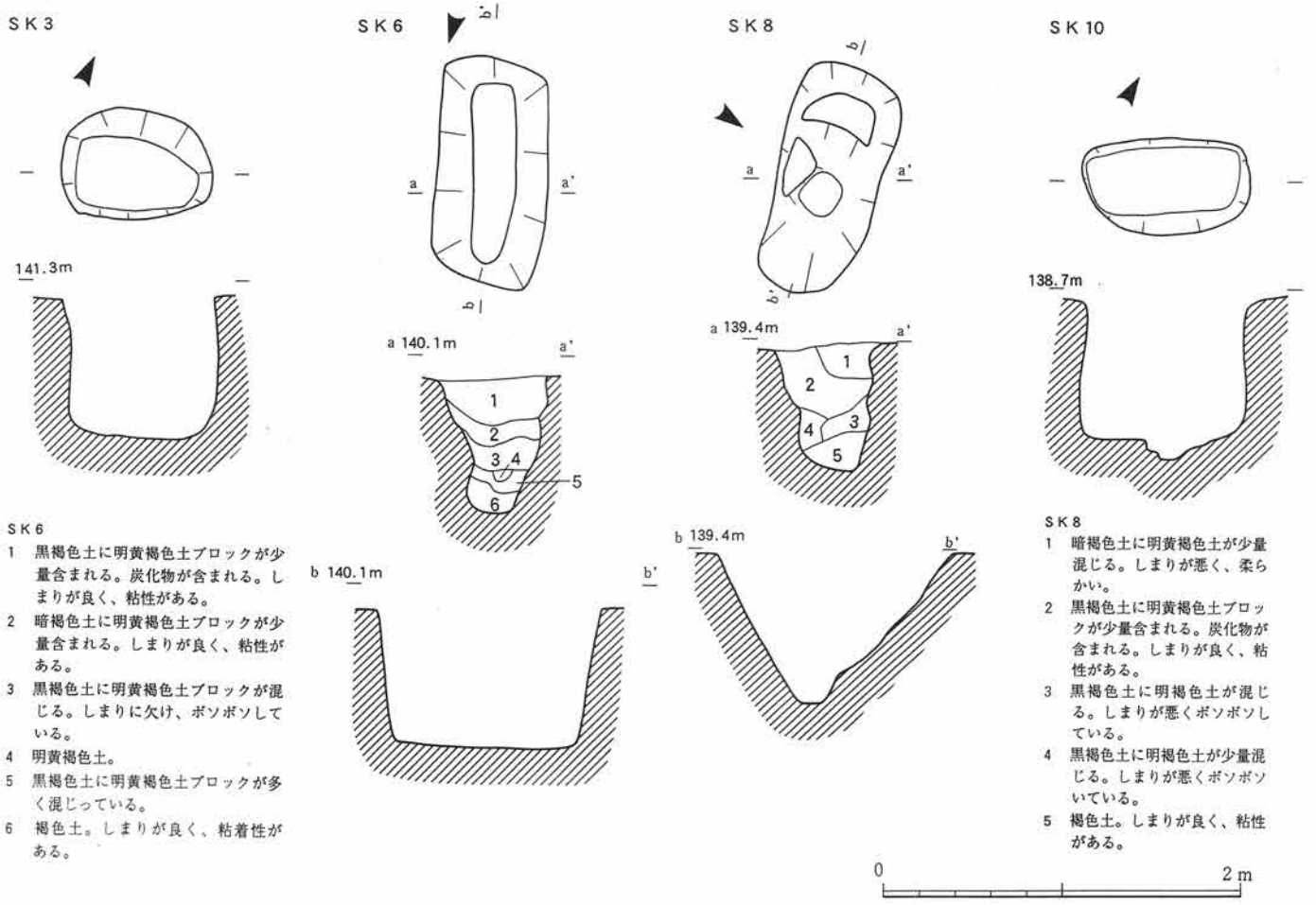
3　明黒褐色土に黄褐色土ブロックが1層より多く混じる。1層より柔らかいが、しまりはある。

4　黒褐色土に固い黄褐色土ブロックがごく少量含まれる。しまりが良く、固い。

5　暗褐色土に大きい明黄褐色土ブロックが入っている。しまりが良く、固い。

6　黒褐色土に大きい明黄褐色土ブロックが入っている。柔らかく、粘性が強い。

7　暗褐色土。しまりが良く、粘性が強い。



SK 6

1　黒褐色土に明黄褐色土ブロックが少量含まれる。炭化物が含まれる。しまりが良く、粘性がある。

2　暗褐色土に明黄褐色土ブロックが少量含まれる。しまりが良く、粘性がある。

3　黒褐色土に明黄褐色土ブロックが混じる。しまりに欠け、ボソボソしている。

4　明黄褐色土。

5　黒褐色土に明黄褐色土ブロックが多く混じっている。

6　褐色土。しまりが良く、粘着性がある。

SK 8

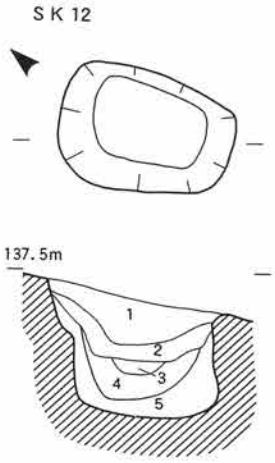
1　暗褐色土に明黄褐色土が少量混じる。しまりが悪く、柔らかい。

2　黒褐色土に明黄褐色土ブロックが少量含まれる。炭化物が含まれる。しまりが良く、粘性がある。

3　黒褐色土に明褐色土が混じる。しまりが悪くボソボソしている。

4　黒褐色土に明褐色土が少量混じる。しまりが悪くボソボソいている。

5　褐色土。しまりが良く、粘性がある。



SK 12

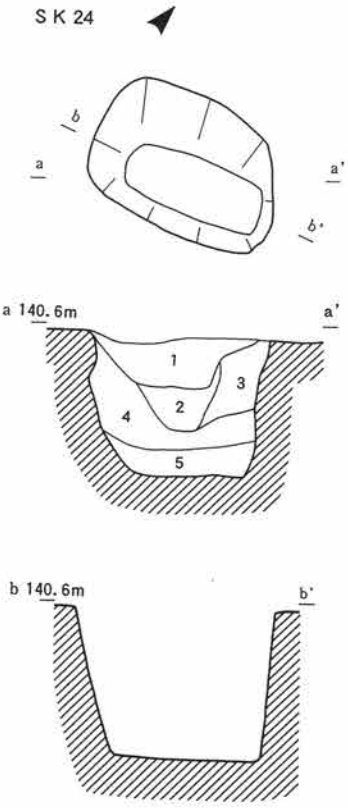
1　褐色土に小角礫が少量含まれる。しまりが良く、固い。

2　褐色土。1層に比べて柔らかく、粘性が強い。

3　明黄褐色土に褐色土が混じる。柔らかく、粘性がある。

4　褐色土に小礫が含まれる。柔らかく、粘性が強い。

5　掘りすぎ。



SK 24

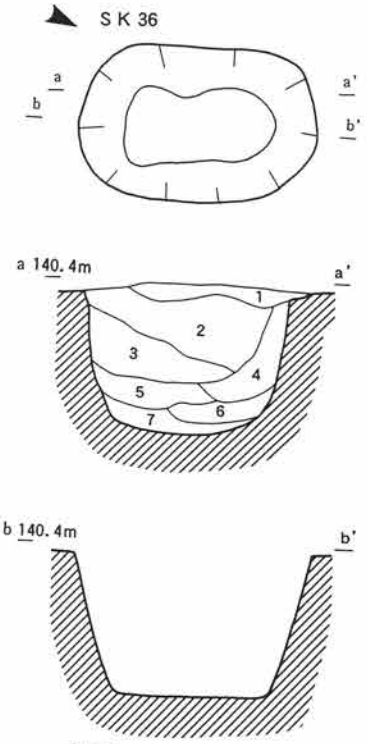
1　黒褐色土。しまりが良く、粘性がある。

2　黒褐色土に明黄褐色土ブロックが少量含まれる。1層に比べ、しまりに欠ける。

3　黒褐色土に大きな明黄褐色土ブロックが混じる。しまりが良く、固い。

4　黒褐色土と明黄褐色土が混じる。

5　暗黒褐色土。しまりに欠け、ボソボソしている。



SK 36

1　黒褐色土。しまりが良く、固い。

2　暗黒褐色土。木の根などが入り込んでおり、しまりに欠ける。

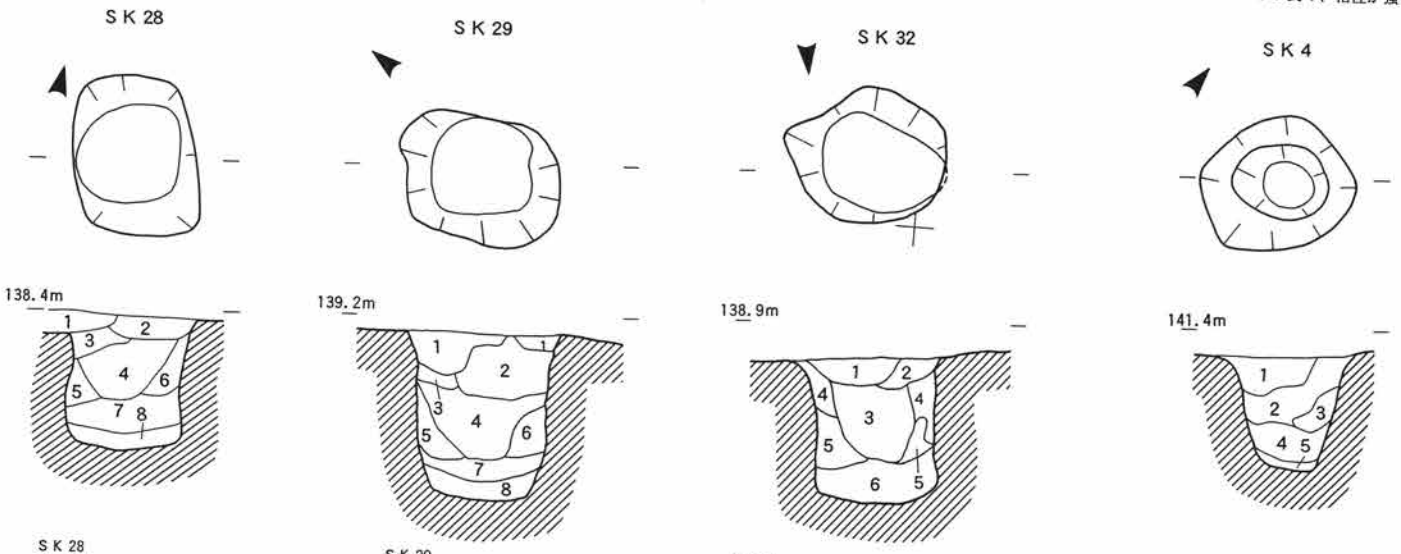
3　褐色土に黒褐色土・黄褐色土ブロックが混じる。しまりが良く、固い。

4　黒褐色土に黄褐色土ブロックが少量含まれる。しまりに欠け、ボソボソしている。

5　褐色土に黒褐色土ブロック・大きめの黄褐色土ブロック状が混じる。しまりが良く、固い。

6　黒褐色土。しまりが良く、粘性が強い。

7　暗褐色土。しまりが良く、粘性が強い。



SK 28

1　攪乱

2　褐色土に黄褐色土が少量混じる。炭化物が混じる。しまりが良く、固い。

3　褐色土に黄褐色土の細粒が混じる。しまりが良く、固い。

4　暗褐色土に黄褐色土の細粒が多く混じる。炭化物が混じる。しまりが良く、固い。

5　明黄褐色土。柔らかく、しまりに欠ける。

6　明黄褐色土に黄褐色土がごく少量混じる。炭化物がごく少量含まれる。

7　暗黄褐色土にやや大きめの黄褐色土ブロック含まれる。炭化物がごく少量含まれる。炭化物が少量含まれる。やや柔らかく、粘性が強い。

8　黒褐色土。やや柔らかく、粘性がある。

SK 29

1　攪乱

2　褐色土に黄褐色土ブロックが少量混じる。ほかの遺構の覆土に比べ、色調が明るい。しまりは良く、非常に固い。

3　褐色土。柔らかく、しまりに欠ける。

4　暗褐色土に固い黄褐色土の小粒が多く混じる。やや柔らかく、ボソボソした感じがする。

5　褐色土に固い黄褐色土ブロックが多く混じる。4層より明るい色調を呈する。しまりが良く、固い。

6　褐色土。柔らかく、しまりに欠ける。

7　暗褐色土に固い黄褐色土ブロックが多く混じる。炭化物が少量含まれる。しまりが良く、固い。

8　褐色土。炭化物が少量含まれる。しまりが良く、粘性がある。

SK 32

1　褐色土に固い黄褐色土ブロックがごく少量含まれる。炭化物が少量含まれる。柔らかく、ボソボソしている。

2　褐色土に固い黄褐色土ブロックがごく少量含まれる。炭化物が少量含まれる。しまりがあり、固い。

3　暗褐色土に固い黄褐色土ブロックがごく少量混じる。炭化物が少量含まれている。しまりが良く、固い。

4　明黄褐色土に褐色土が混じる。やや柔らかく、しまりに欠ける。

5　褐色土に黄褐色土ブロックがごく少量含まれる。炭化物がごく少量含まれる。やや柔らかく、しまりに欠ける。

6　暗褐色土に黄褐色土ブロックが少量含まれる。しまりが良く、粘性が強い。

SK 4

1　黄褐色土。しまりに欠け、ボソボソしている。

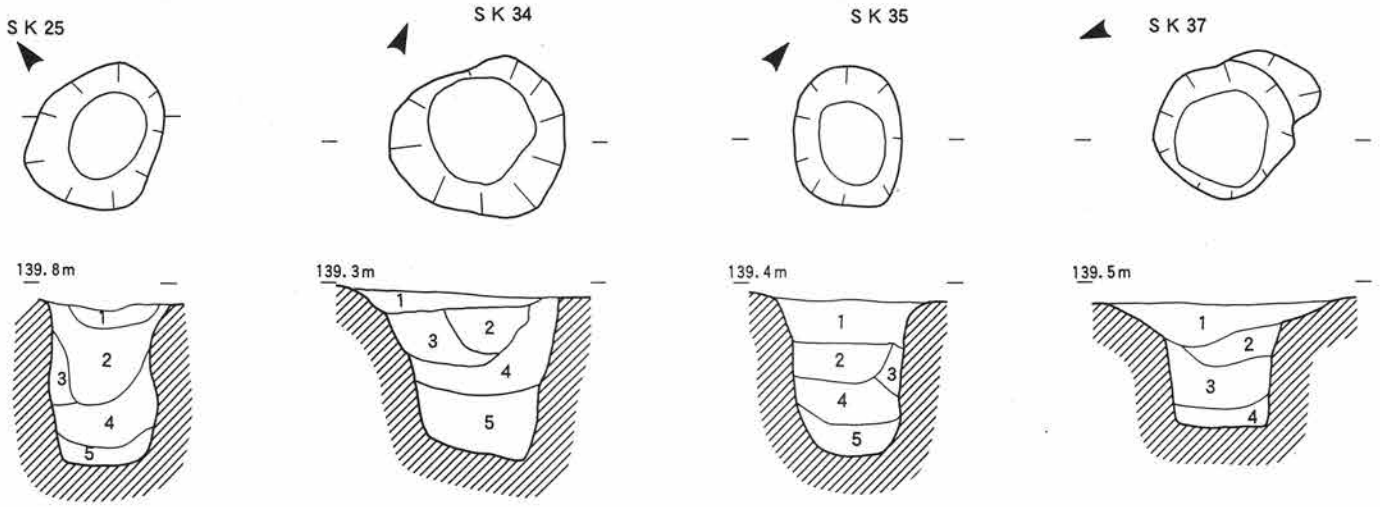
2　暗褐色土に黄褐色土が少量含まれる。炭化物が少量含まれる。しまりが良く、固い。

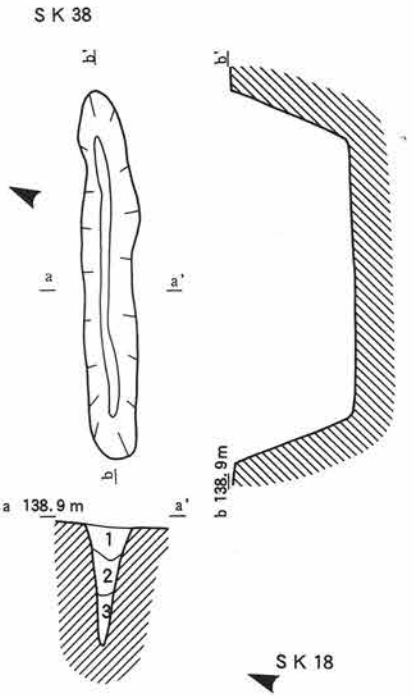
3　暗褐色土に黄褐色土ブロックが混じる。しまりが良い。

4　暗褐色土。しまりが良く、粘性がある。

5　褐色土。しまりが良く、粘性が強い。

0　2m





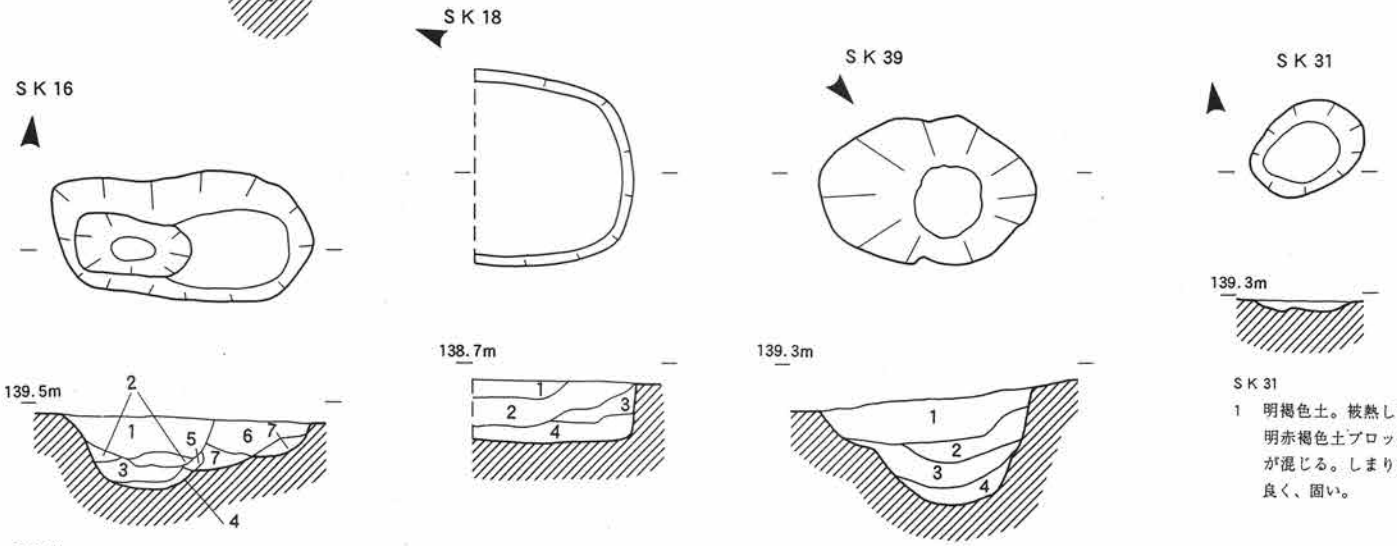
SK 25
1　褐色土に明黄褐色土ブロックが少量混じる。しまりが良く、固い。
2　暗褐色土に明黄褐色土ブロックが少量混じる。しまりが良く、固い。
3　褐色土に明黄褐色土が混じる。しまりに欠け、粘性が強い。
4　暗褐色土に明黄褐色土ブロックが少量混じる。しまりに欠け、粘性が強い。
5　褐色土。しまりが良く、粘性がある。

SK 34
1　攪乱
2　褐色土に固い黄褐色土ブロックが混じる。しまりが良く、固い。
3　褐色土。炭化物が少量含まれる。しまりが良く、固い。
4　暗褐色土に固い黄褐色土ブロックが含まれる。2・3層に比べ、ややしまりに欠ける。
5　暗褐色土に固い黄褐色土ブロックが含まれる。しまるが良く、粘性が強い。

SK 35
1　攪乱
2　暗褐色土に固い黄褐色土ブロックが含まれる。しまりがなく、ボソボソしている。
3　暗褐色土。しまりがなく、ボソボソしている。
4　黒褐色土に固い黄褐色土ブロックが混じる。しまりがなくボソボソしている。
5　暗褐色土。しまりが良く、粘性が強い。

SK 37
1　暗褐色土。しまりが良く、固い。
2　褐色土。1層に比べて柔らかく、しまりがない。粘性がない。
3　褐色土に固い黄褐色土ブロックが多く含まれる。しまりが良く、粘性が強い。
4　暗褐色土。しまりが良く、粘性が強い。

SK 38
1　黒褐色土。炭化物が少量含まれる。しまりが良く、固い。
2　暗褐色土に黄褐色土が少量混じる。炭化物が含まれる。しまりは良い。
3　暗褐色土。しまりが良く、粘性が強い。



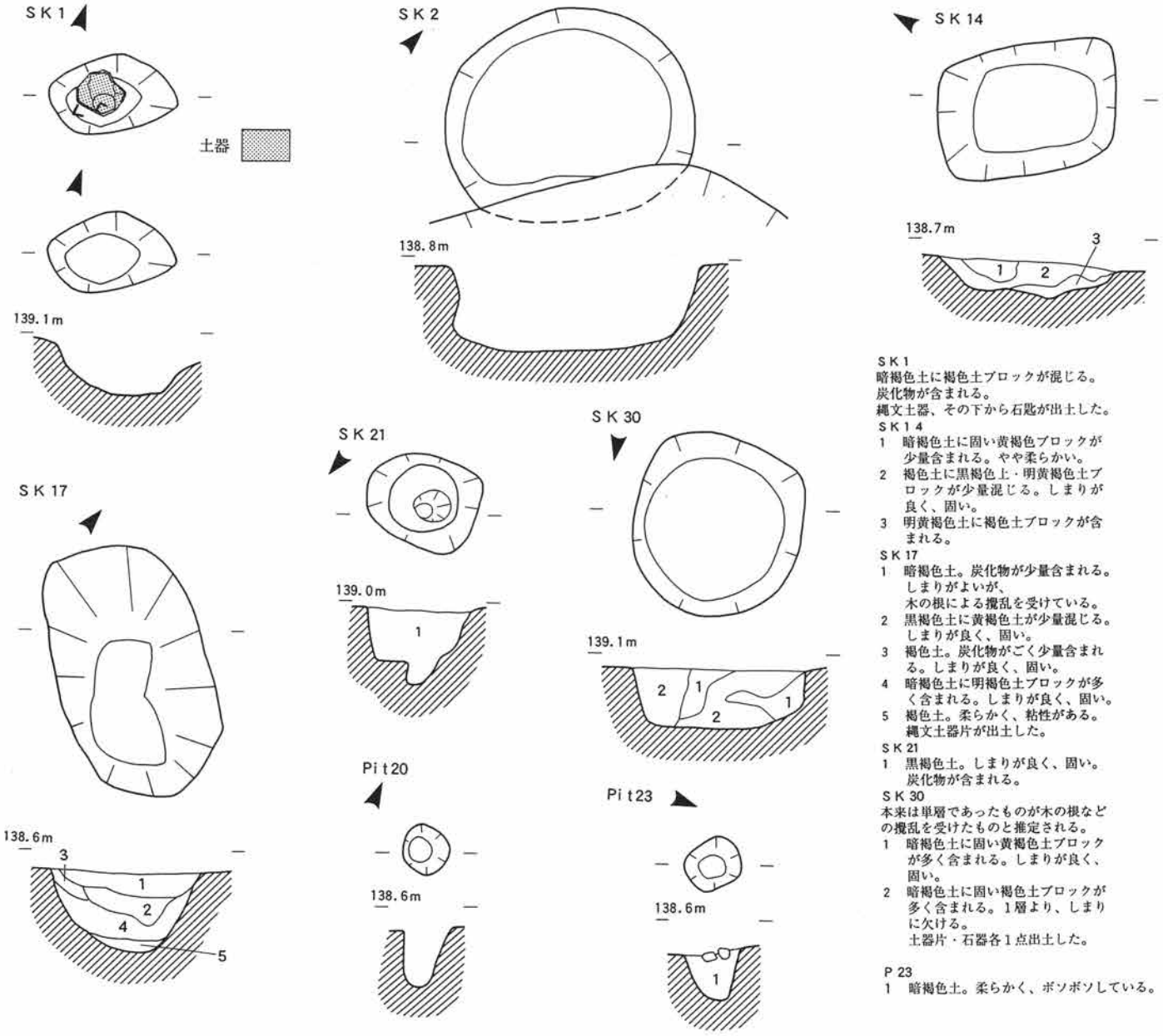
SK 16
1　暗褐色土。炭化物の小粒がごく少量含まれる。しまりが良く、固い。
2　褐色土。炭化物の小粒がごく少量含まれる。しまりが良く、固い。
3　暗褐色土に被熱した黄褐色土ブロックが少量含まれる。炭化物が最も多く含まれる層である。1・2層より柔らかい。
4　赤褐色土。被熱した黄褐色土が赤化したものである。しまりが良く、固い。
5　黄褐色土に被熱した土の小粒が混じる。
6　暗褐色土に黄褐色土が少量混じる。
7　暗褐色土に被熱した土が少量混じる。炭化物が少量含まれる。

SK 18
1　黒褐色土に明褐色土ブロックが少量含まれる。しまりが良く、固い。
2　黒色土。炭化物が含まれる。1層より柔らかく、サラサラしている。
3　暗褐色土に黄褐色土ブロックが混じる。しまりが良く、固い。
4　黒色土。炭化物が多量に含まれる。しまりが良く、粘性が強い。

SK 39
1　暗褐色土に黄褐色土・黒褐色土ブロックが混じる。しまりが良く、固い。
2　褐色土に黄褐色土が混じる。しまりが良く、固い。
3　褐色土。しまりが良く、固い。
4　被熱した明赤褐色土。炭化物が含まれる。しまりが良く、固い。

SK 31
1　明褐色土。被熱した明赤褐色土ブロックが混じる。しまりが良く、固い。

0　2m



SK 1
暗褐色土に褐色土ブロックが混じる。
炭化物が含まれる。
縄文土器、その下から石匙が出土した。

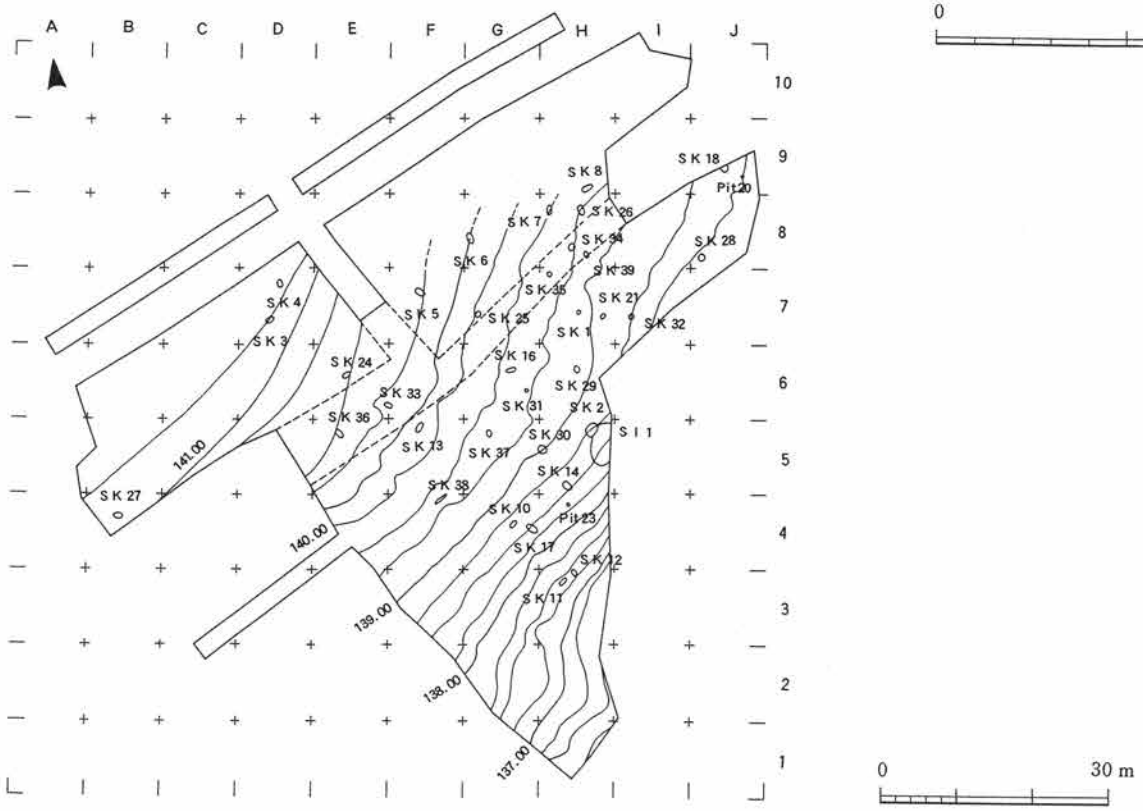
SK 14
1　暗褐色土に固い黄褐色ブロックが少量含まれる。やや柔らかい。
2　褐色土に黒褐色土・明黄褐色土ブロックが少量混じる。しまりが良く、固い。
3　明黄褐色土に褐色土ブロックが含まれる。

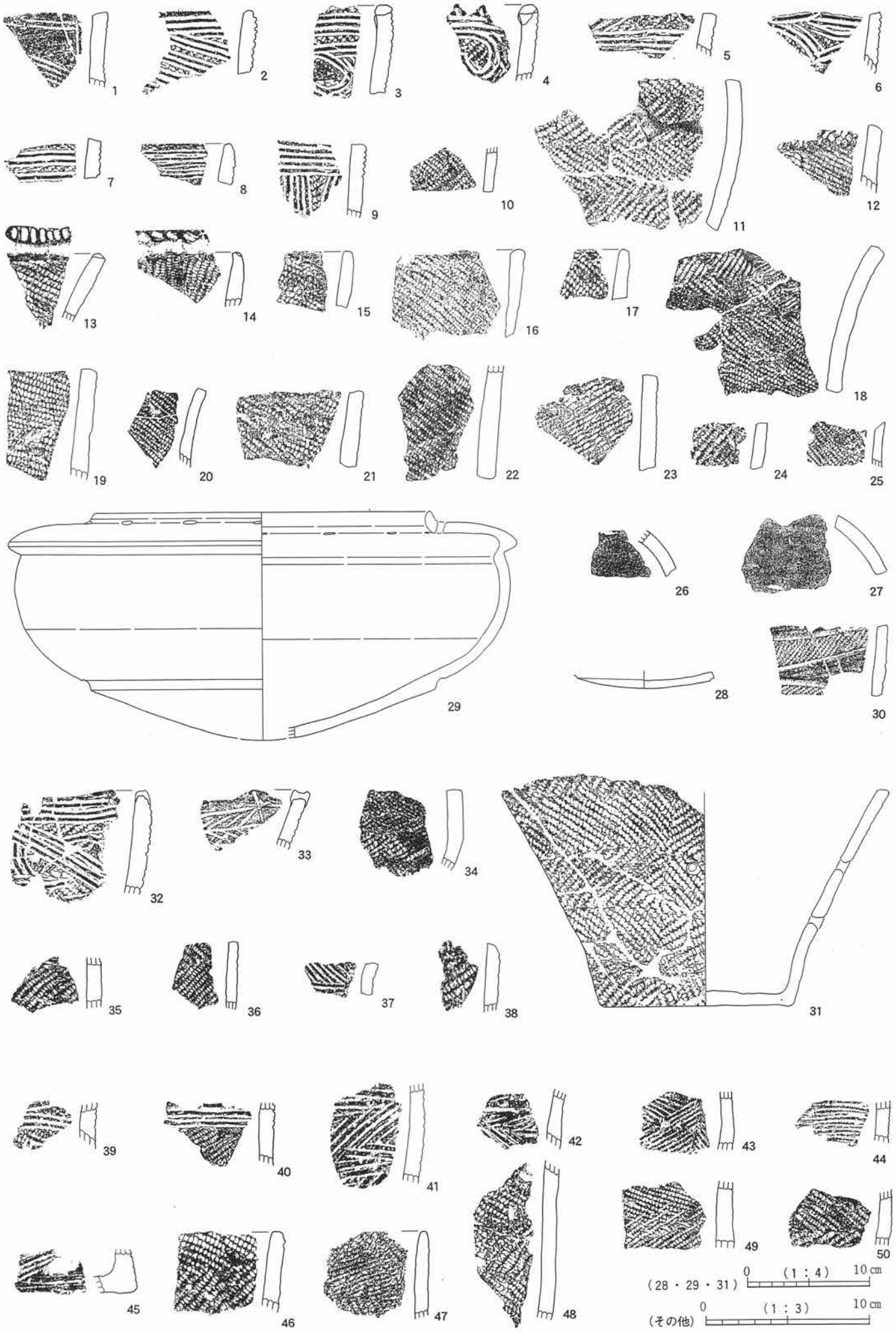
SK 17
1　暗褐色土。炭化物が少量含まれる。しまりがよいが、木の根による攪乱を受けている。
2　黒褐色土に黄褐色土が少量混じる。しまりが良く、固い。
3　褐色土。炭化物がごく少量含まれる。しまりが良く、固い。
4　暗褐色土に明褐色土ブロックが多く含まれる。しまりが良く、固い。
5　褐色土。柔らかく、粘性がある。縄文土器片が出土した。

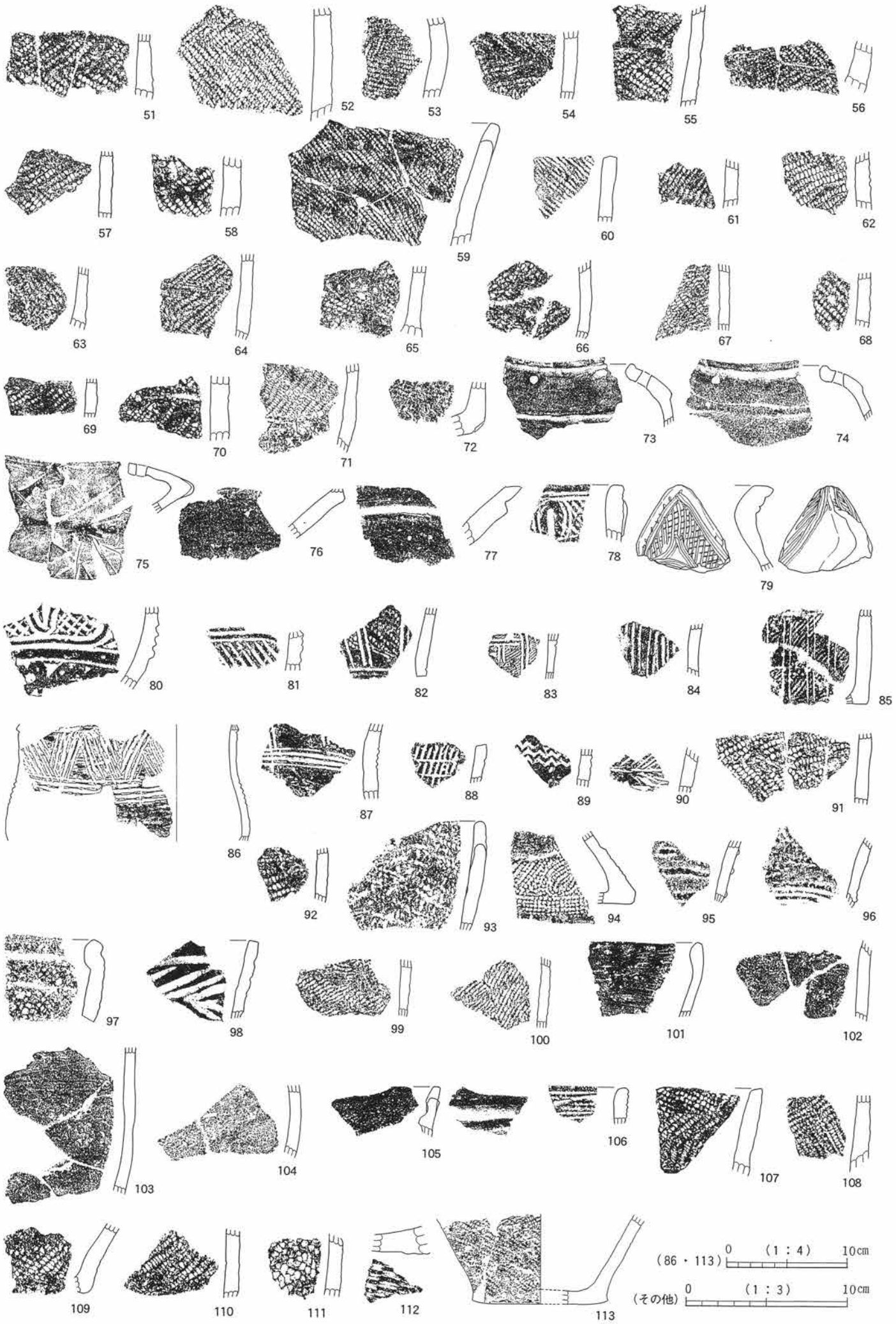
SK 21
1　黒褐色土。しまりが良く、固い。炭化物が含まれる。

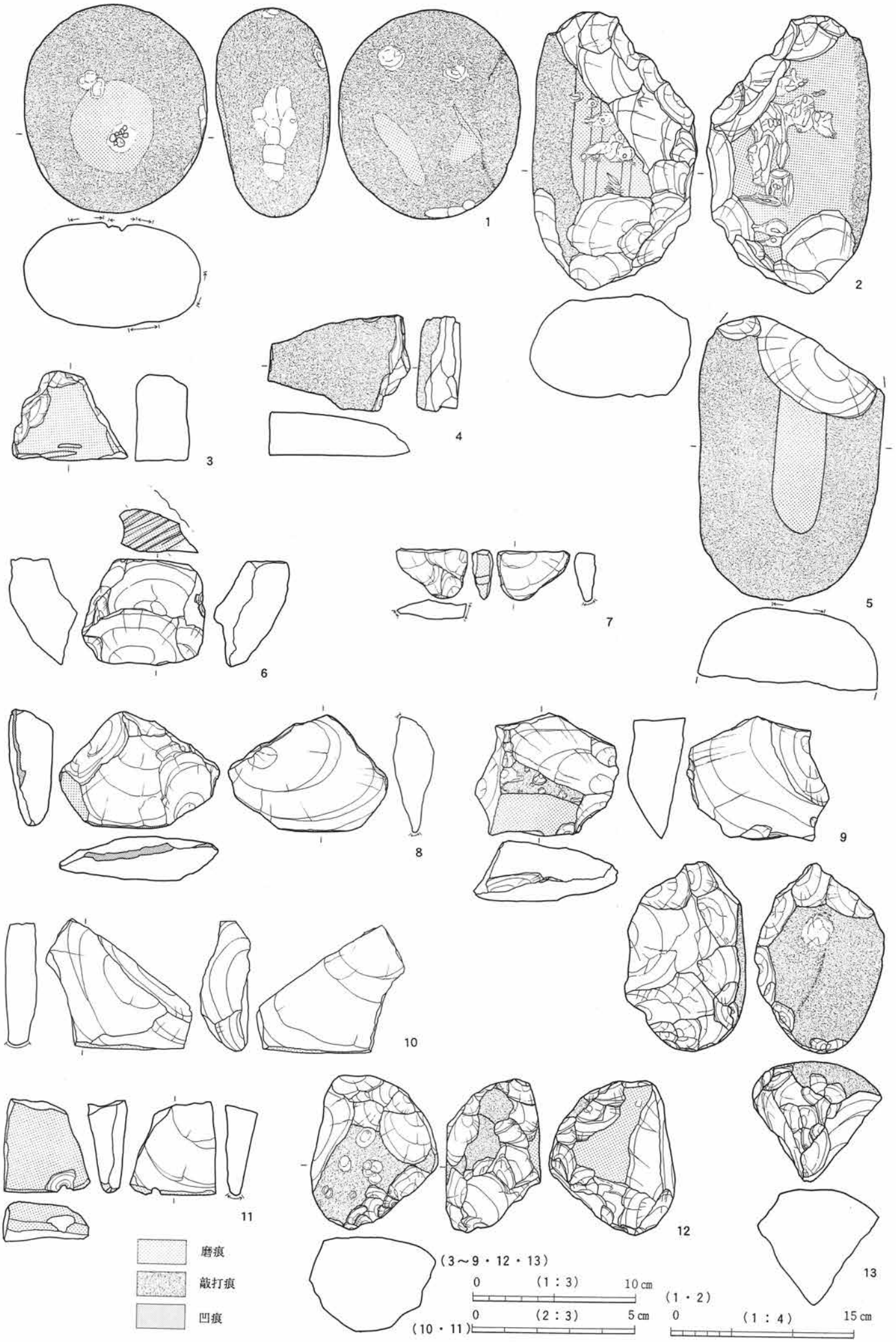
SK 30
本来は単層であったものが木の根などの攪乱を受けたものと推定される。
1　暗褐色土に固い黄褐色土ブロックが多く含まれる。しまりが良く、固い。
2　暗褐色土に固い褐色土ブロックが多く含まれる。1層より、しまりに欠ける。
土器片・石器各1点出土した。

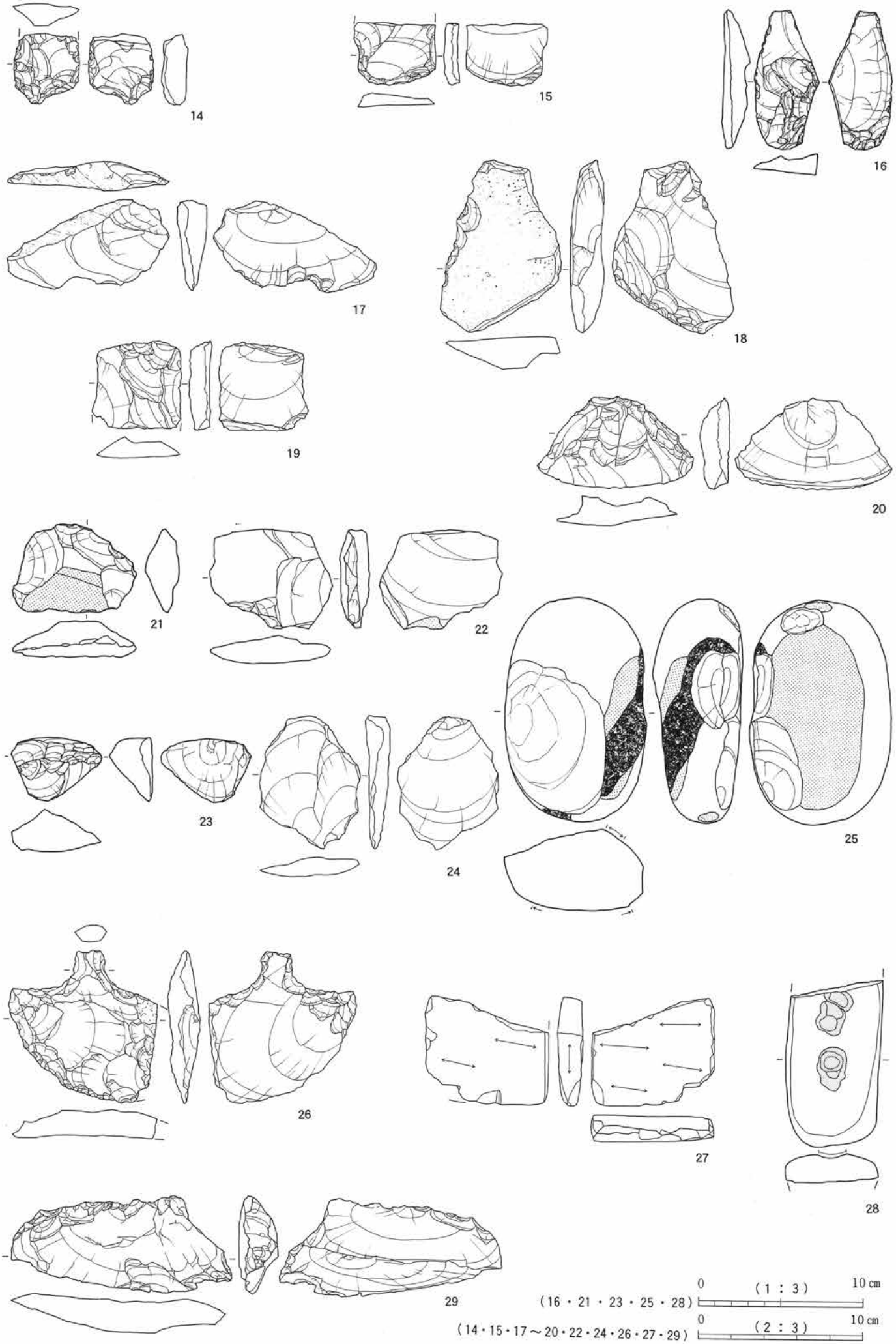
P 23
1　暗褐色土。柔らかく、ボソボソしている。

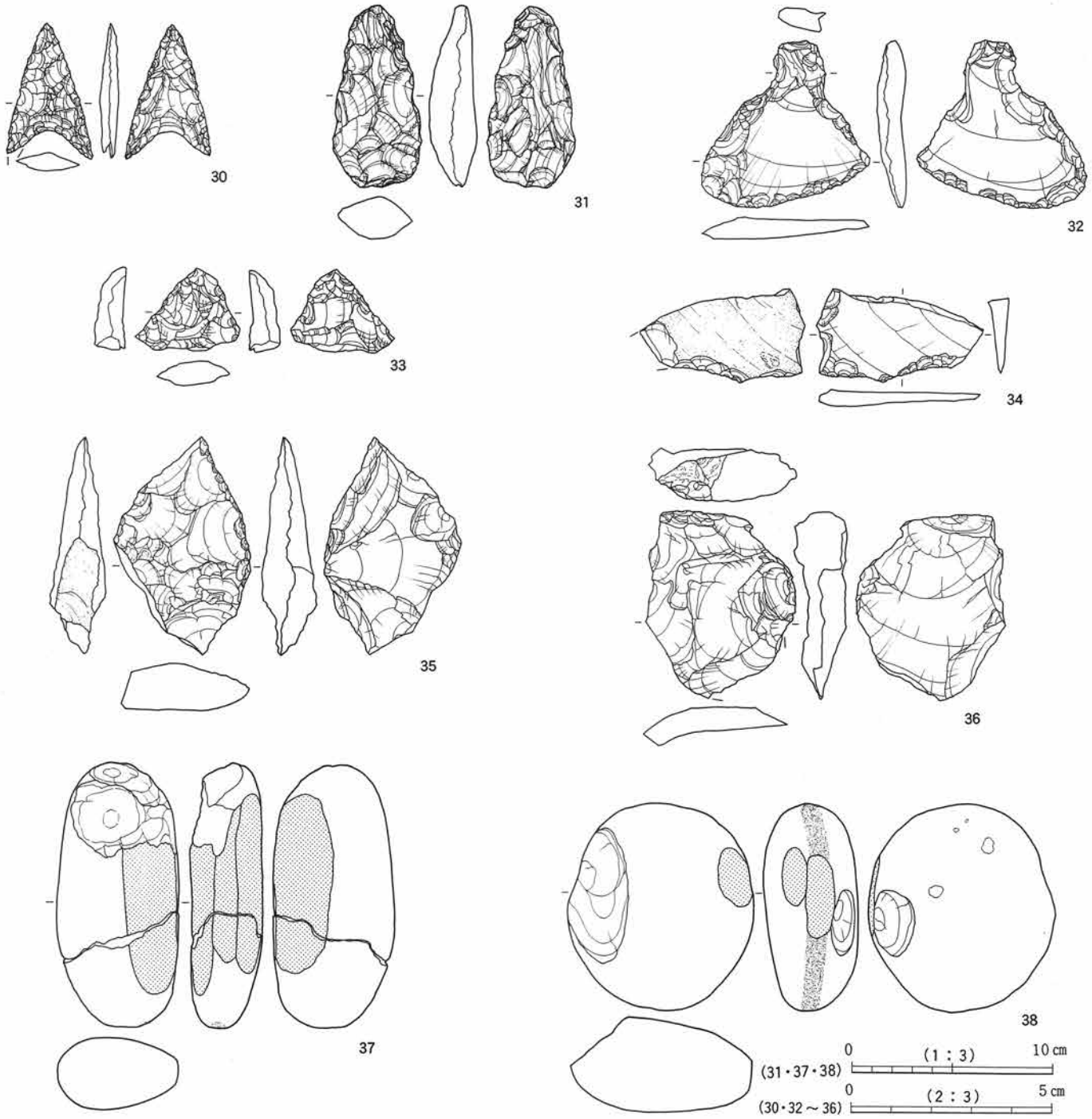


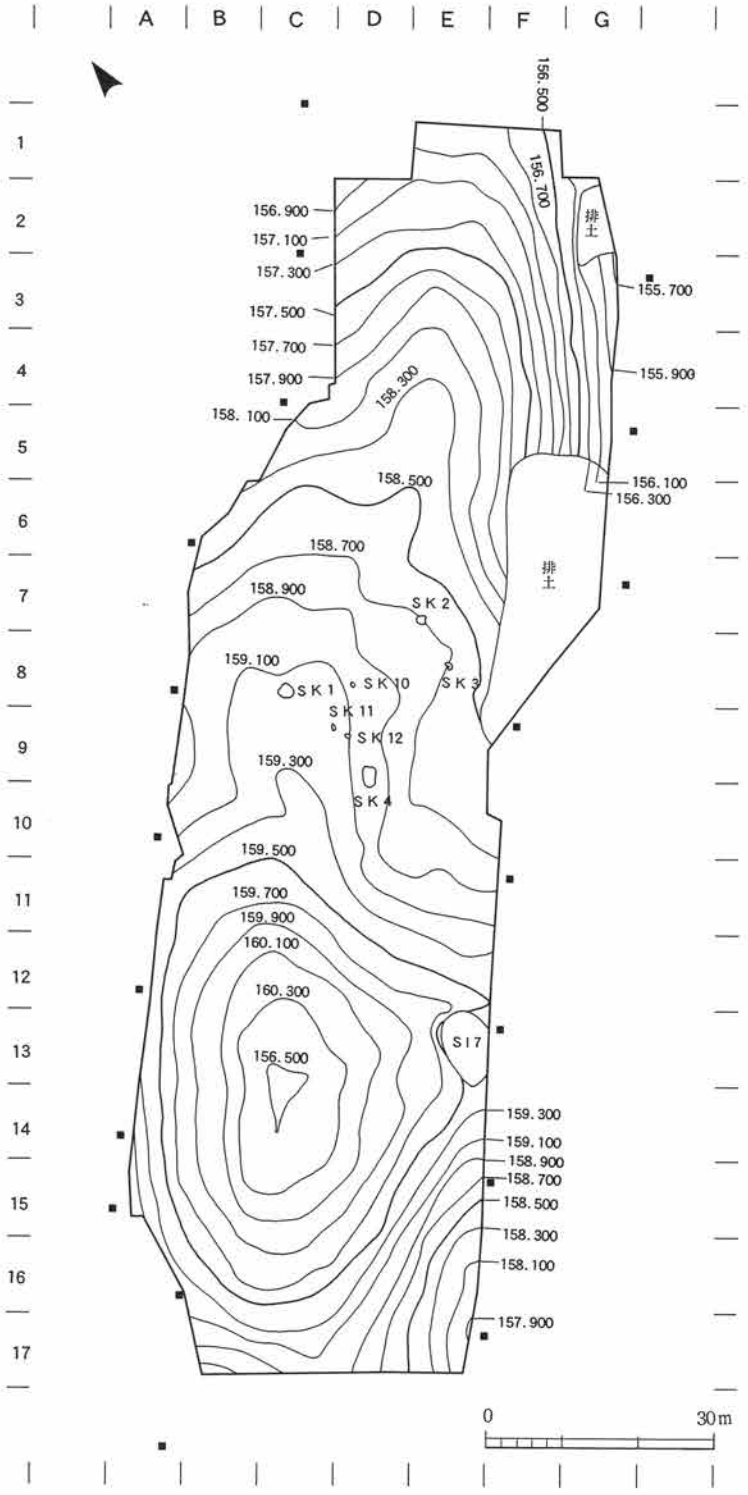

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
(28・29・31)
0
(1：4)
10cm
(その他)
0
(1：3)
10cm

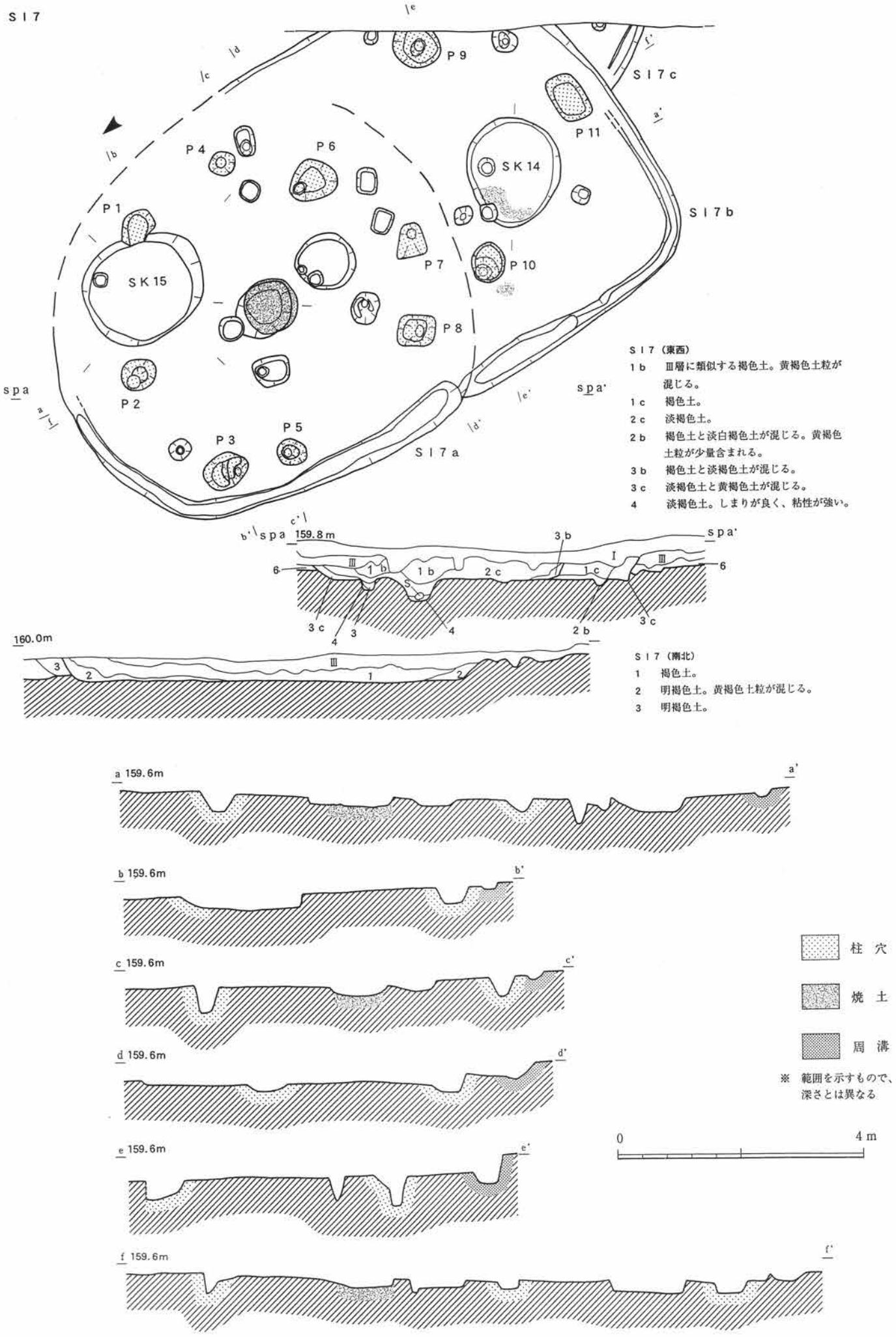

51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
(86・113) 0 (1：4) 10cm
(その他) 0 (1：3) 10cm


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
磨痕
敲打痕
凹痕
(3～9・12・13)
0 (1：3) 10cm
(1・2)
0 (2：3) 5cm
(10・11)
0 (1：4) 15cm

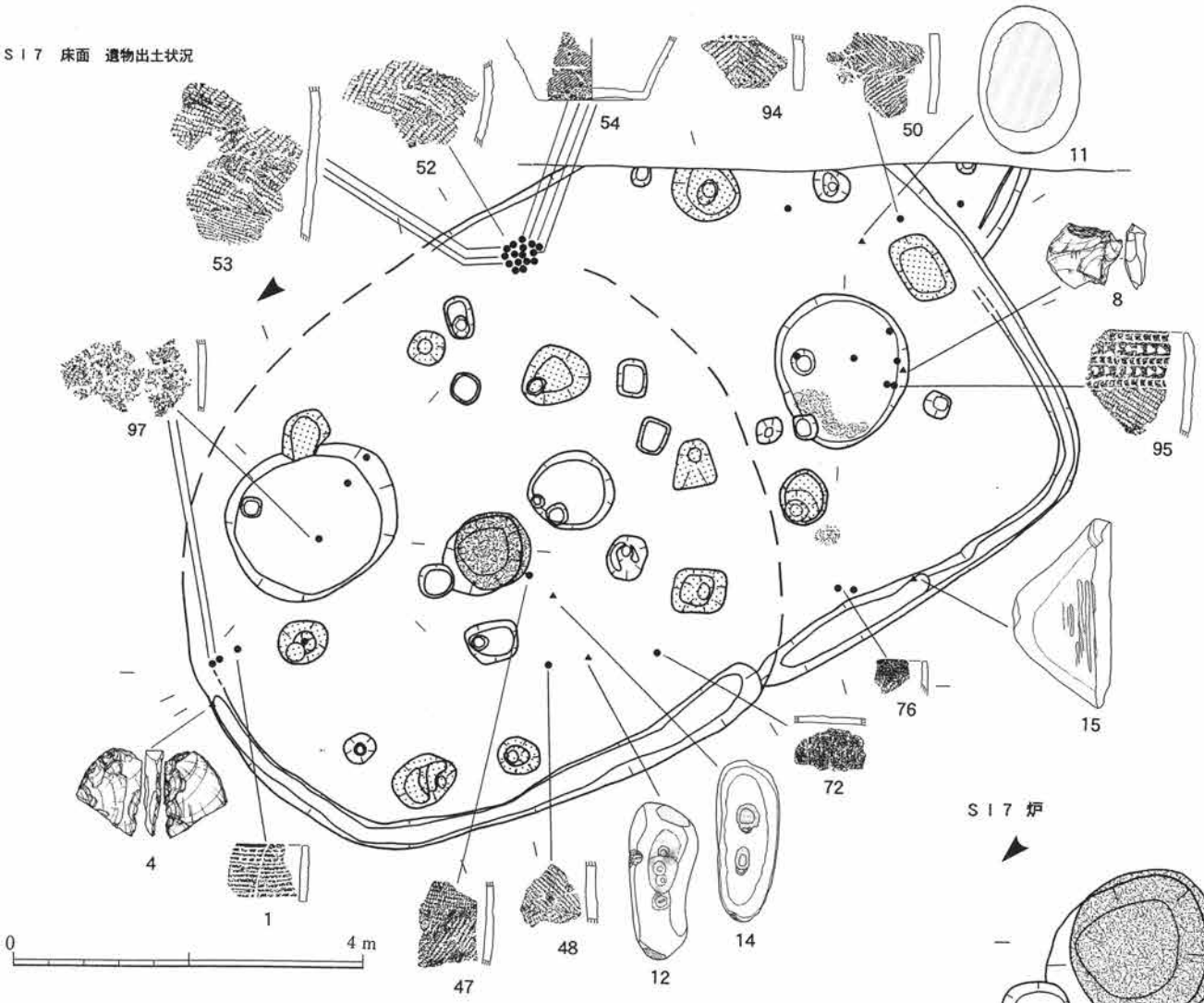

14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
(1 : 3)
10 cm
(16・21・23・25・28)
0
(2 : 3)
10 cm
(14・15・17～20・22・24・26・27・29)


30
31
32
33
34
35
36
37
38
0
(1 : 3)
10 cm
(31・37・38)
0
(2 : 3)
5 cm
(30・32～36)

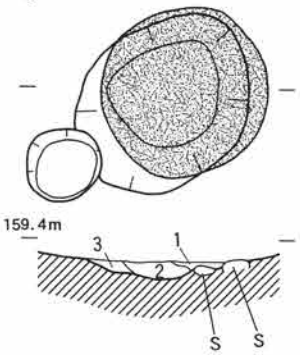

A
B
C
D
E
F
G
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
156.500
156.700
排土
156.900
157.100
157.300
155.700
157.500
157.700
155.900
157.900
158.300
158.100
158.500
156.100
156.300
158.700
排土
158.900
SK2
159.100
SK1
SK10
SK3
SK11
SK12
159.300
SK4
159.500
159.700
159.900
160.100
160.300
SI7
156.500
159.300
159.100
158.900
158.700
158.500
158.300
158.100
157.900
0
30m


S I 7
P 1
P 2
P 3
P 4
P 5
P 6
P 7
P 8
P 9
P 10
P 11
SK 14
SK 15
S I 7a
S I 7b
S I 7c
spa
spa'
159.8m
160.0m
S I 7（東西）
1 b　Ⅲ層に類似する褐色土。黄褐色土粒が混じる。
1 c　褐色土。
2 c　淡褐色土。
2 b　褐色土と淡白褐色土が混じる。黄褐色土粒が少量含まれる。
3 b　褐色土と淡褐色土が混じる。
3 c　淡褐色土と黄褐色土が混じる。
4　淡褐色土。しまりが良く、粘性が強い。
S I 7（南北）
1　褐色土。
2　明褐色土。黄褐色土粒が混じる。
3　明褐色土。
a 159.6m
b 159.6m
c 159.6m
d 159.6m
e 159.6m
f 159.6m
柱穴
焼土
周溝
※ 範囲を示すもので、深さとは異なる
0
4 m

ＳＩ７　床面　遺物出土状況

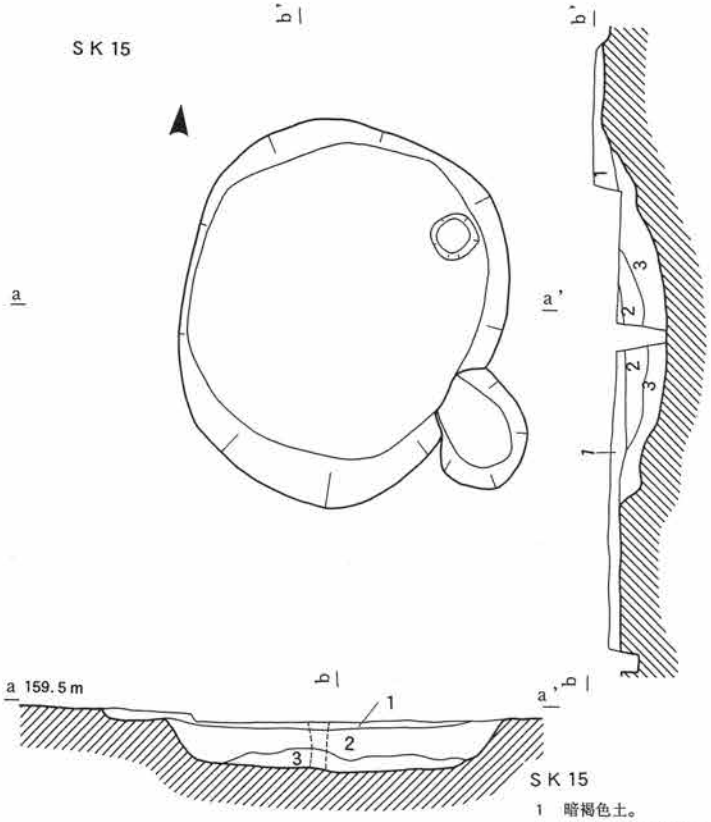


ＳＩ７　炉



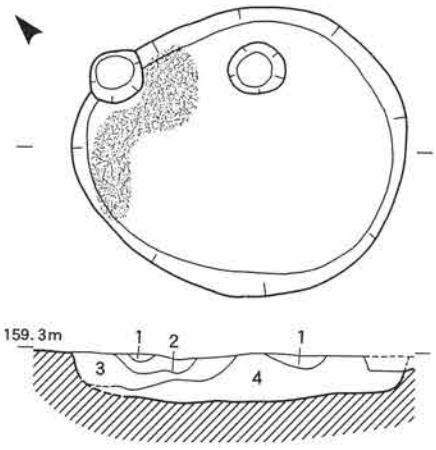
ＳＩ７　炉
1　黒色土に褐色土が混じる。
2　暗赤褐色土。焼土である。
3　黄褐色土に黒色土が混じる。

ＳＫ 15



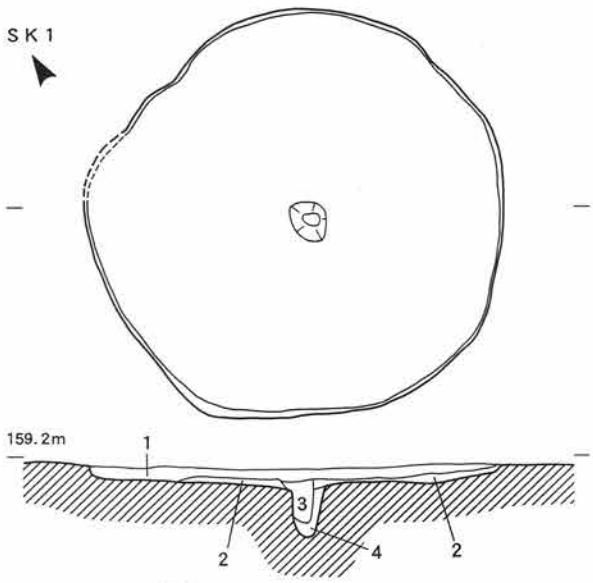
ＳＫ 15
1　暗褐色土。
2　淡褐色土に黄褐色土ブロックが多く混じる。小礫を含む。
3　黒褐色土。

ＳＫ 14

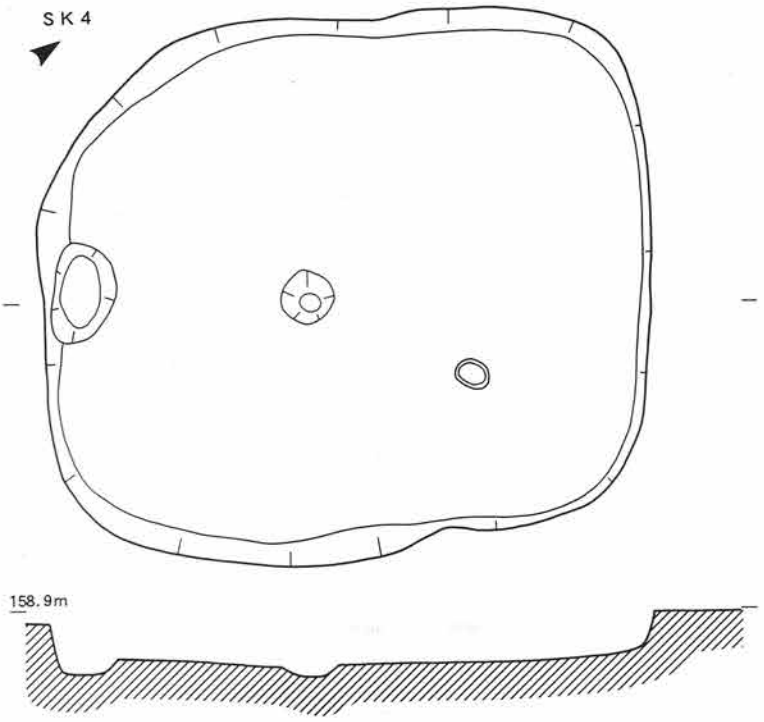


ＳＫ 14
1　暗褐色土。
2　黄褐色土。
3　暗褐色土。黄褐色土ブロックが少量混じる。
4　淡褐色土。

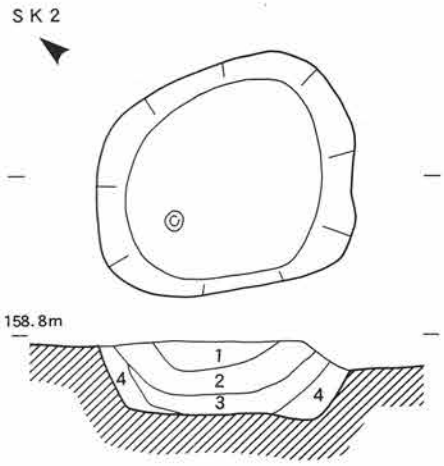
0　2m



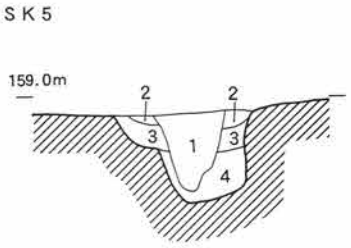
ＳＫ１
1　暗茶褐色土。焼土と炭化物粒が混じる。
2　黒褐色土。黄褐色土が混じる。
3　暗黄褐色土。
4　暗黄褐色土。３層より黄色味が強い。



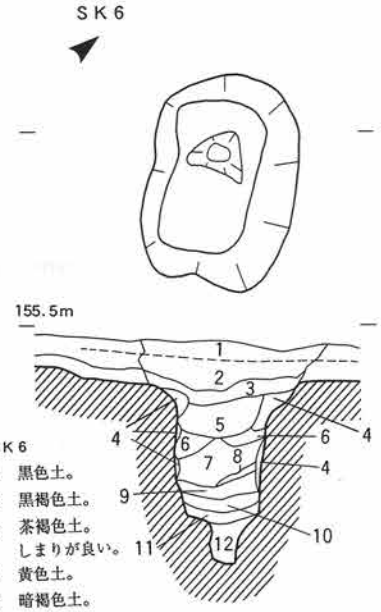
ＳＫ４
上部　黒褐色土。炭化物粒子が多く混じる。
中部　褐色土。黄褐色土粒が混じる。
下部　暗褐色土。しまり、粘性とともに強い。



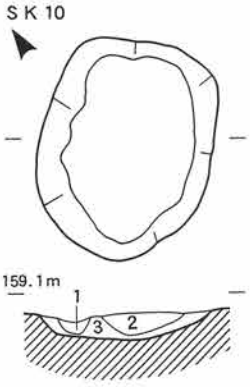
1　黒色土。
2　褐色土。黄褐色土粒が混じる。
3　暗茶褐色土。黄褐色土粒が混じる。
4　黄褐色土。



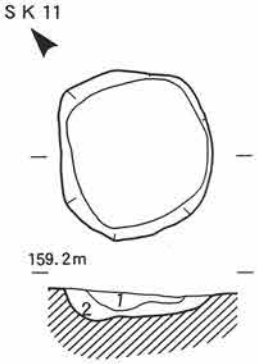
ＳＫ５
1　黒褐色土に黄褐色土粒がごく少量混じる。炭化物粒が多く含まれる。しまりは弱く、粘性がやや強い。
2　１層に類似するが、黄褐色土粒の混入がなく、色調がやや明るい。
3　褐色土に黄褐色土が多く混じる。しまり・粘性とも弱い。
4　暗褐色土。２層に類似するが、粘性が強い。



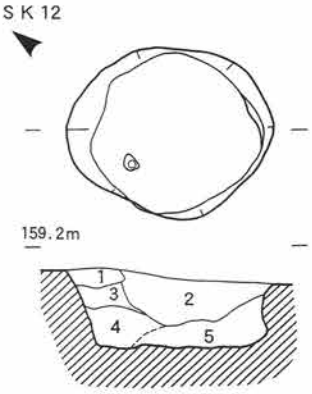
ＳＫ６
1　黒色土。
2　黒褐色土。
3　茶褐色土。しまりが良い。
4　黄色土。
5　暗褐色土。
6　黄褐色土。
7　黒褐色土。　9　黒褐色土　11　黒褐色土。
8　黄色土。　10　茶褐色土。12　暗黄褐色土。



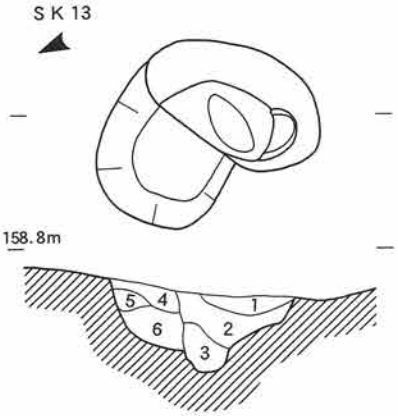
ＳＫ１０
1　黒褐色土。撹乱層。
2　暗茶褐色土。
3　褐色土。



ＳＫ１１
1　暗茶褐色土。黄褐色土粒がわずかに混じる。
2　褐色土。

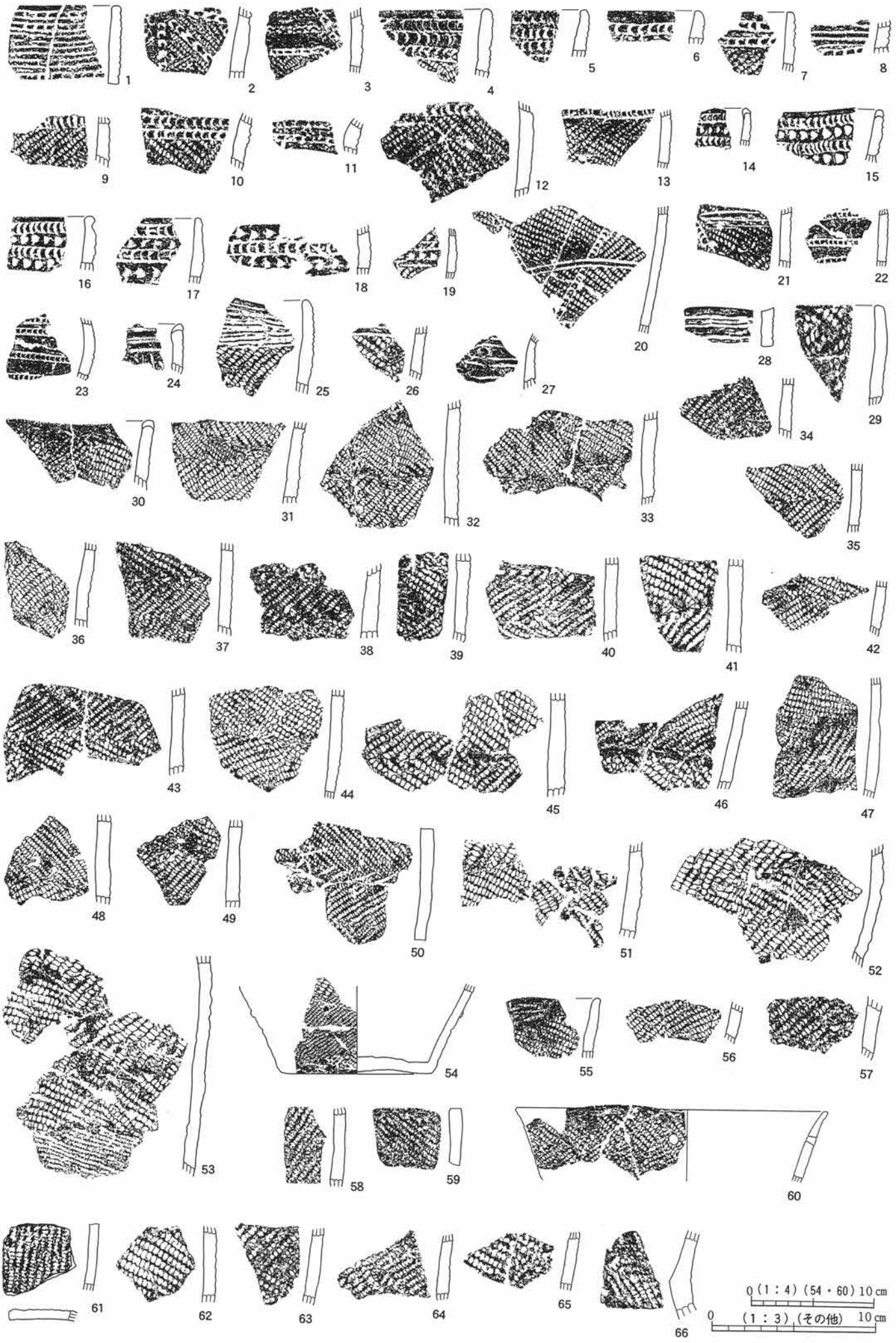


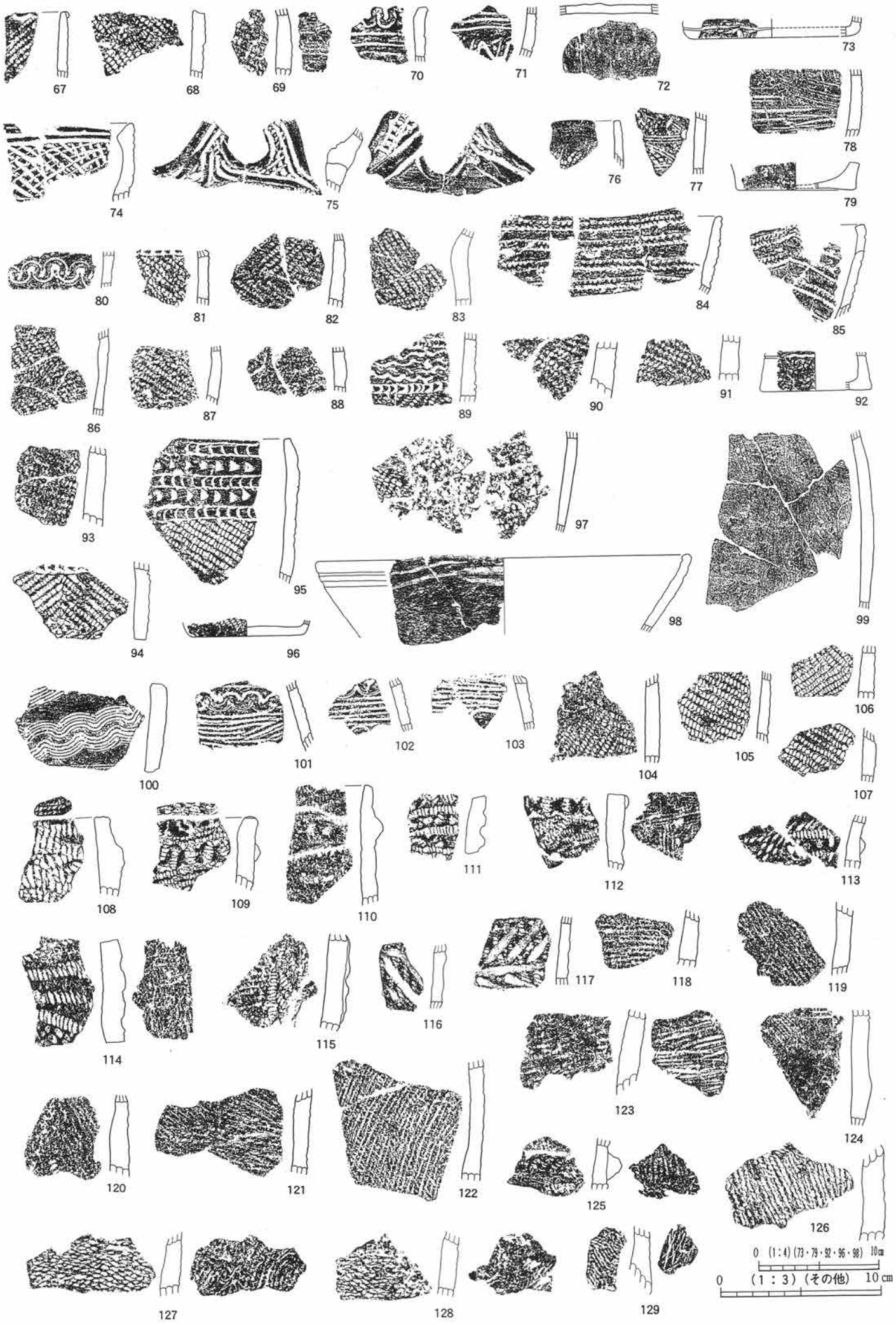
ＳＫ１２
1　黒褐色土。撹乱層。
2　暗茶褐色土。黄褐色土粒が混じる。
3　褐色土。黄褐色土粒が混じる。
4　暗褐色土。
5　黄褐色土。

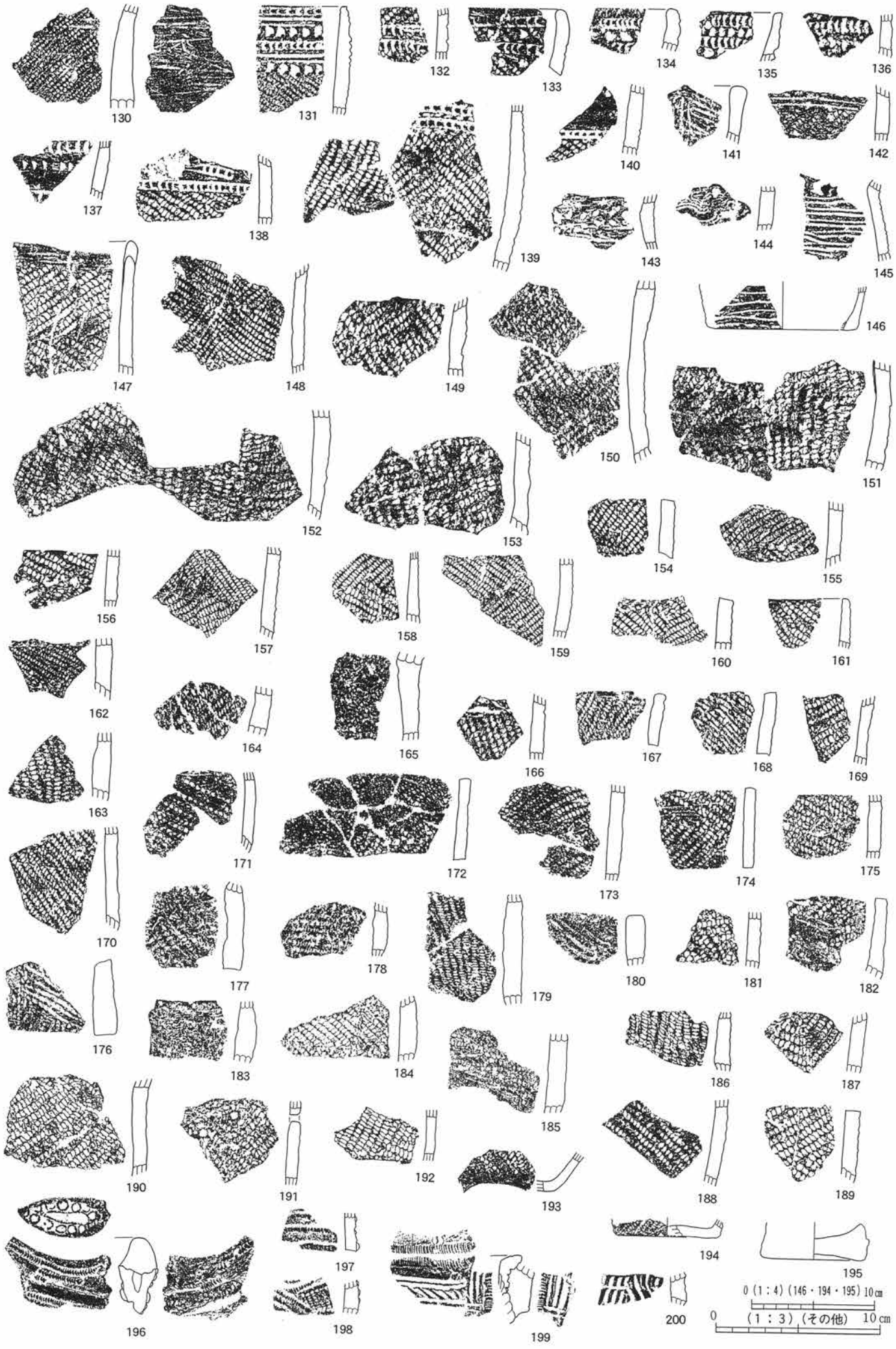


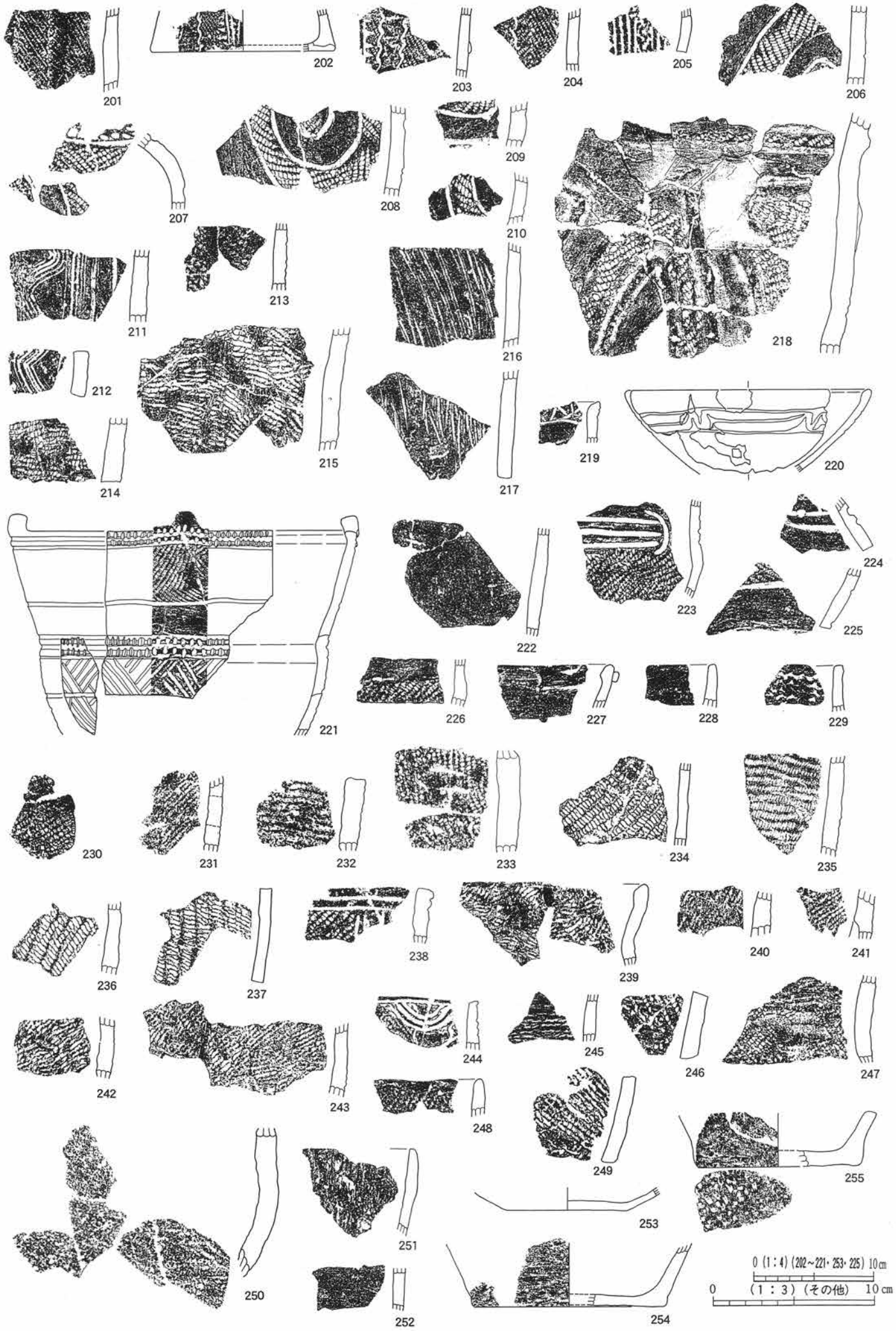
ＳＫ１３
1　黄褐色土。炭化物粒が少量含まれる。
2　褐色土。黄褐色土ブロックが混じる。炭化物粒が少量含まれる。
3　黒褐色土。炭化物粒が少量含まれる。
4　暗茶褐色土。炭化物粒が少量含まれる。
5　黄色土。炭化物粒が少量含まれる。
6　黒暗褐色土。炭化物粒が少量含まれる。

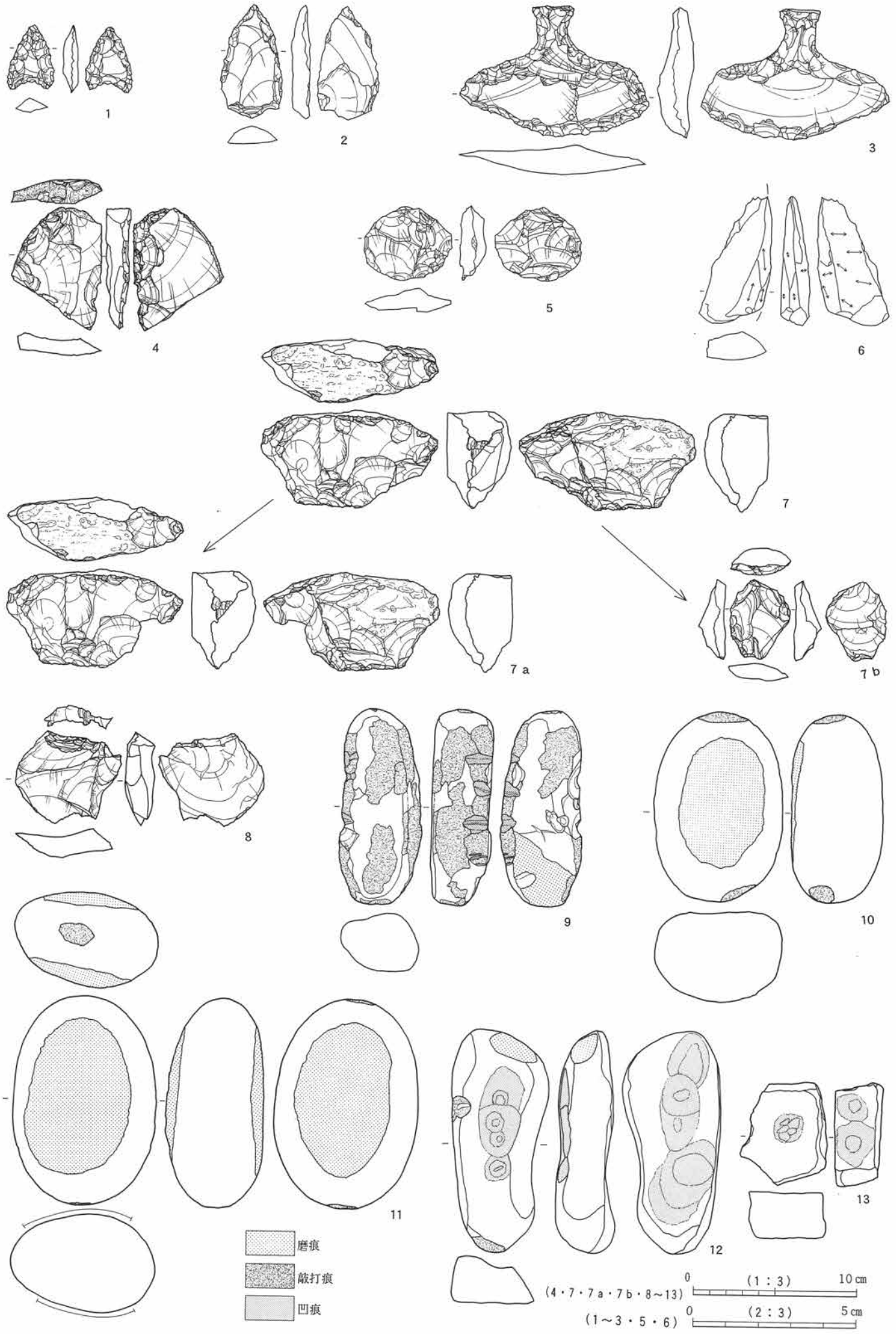
0　　2m


0（1：4）（54・60）10cm
0（1：3）（その他）10cm

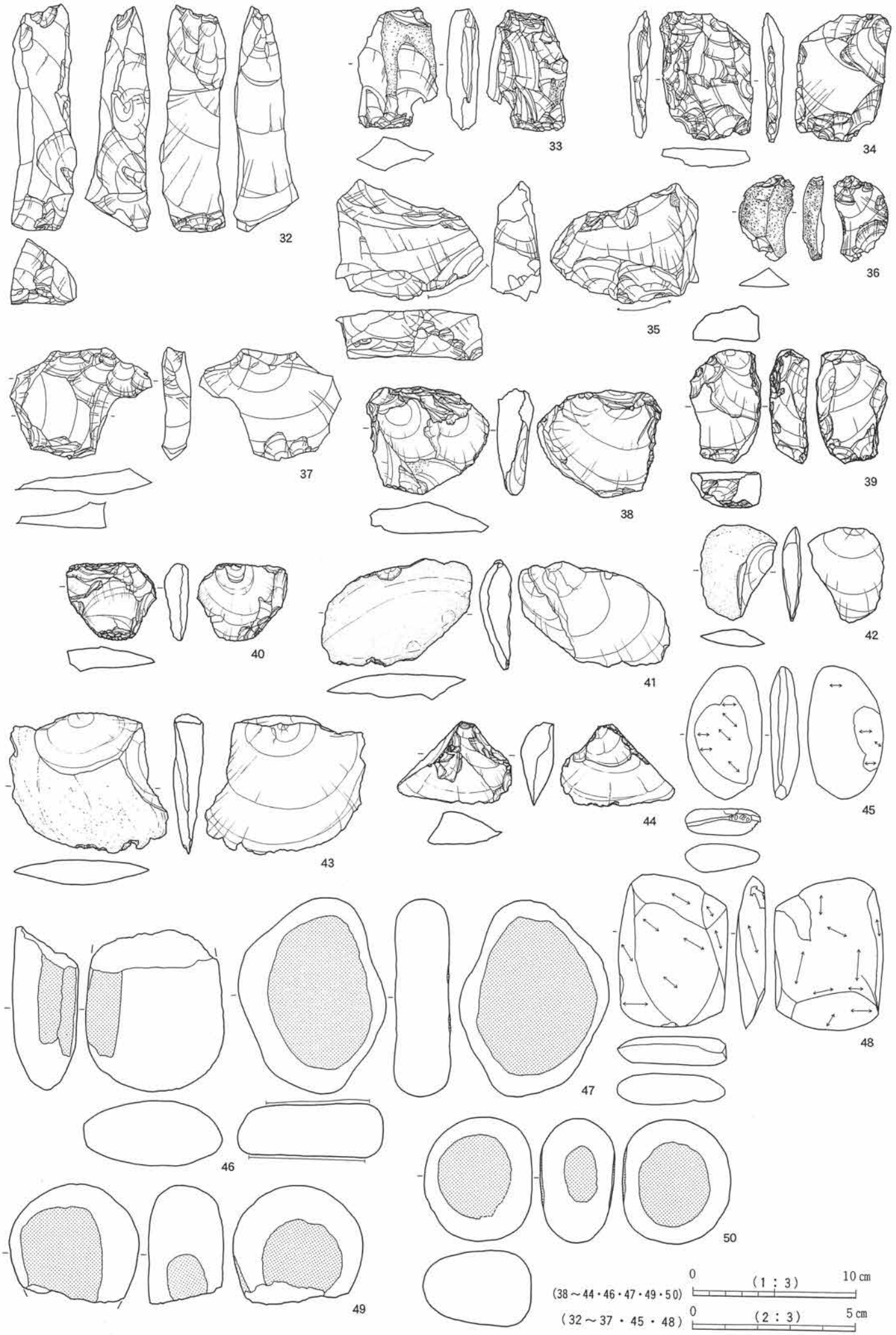

67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
110
111
112
113
114
115
116
117
118
119
120
121
122
123
124
125
126
127
128
129
0 (1:4)(73・79・92・96・98) 10cm
0 (1:3)(その他) 10cm

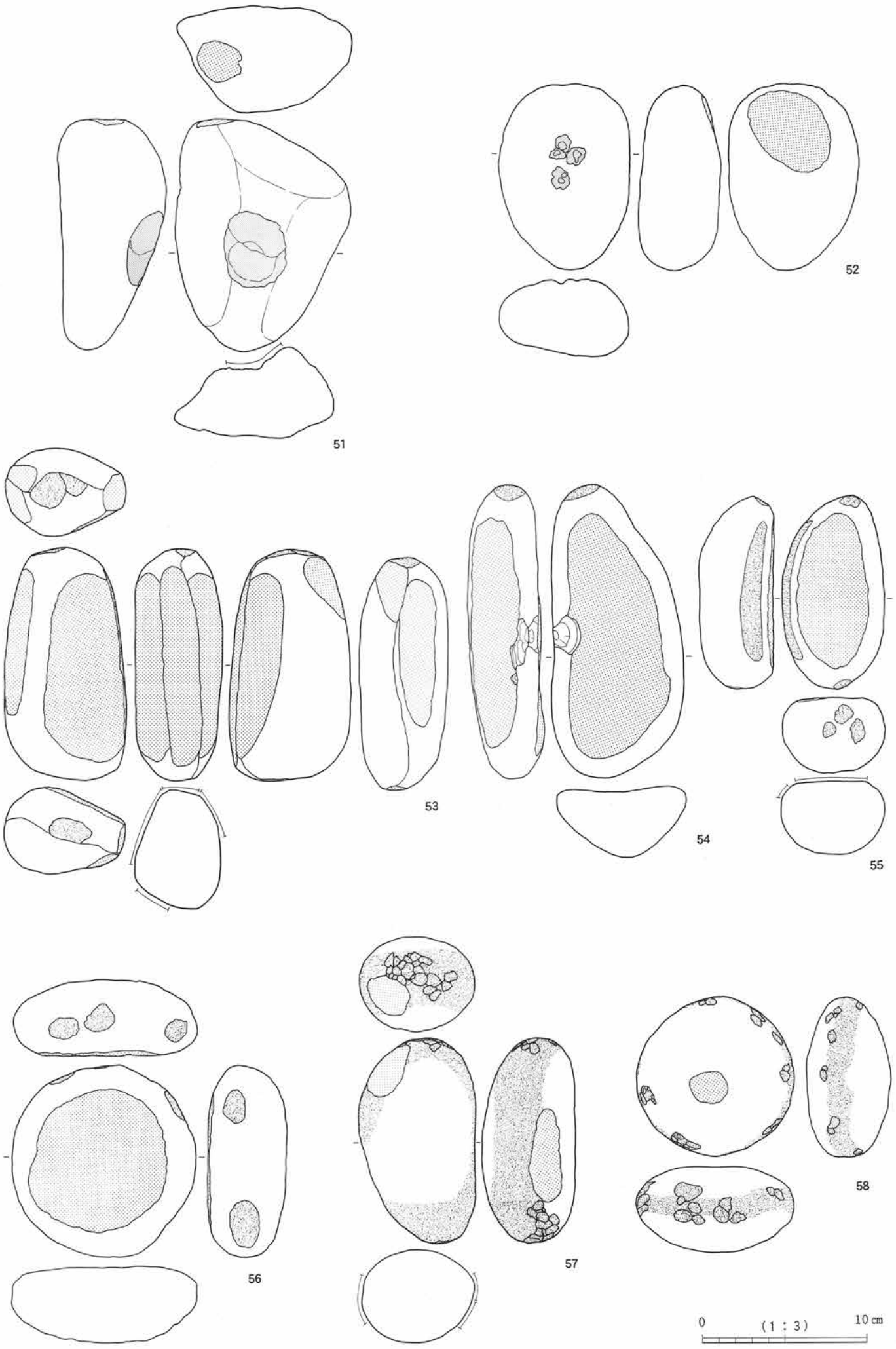

130
131
132
133
134
135
136
137
138
139
140
141
142
143
144
145
146
147
148
149
150
151
152
153
154
155
156
157
158
159
160
161
162
163
164
165
166
167
168
169
170
171
172
173
174
175
176
177
178
179
180
181
182
183
184
185
186
187
188
189
190
191
192
193
194
195
196
197
198
199
200
0 (1：4) (146・194・195) 10cm
0 (1：3) (その他) 10cm

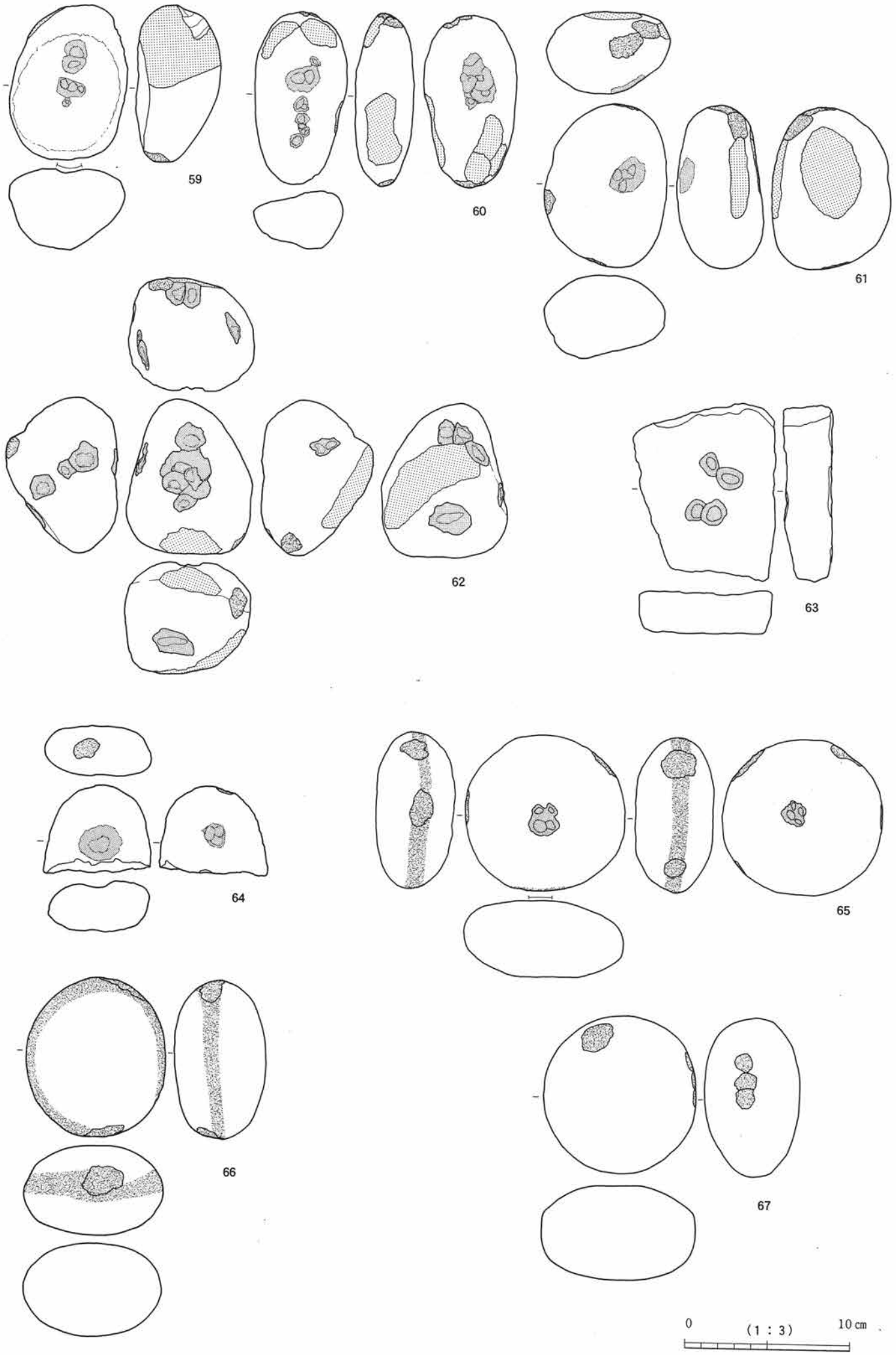

201
202
203
204
205
206
207
208
209
210
211
212
213
214
215
216
217
218
219
220
221
222
223
224
225
226
227
228
229
230
231
232
233
234
235
236
237
238
239
240
241
242
243
244
245
246
247
248
249
250
251
252
253
254
255
0 (1：4) (202～221・253・225) 10cm
0 (1：3) (その他) 10cm

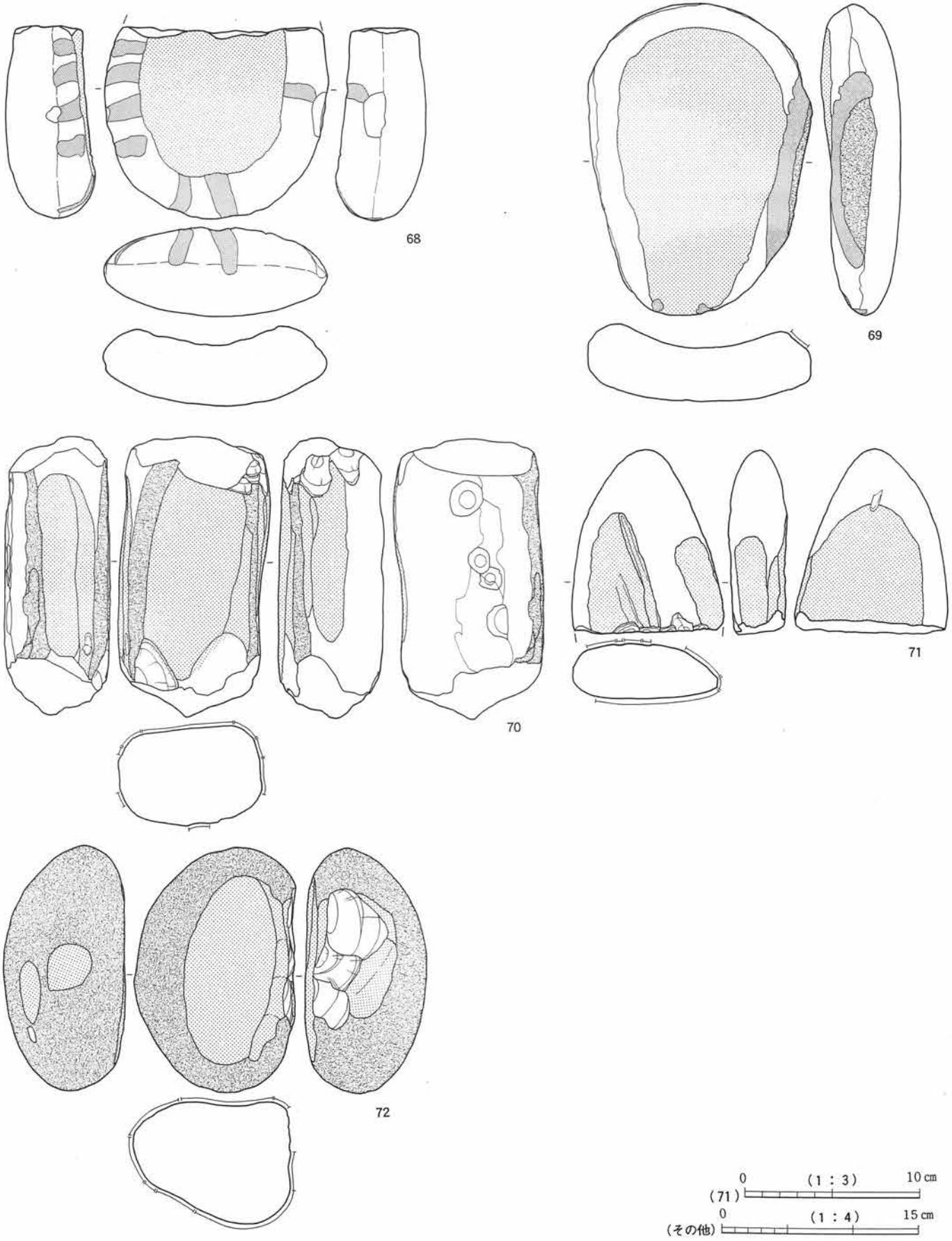

1
2
3
4
5
6
7
7a
7b
8
9
10
11
12
13
磨痕
敲打痕
凹痕
(4・7・7a・7b・8～13)
0
(1：3)
10cm
(1～3・5・6)
0
(2：3)
5cm

14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
0 (1:3)(14~16・18・24~27・29~31) 10 cm
0 (2:3)(17・19・20~23・28) 5 cm


32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
(38～44・46・47・49・50)
0
(1：3)
10 cm
(32～37・45・48)
0
(2：3)
5 cm

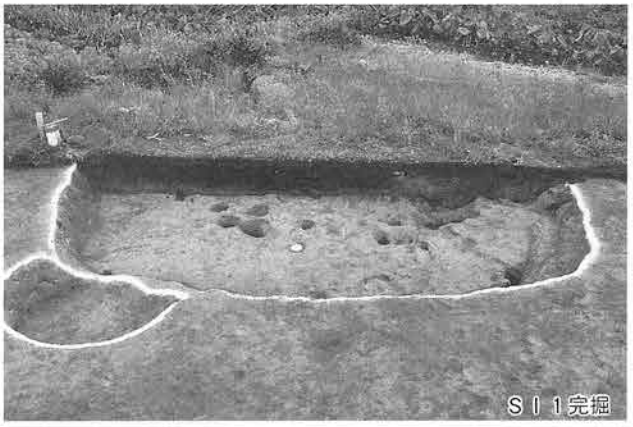

51
52
53
54
55
56
57
58
0
(1 : 3)
10 cm


59
60
61
62
63
64
65
66
67
0
(1 : 3)
10 cm


68
69
70
71
72
0
(1 : 3)
10 cm
(71)
0
(1 : 4)
15 cm
(その他)

S I 1土層

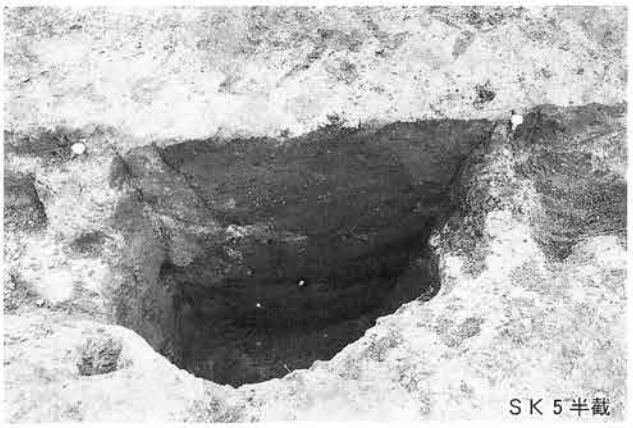
S I 1
遺物出土状況


S I 1完掘

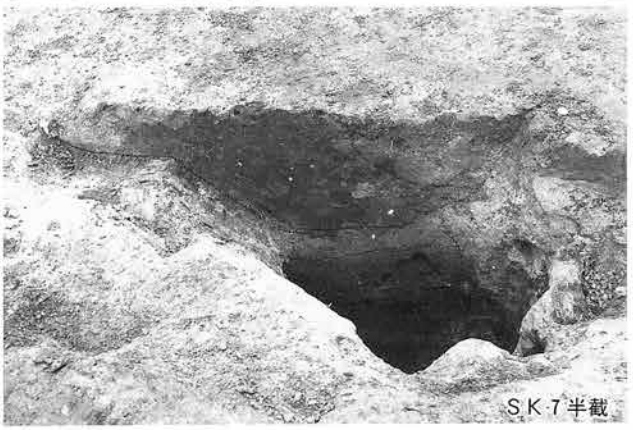
S I 1完掘（近景）

S I 1
砥石出土土坑
裁割

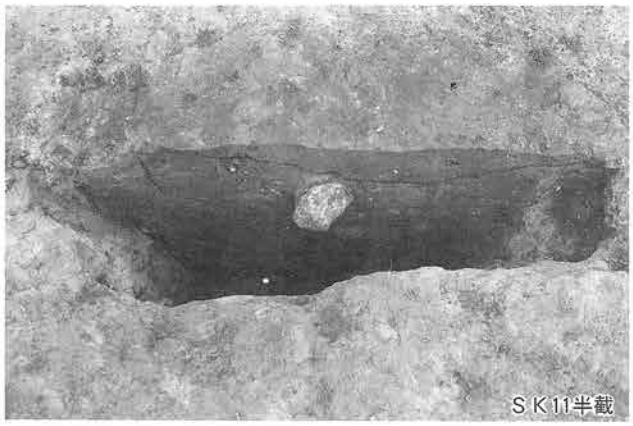
S I 1
砥石出土状況

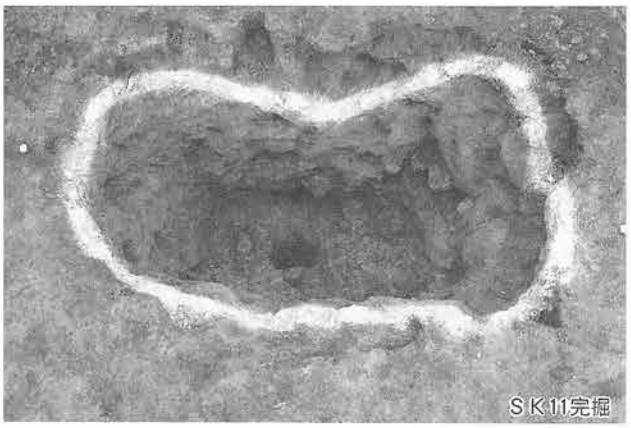

S K 5半截

S K 5完掘

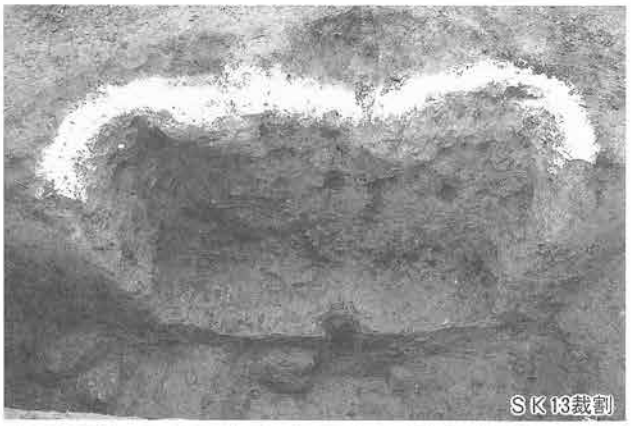

S K 7半截

S K 7完掘

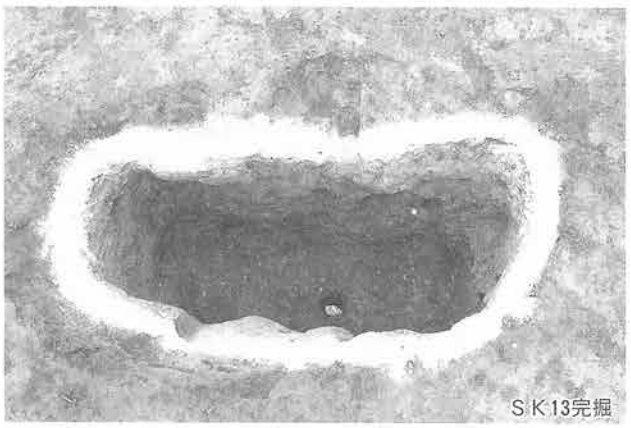

ＳＫ11半截


ＳＫ11完掘

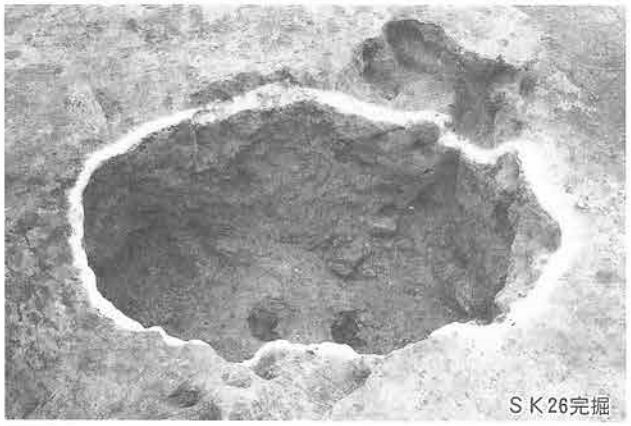
ＳＫ11裁割


ＳＫ13裁割

ＳＫ13半截

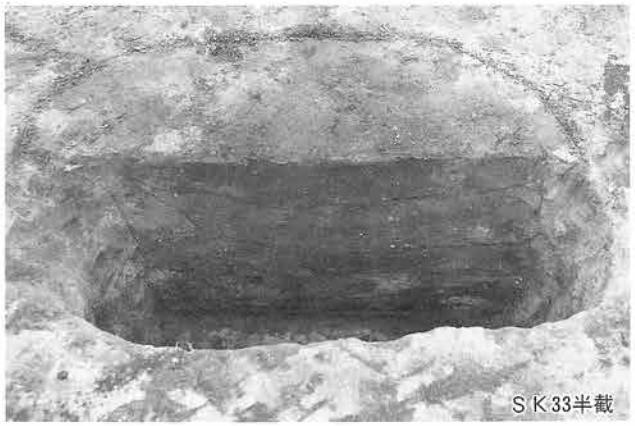

ＳＫ13完掘

ＳＫ26半截


ＳＫ26完掘

ＳＫ27半截

ＳＫ27完掘


ＳＫ33半截

ＳＫ33完掘

調査区全景
（南側から）

ＳＫ３完掘

ＳＫ６半截

ＳＫ６完掘

ＳＫ10半截

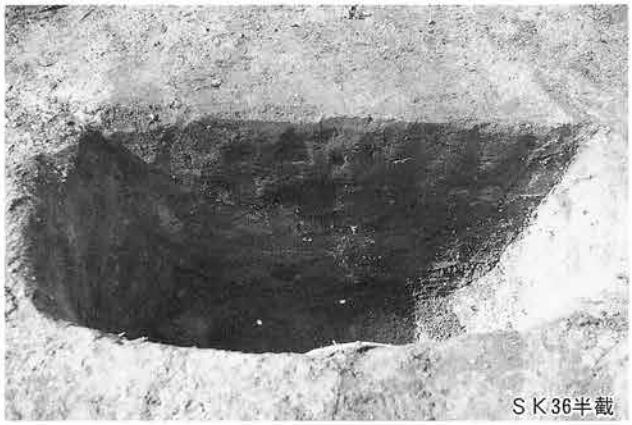
ＳＫ10完掘

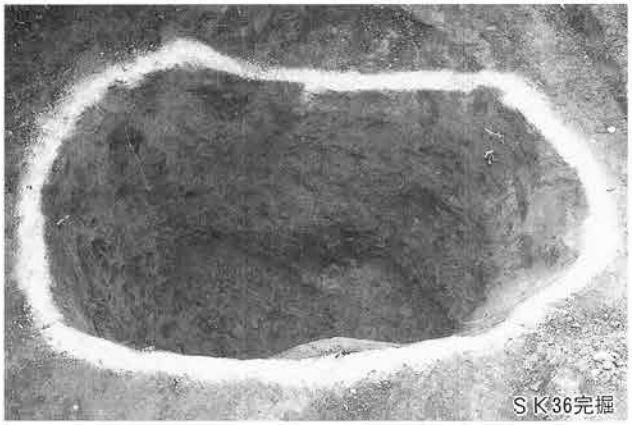
ＳＫ12半截

ＳＫ12完掘

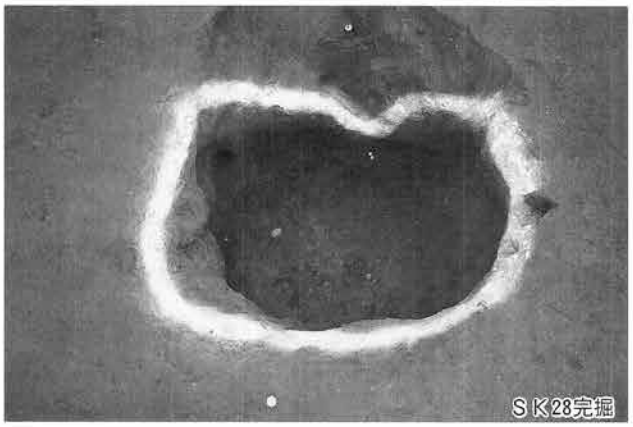
SK24半截

SK24完掘


SK36半截


SK36完掘

SK28半截

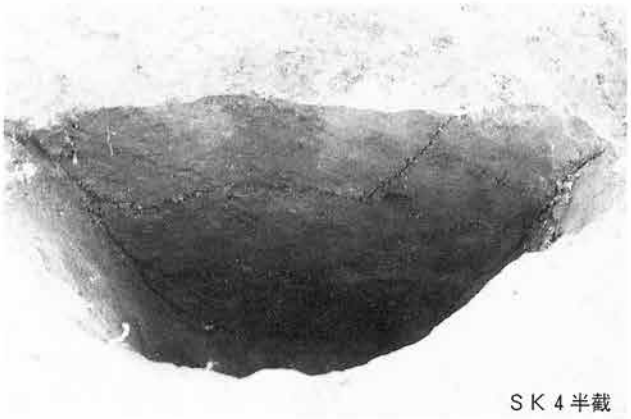

SK28完掘

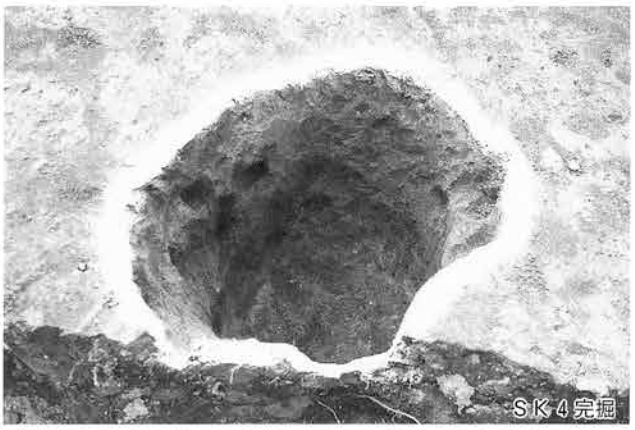
SK29半截

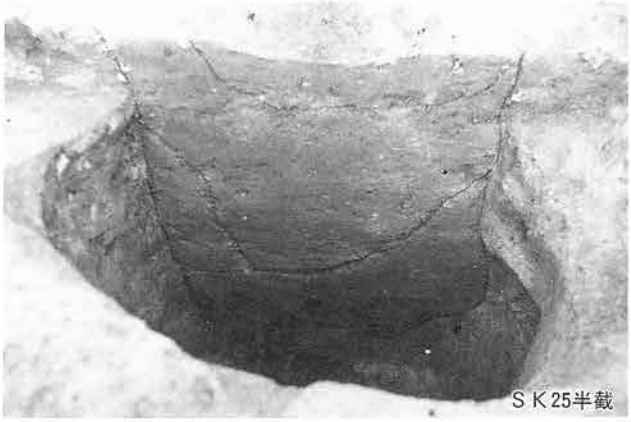
SK29完掘

SK32半截

SK32完掘


ＳＫ４半截


ＳＫ４完掘

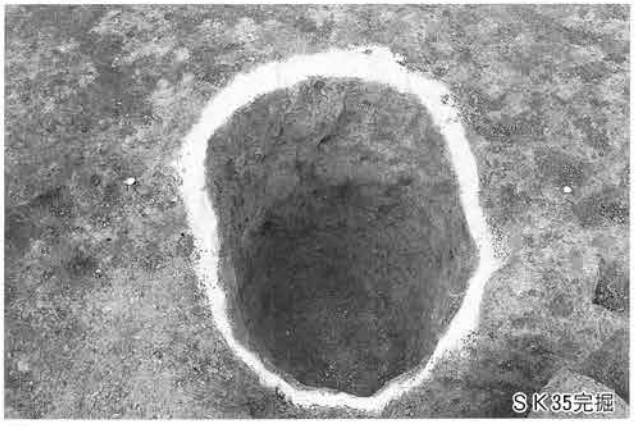

ＳＫ25半截

ＳＫ25完掘

ＳＫ34半截

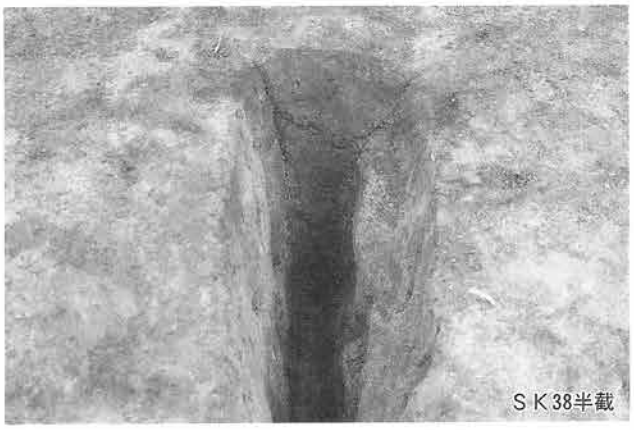
ＳＫ34完掘

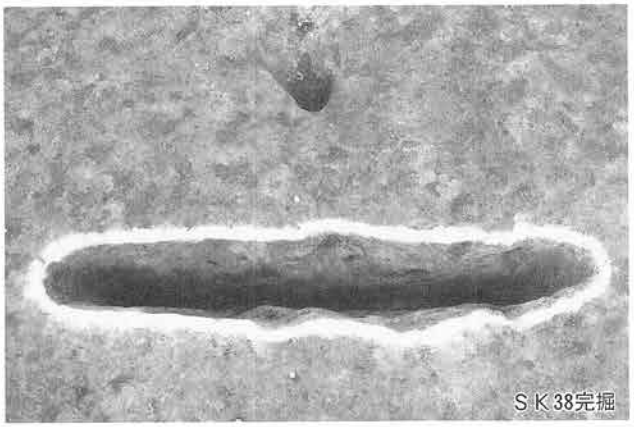
ＳＫ35半截


ＳＫ35完掘

ＳＫ37半截

ＳＫ37完掘


ＳＫ38半截


ＳＫ38完掘

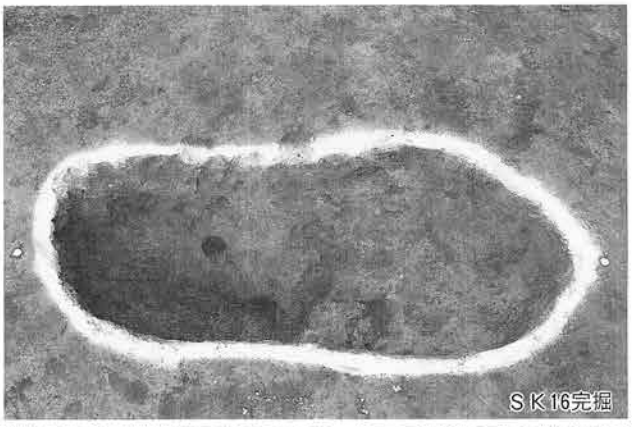
陥穴状土坑列
完掘状況

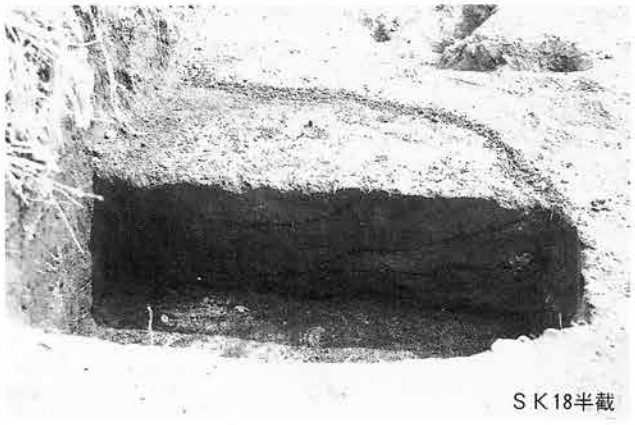
陥穴状土坑列
完掘状況

ＳＫ８半截

ＳＫ８完掘

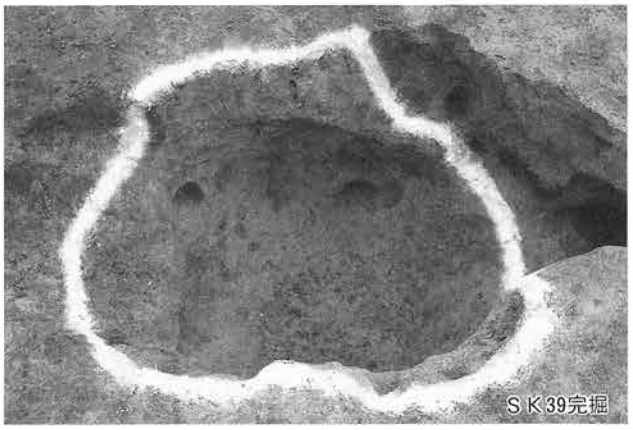
ＳＫ16半截


ＳＫ16完掘

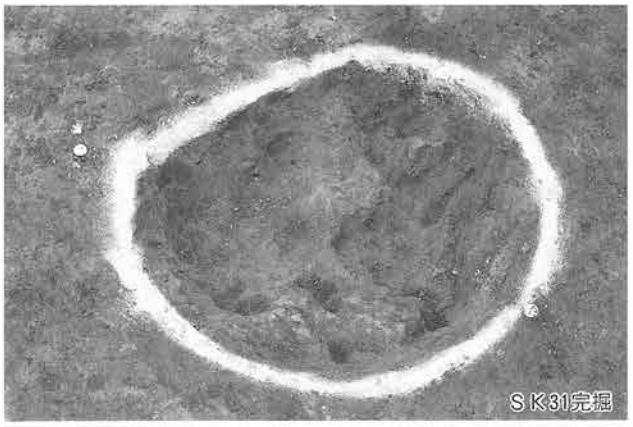

ＳＫ18半截

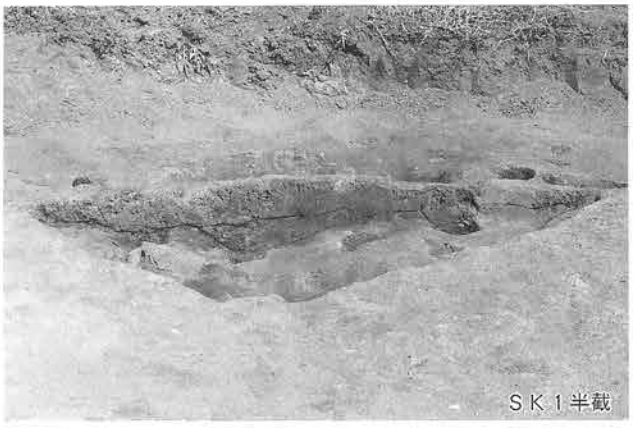
ＳＫ18完掘

ＳＫ39半截


ＳＫ39完掘

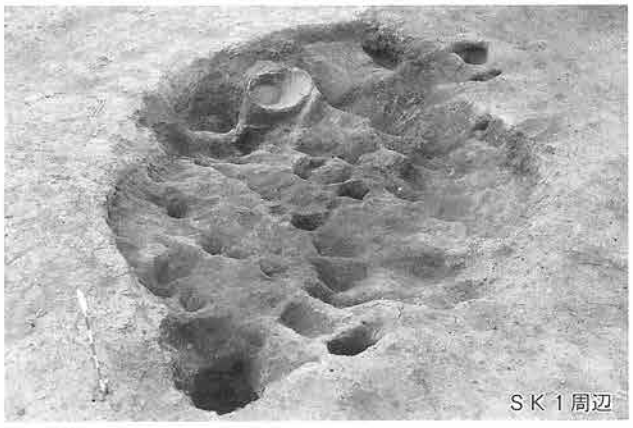
ＳＫ31半截

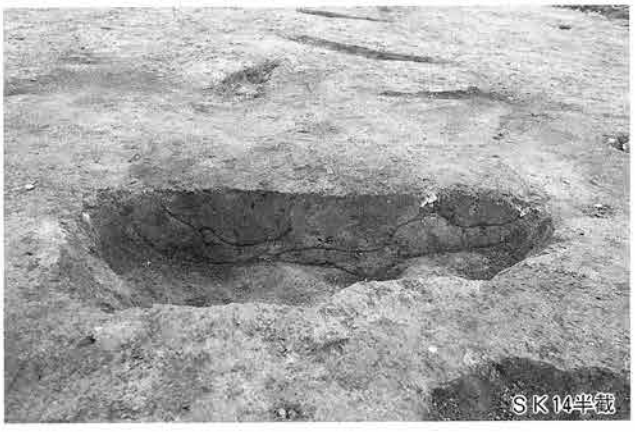

ＳＫ31完掘


ＳＫ１半截

ＳＫ１完掘

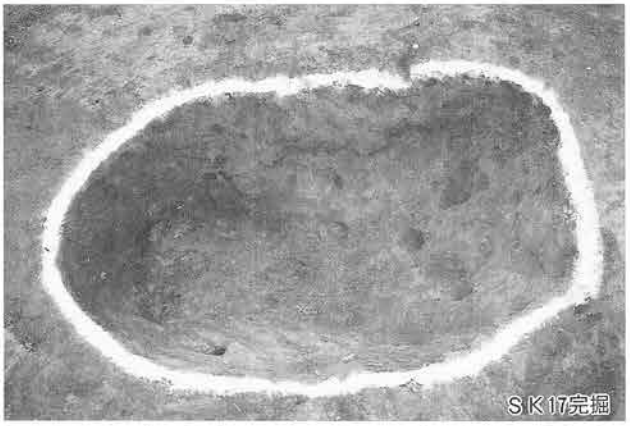
ＳＫ１
遺物出土状況

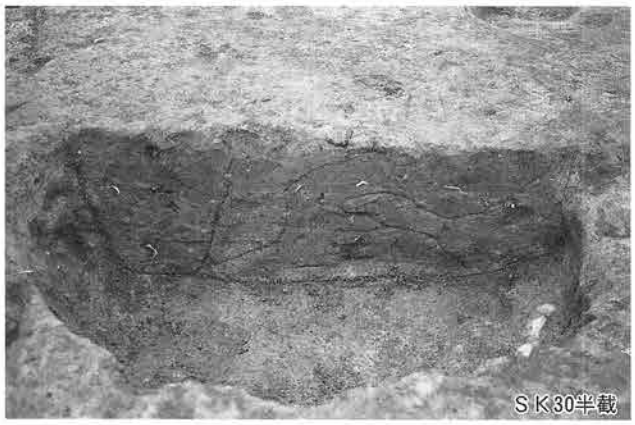

ＳＫ１周辺

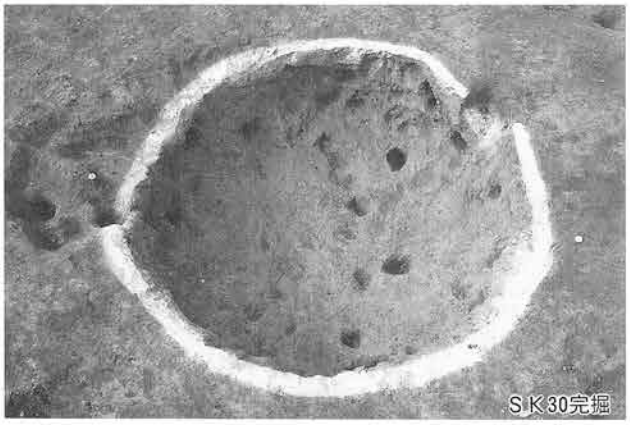

ＳＫ14半截

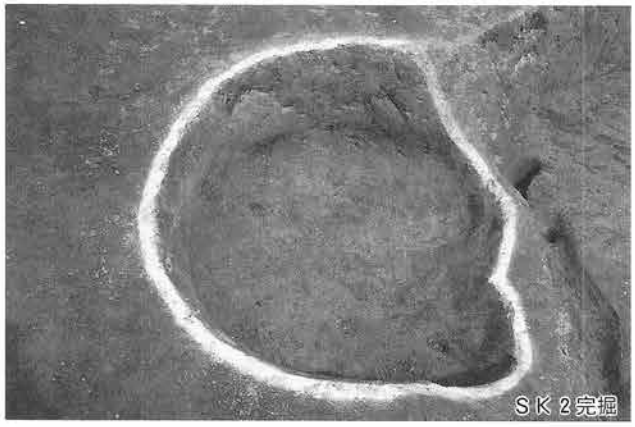
ＳＫ14完掘

SK17半截


SK17完掘

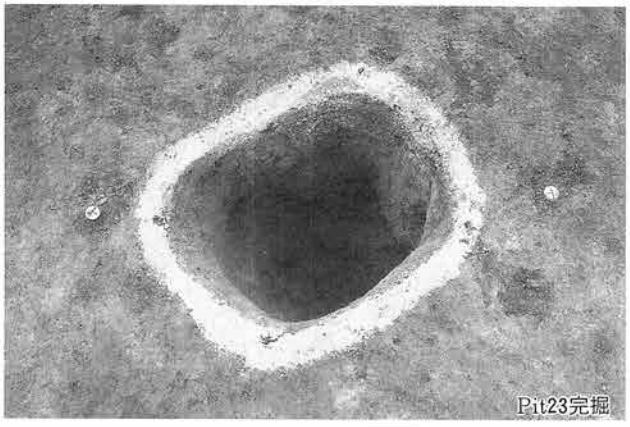

SK30半截


SK30完掘

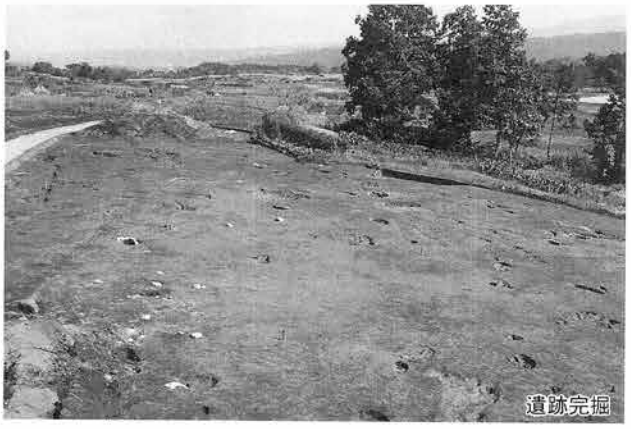

SK2完掘

SK21完掘

Pit2半截


Pit23完掘

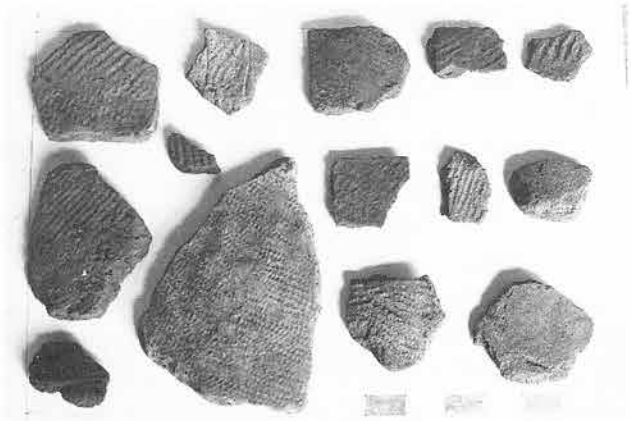
遺跡遠景

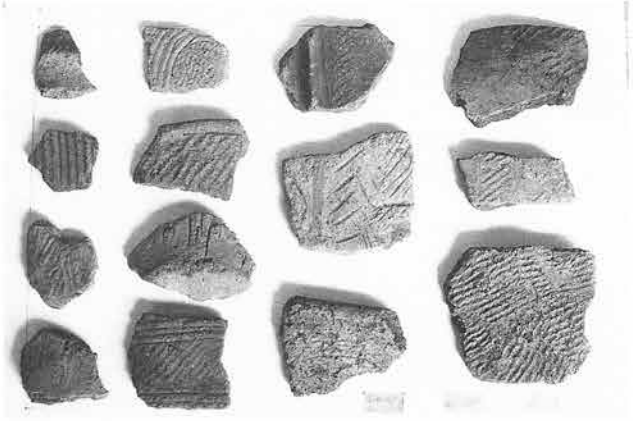

遺跡完掘

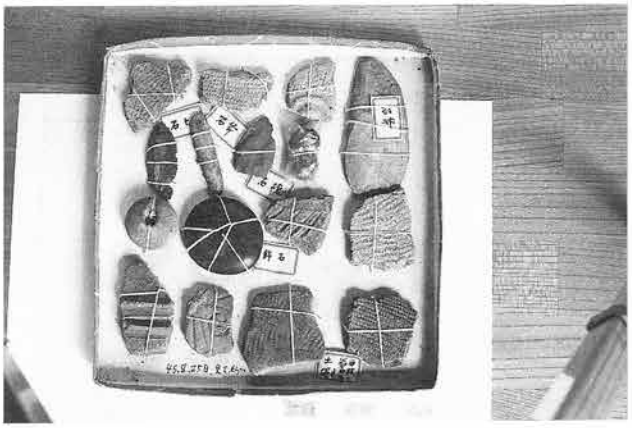
長峰遺跡
一次調査

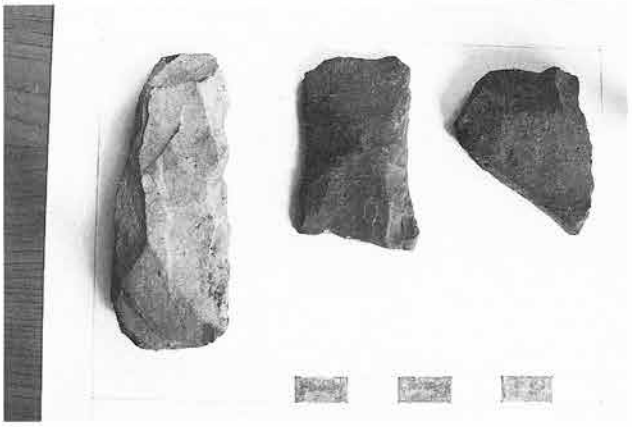
萩清水遺跡
近くの湧水

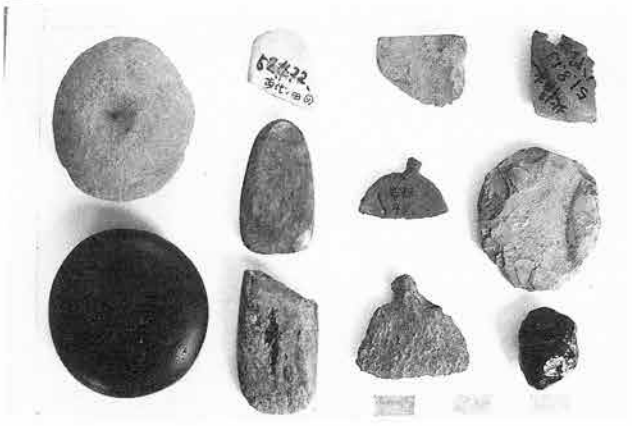
萩清水遺跡
表面採集品

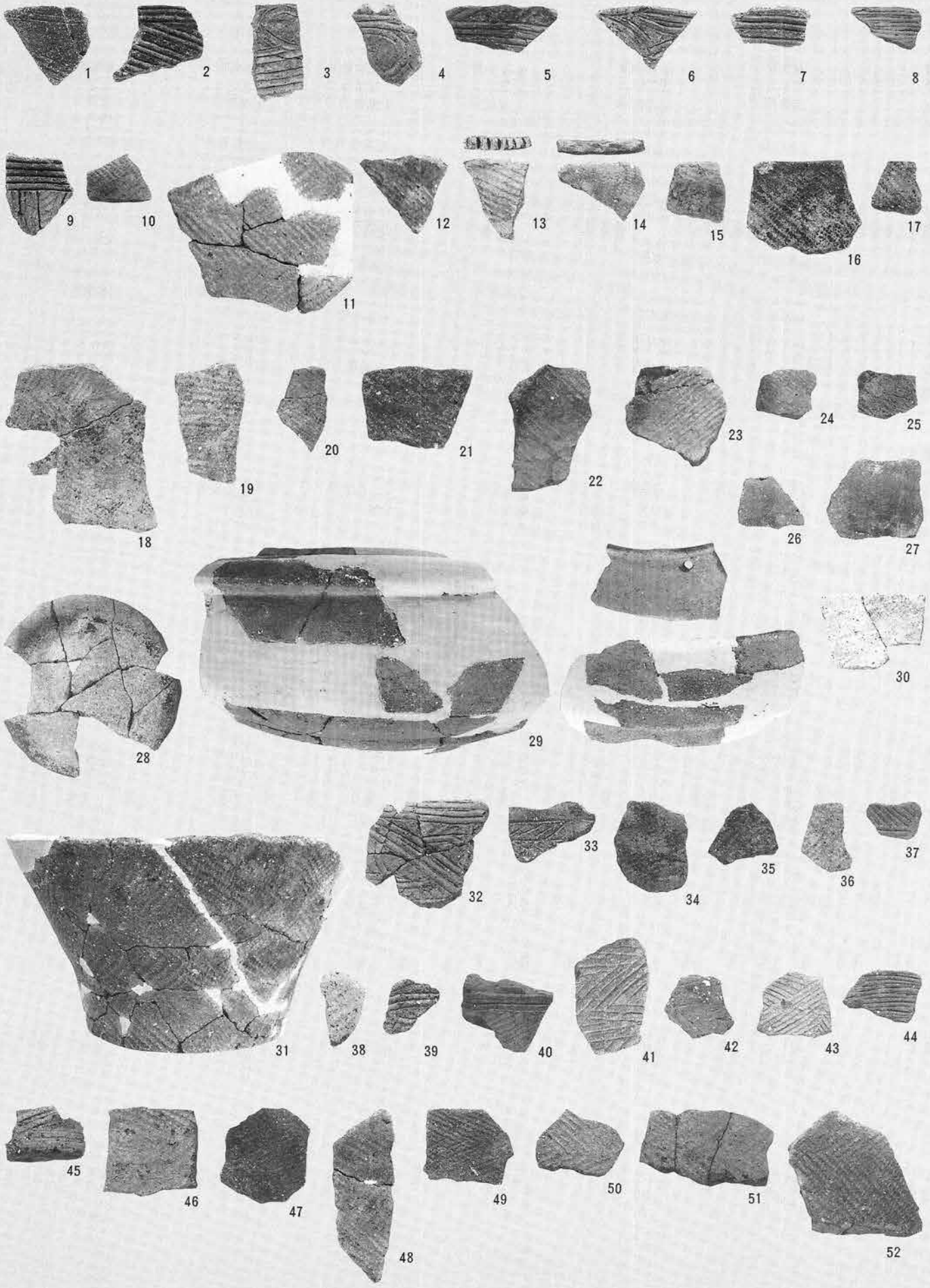




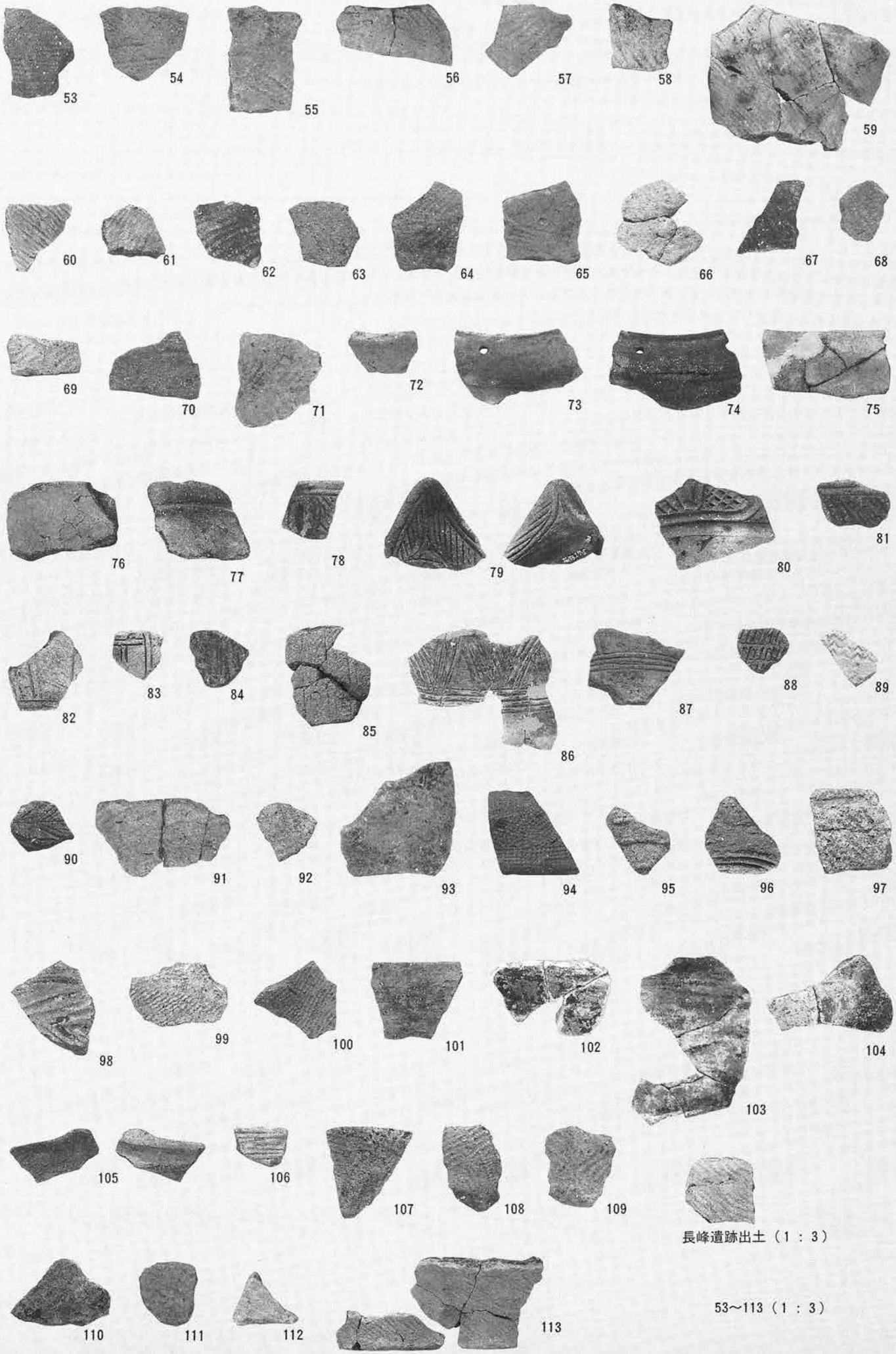








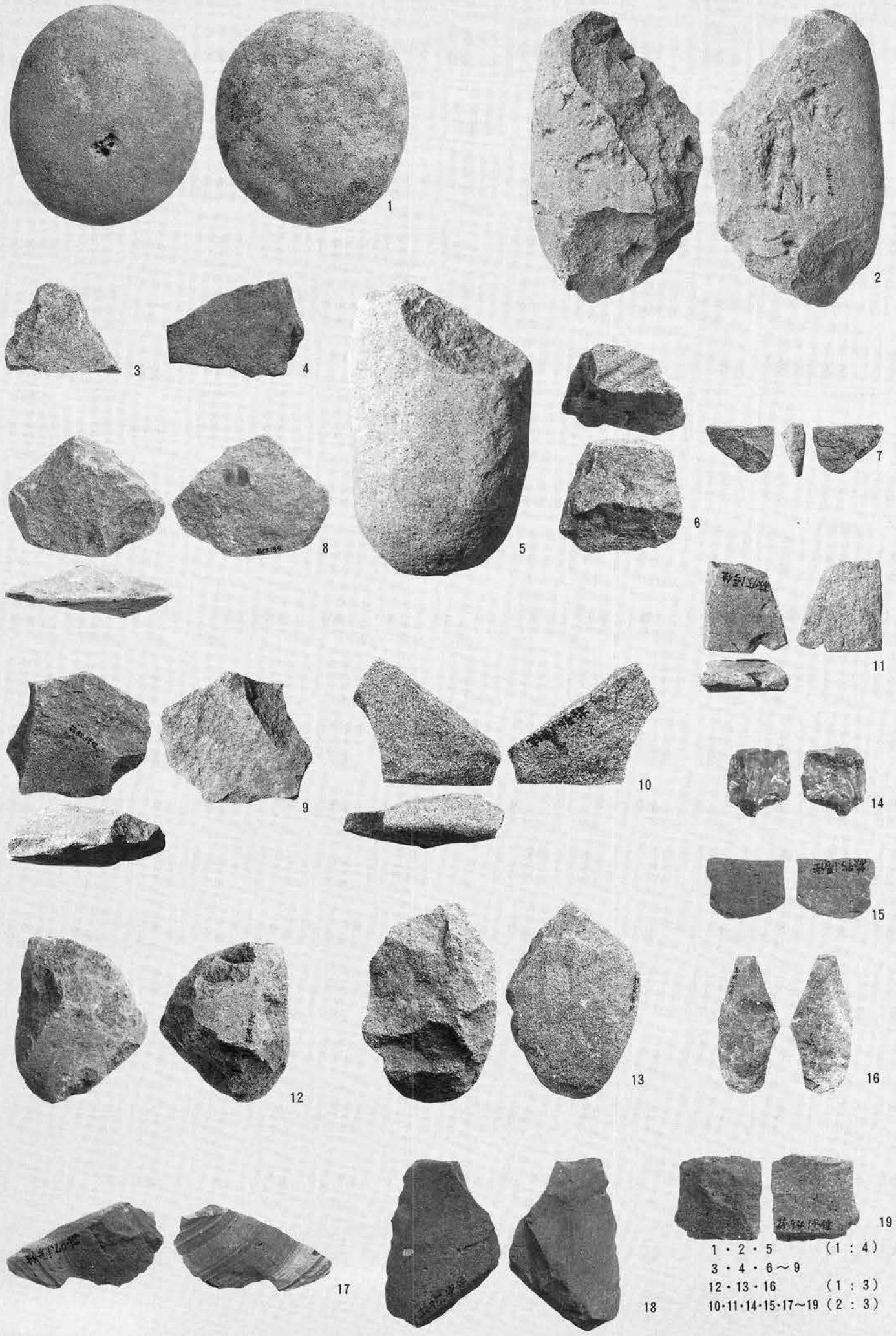
28・29・31（1：4）
その他　（1：3）



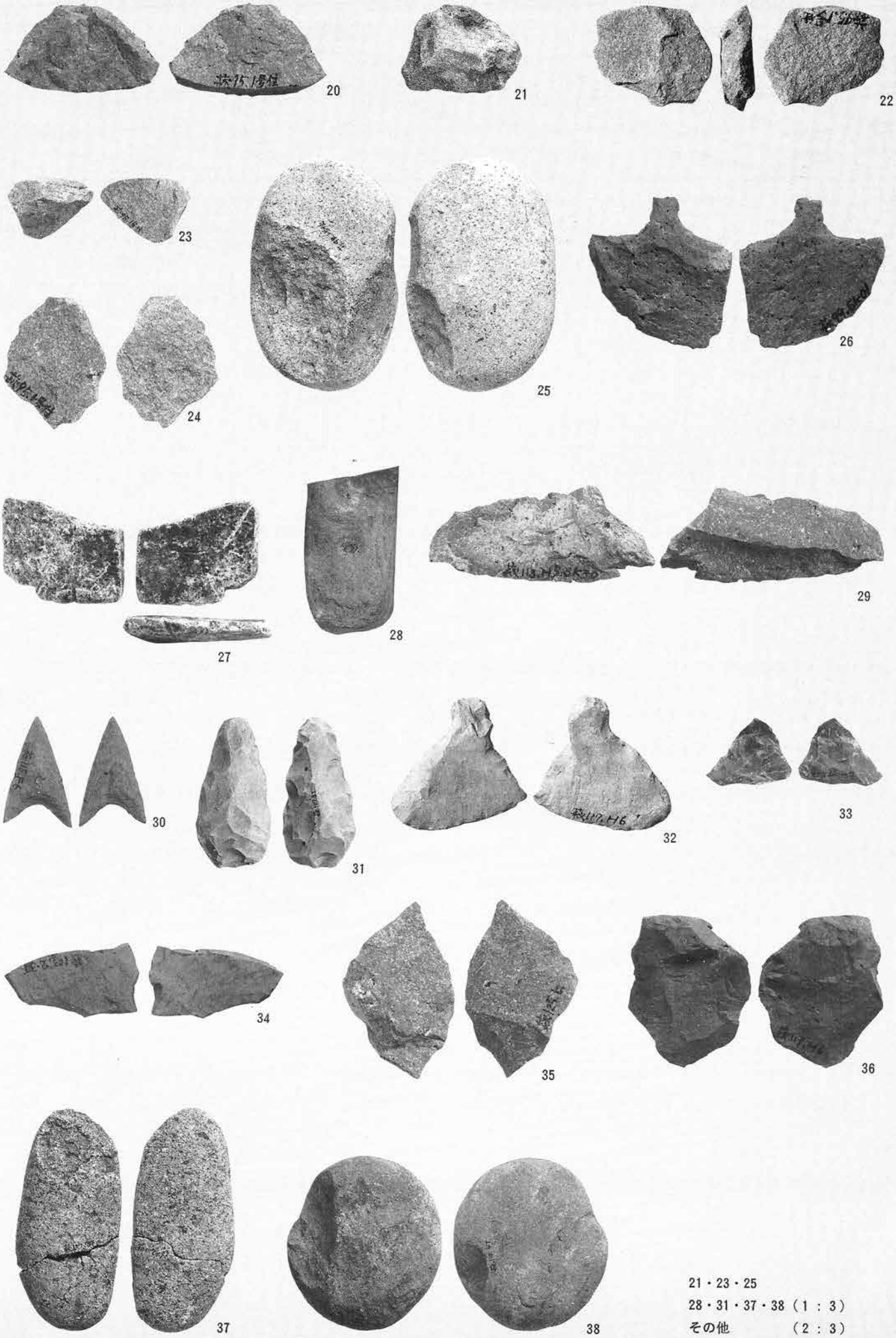
長峰遺跡出土（1：3）

53～113（1：3）

萩清水遺跡の縄文時代の石器(1)



1・2・5　(1：4)
3・4・6～9
12・13・16　(1：3)
10・11・14・15・17～19 (2：3)



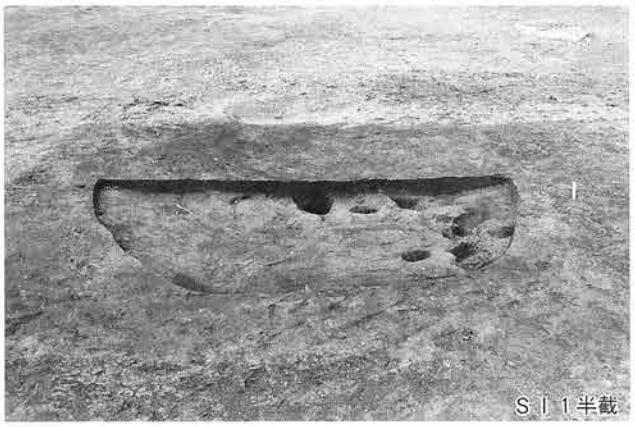
21・23・25
28・31・37・38（1：3）
その他　　（2：3）

ＳＩ７土層

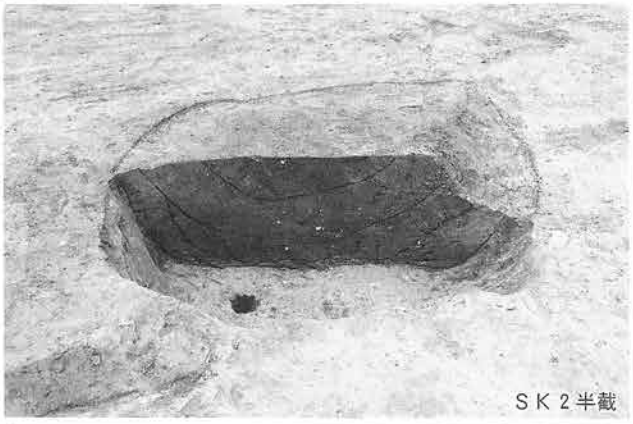
ＳＩ７完掘

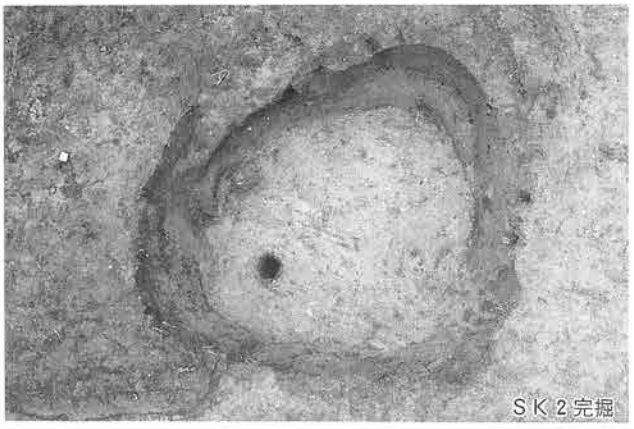
ＳＫ６半截

ＳＫ６完掘

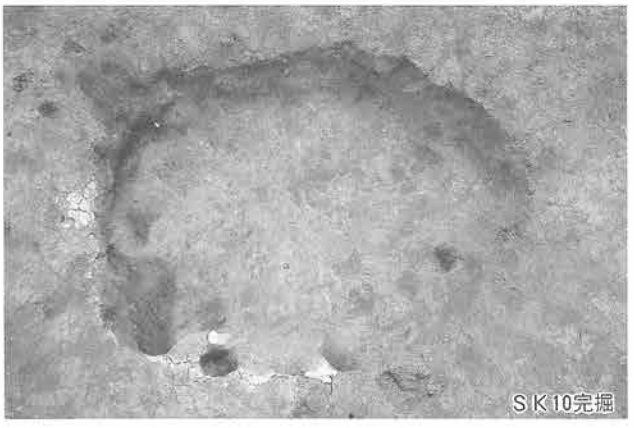

ＳＩ１半截

ＳＩ１完掘

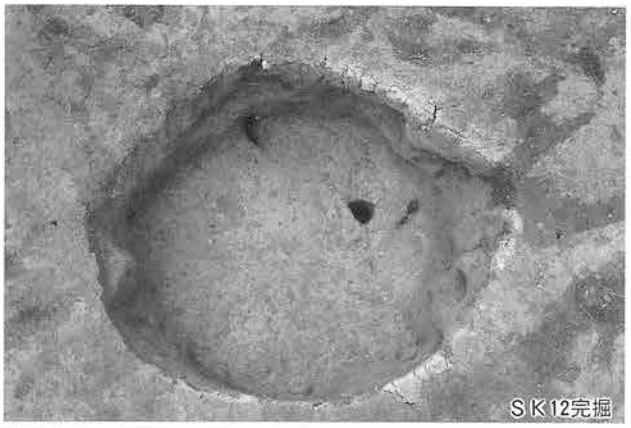

ＳＫ２半截


ＳＫ２完掘

ＳＫ10半截


ＳＫ10完掘

SK11半截


SK12完掘

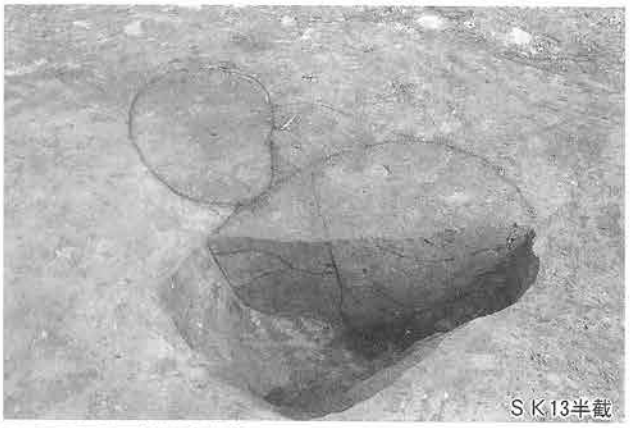
SK14半截

SK14完掘

SK15半截

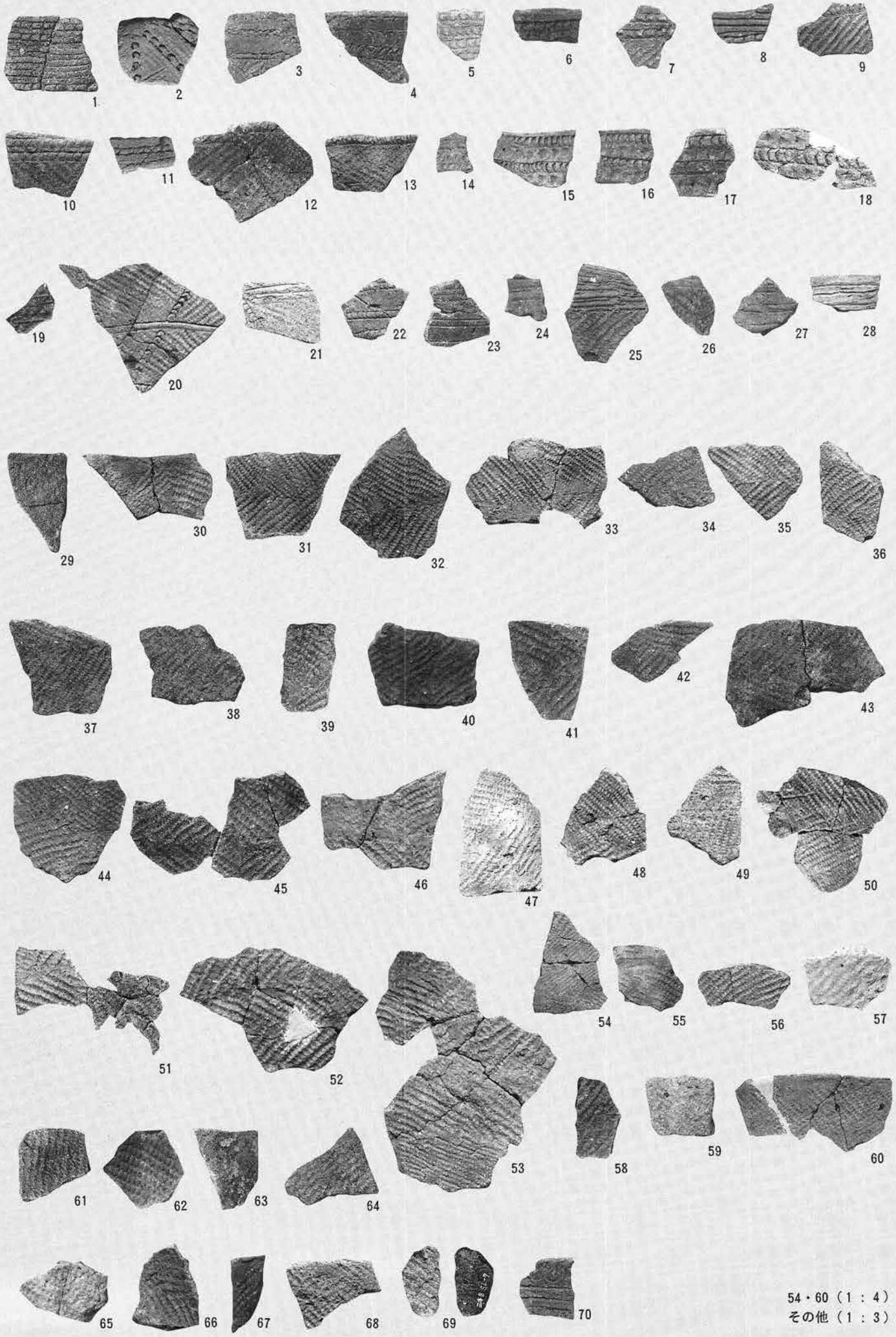
SK15完掘

SK 5完掘

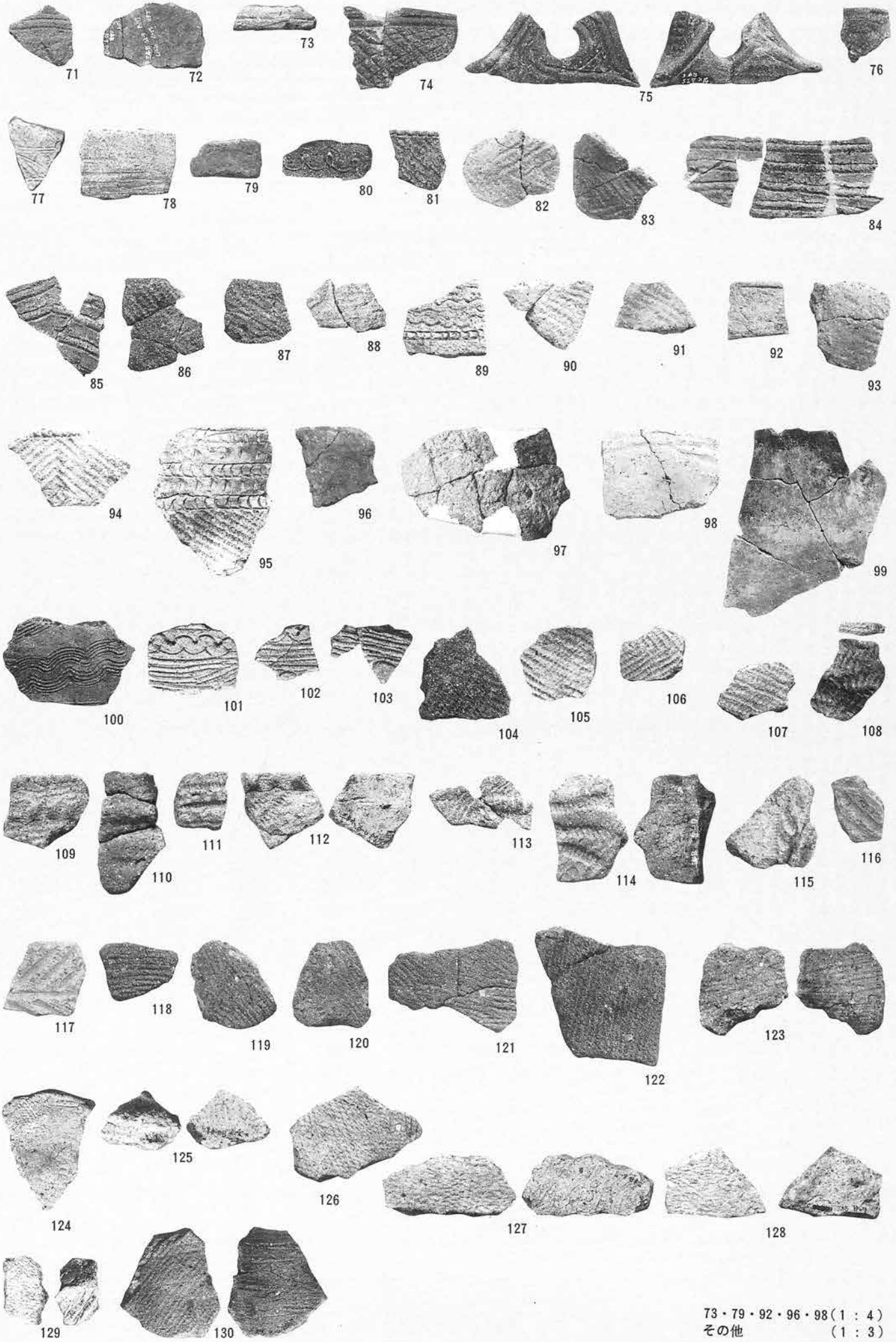

SK13半截

遺跡全景

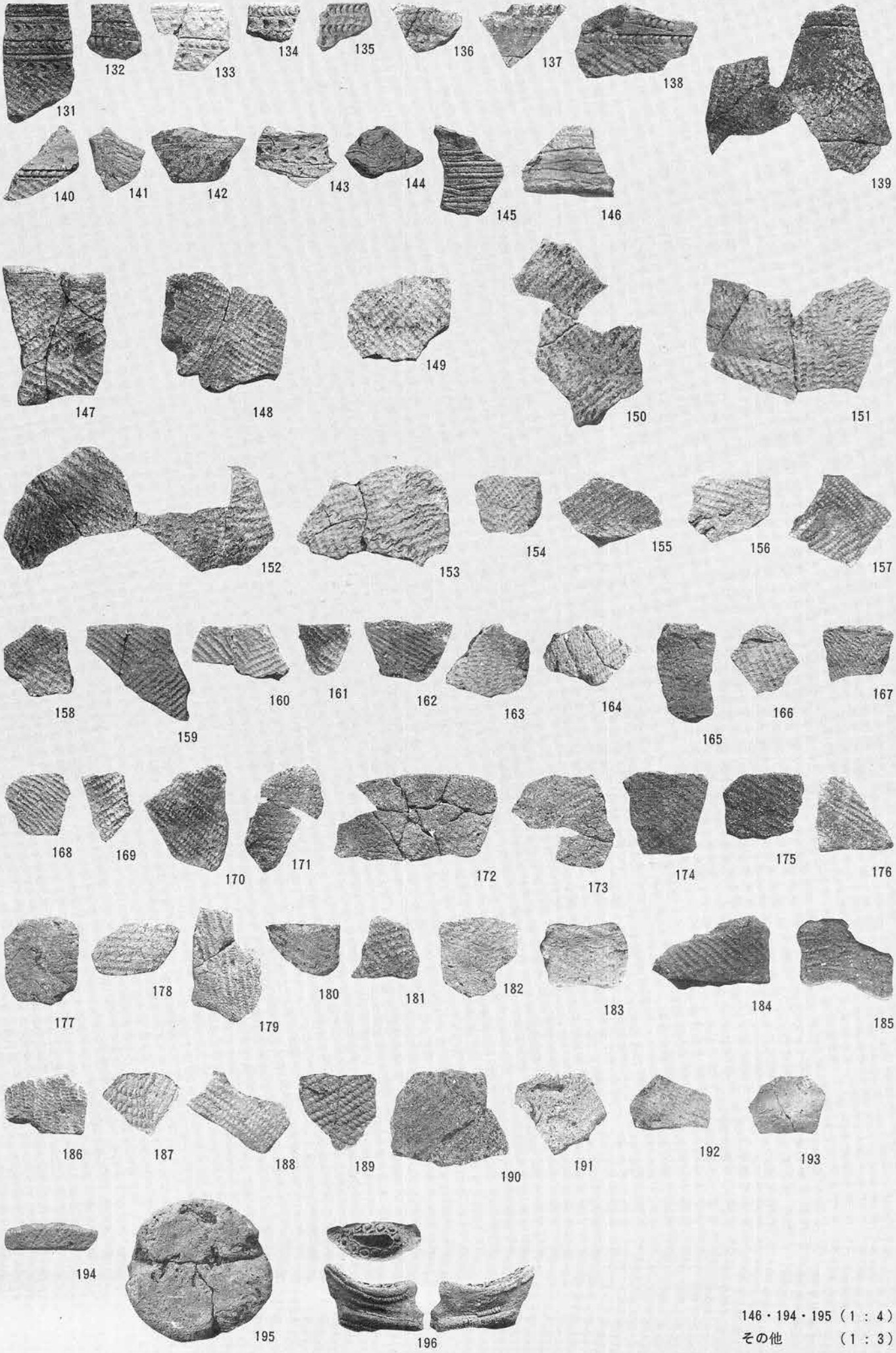
調査風景



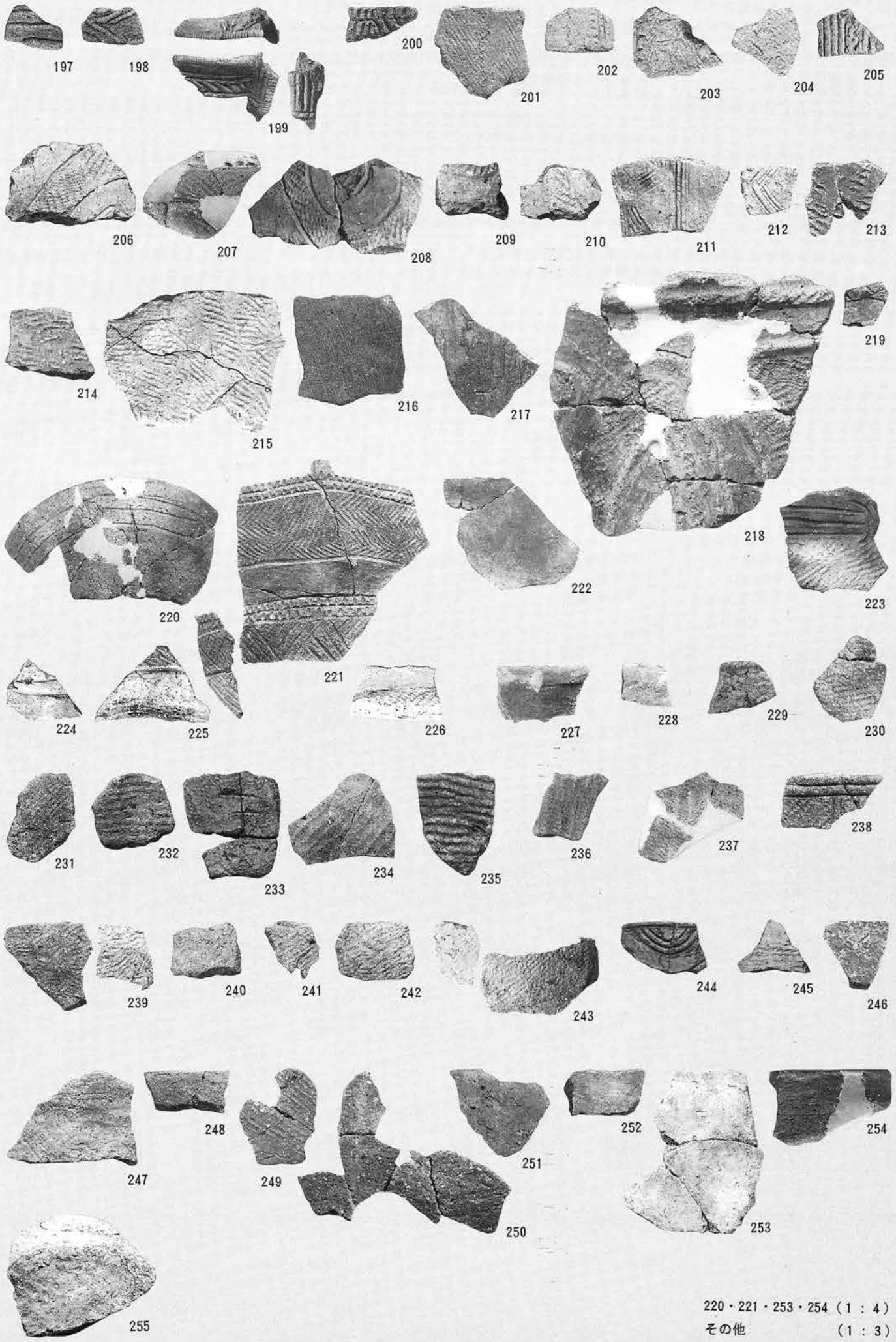
54・60（1：4）
その他（1：3）



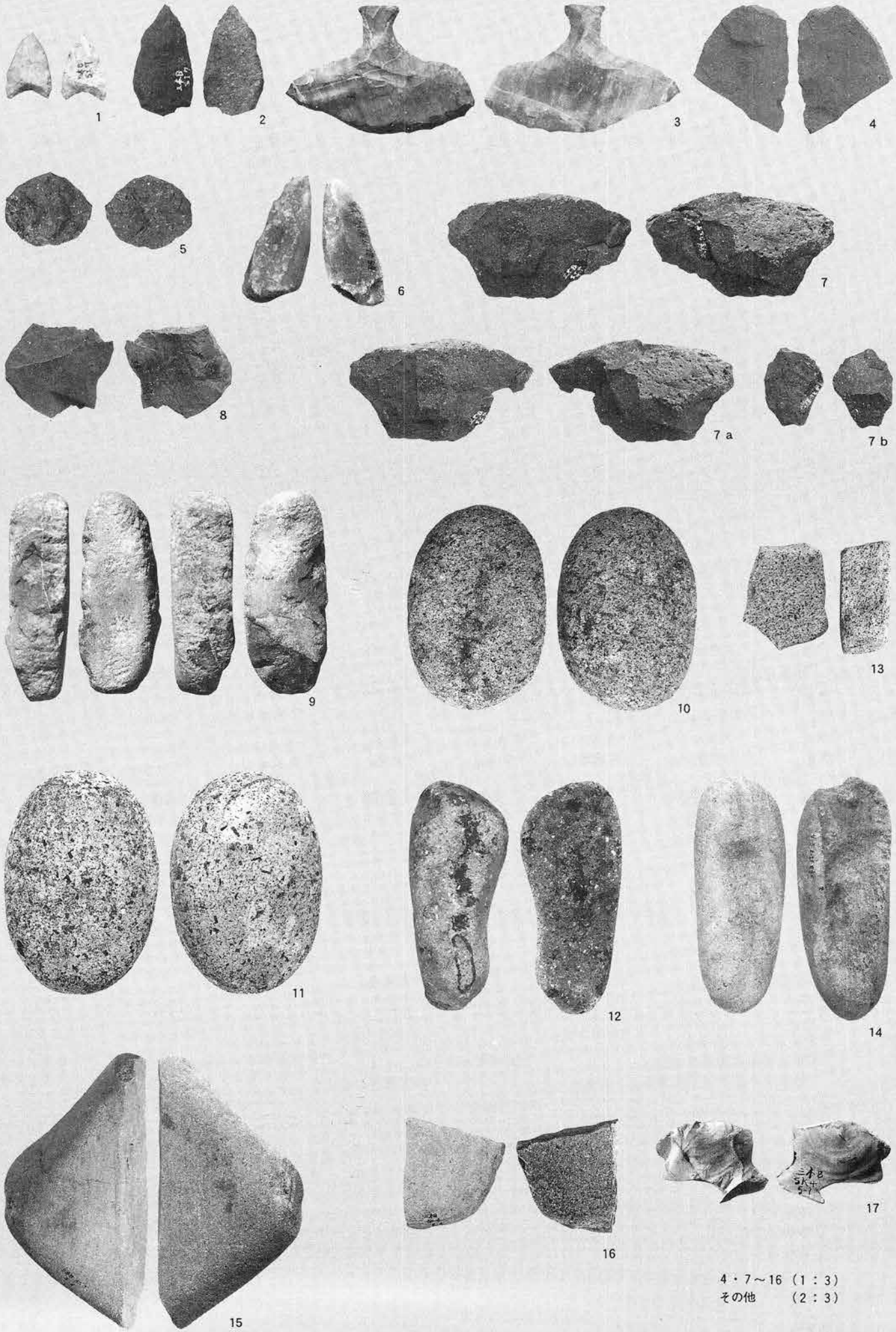
73・79・92・96・98（1：4）
その他　　（1：3）



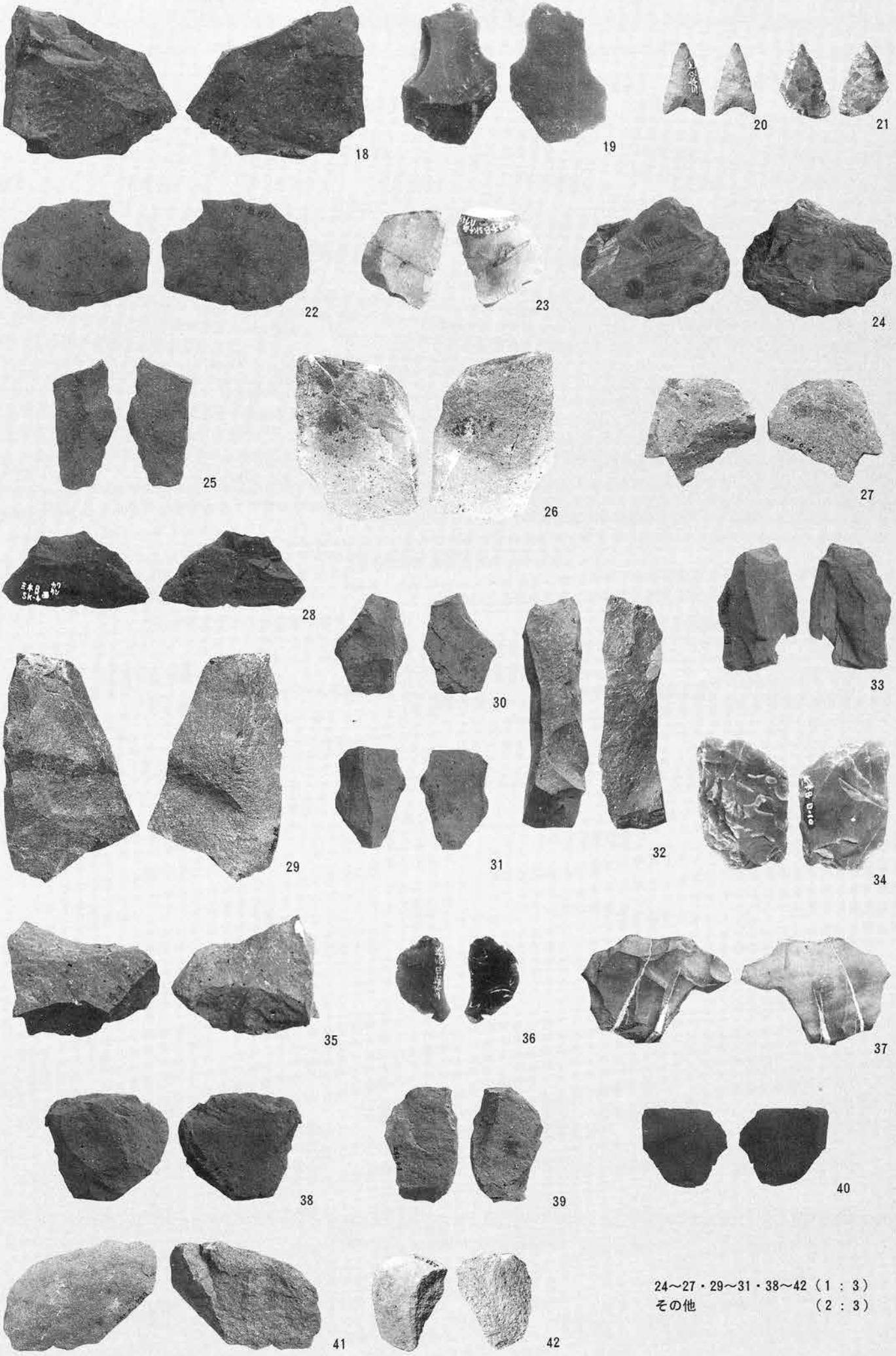
146・194・195（1：4）
その他　　（1：3）



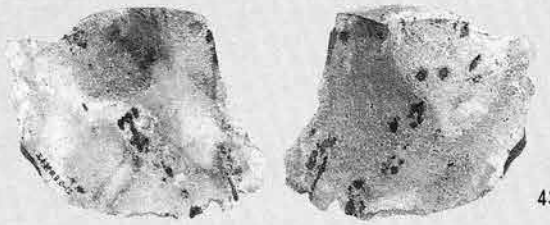
220・221・253・254（1：4）
その他　　（1：3）

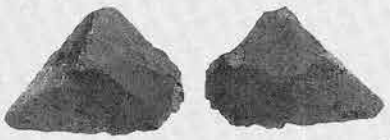


4・7～16（1：3）
その他　　（2：3）



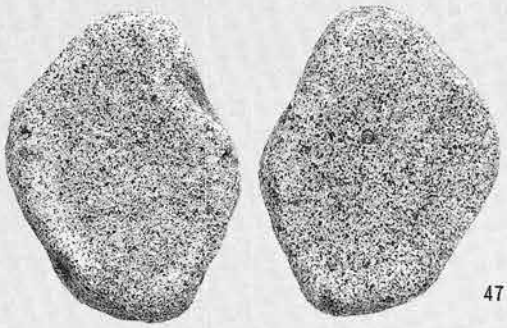
24～27・29～31・38～42（1：3）
その他　　（2：3）

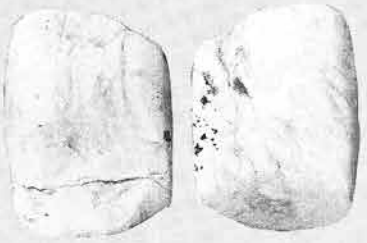

43

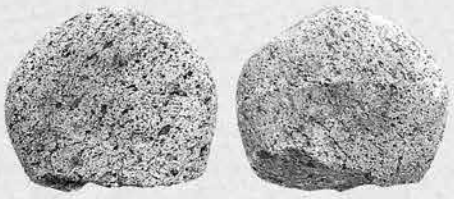

44

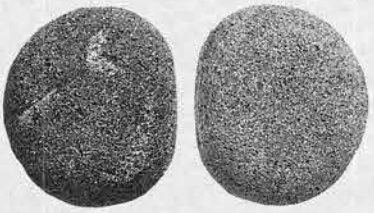
45

46

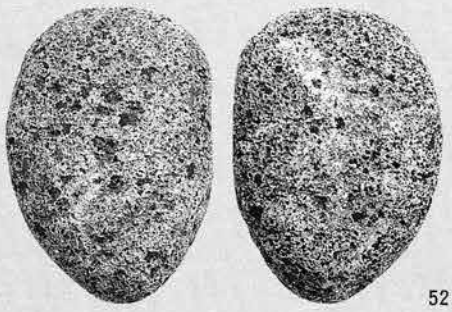

47


48

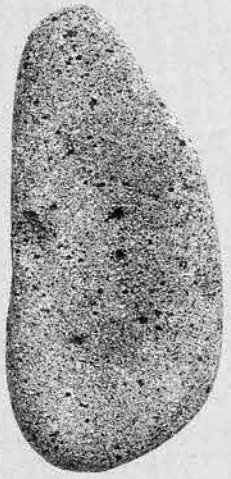

49


50

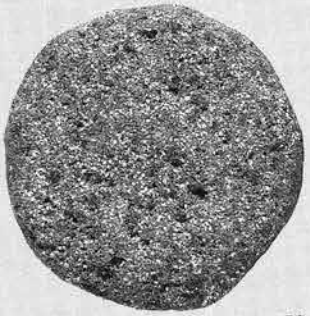
51


52

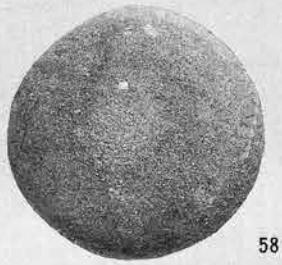
53


54

55


56

57

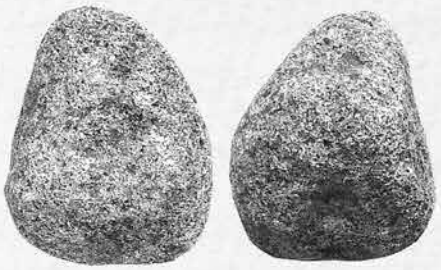

58

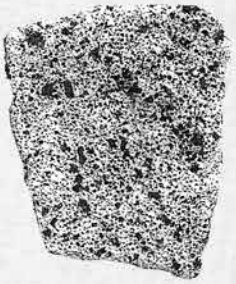
59

60

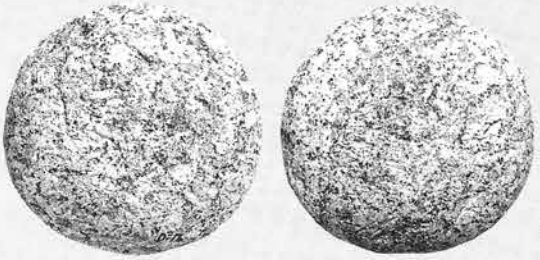
45・48（2：3）
その他（1：3）

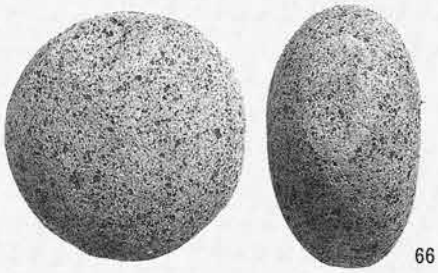
61


62

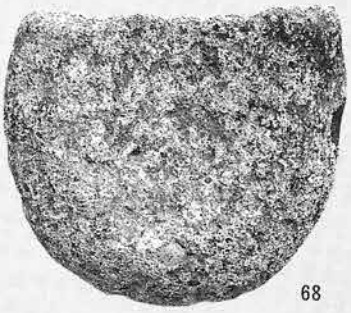

63

64

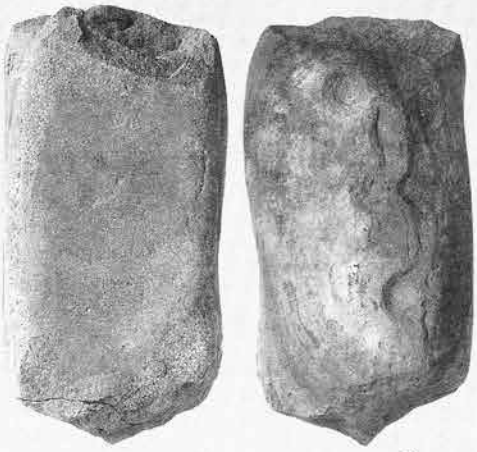

65

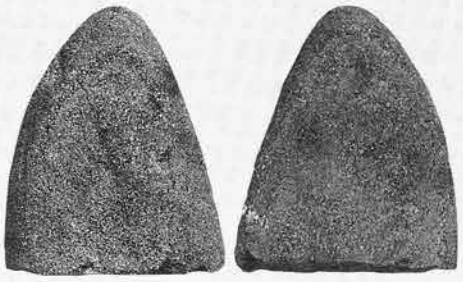

66

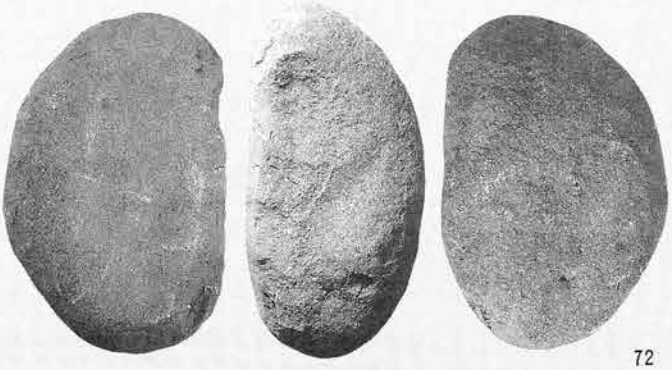
67


68

69


70


71


72

61～67・71（1：3）
68～70・72（1：4）

報告書抄録

ふ り が な	はぎしみずいせき・さんぼんぎしんでん B いせき
書　　名	萩清水遺跡・三本木新田B遺跡
副 書 名	上新バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ
シリーズ名	新潟県埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第83集
編 著 者 名	立木（土橋）由理子・寺崎裕助
編 集 機 関	財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
所　在　地	〒956　新潟県新津市大字金津93番地1　TEL. 0250（25）3981
発行年月日	1997年3月31日

所収遺跡名	所　在　地	コード 市町村	コード 遺跡	北緯	東経	調 査 期 間	調査面積	調査原因
萩清水遺跡（はぎしみず）	新潟県新井市三本木新田字萩清水9－1他（あらいしさんぼんぎしんでんはぎしみず）	15217	336	37度00分21秒	138度13分56秒	一次調査 19860823～19860907 二次調査 19860908～19861017	4,000㎡	一般国道18号上新バイパス建設に伴う事前調査
三本木新田B遺跡（さんぼんぎしんでんB）	新潟県新井市三本木新田字長峯559他（あらいしさんぼんぎしんでんながみね）	15217	337	37度00分11秒	138度13分47秒	一次調査 19860827～19860926 二次調査 19870818～19871020	8,650㎡	同上

所収遺跡名	種別	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
萩清水遺跡	集落跡	住居跡1基（縄文前期） 陥穴状土坑22基（縄文前期）	縄文土器・石器	新井市教育委員会が同遺跡の連続部分を調査している
三本木新田B遺跡	集落跡	住居跡2（3？）基（縄文前期） 陥穴状土坑1基（縄文前期）	縄文土器・石器	なし

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第83集

上新バイパス関係発掘調査報告書Ⅲ

萩清水遺跡（はぎしみず）・三本木新田B遺跡（さんぼんぎしんでんB）

平成9年3月26日印刷

平成9年3月31日発行

編集・発行　新潟県教育委員会
〒950　新潟市新光町4－1
電話　025（285）5511

(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956　新津市大字金津93番地1
電話　0250（25）3981
FAX　0250（25）3986

印刷・製本　北越印刷株式会社
〒940　長岡市福住1丁目6－27
電話　0250（33）0306

新潟県埋蔵文化財調査報告書　第83集 『萩清水遺跡 三本木新田B遺跡』 正誤表追加　　2018年11月追加

頁	位置	誤	正
抄録	三本木新田B遺跡　北緯	３７度００分１１秒	３７度００分０６秒

新潟県埋蔵文化財調査報告書第83集　『萩清水遺跡　三本木新田Ｂ遺跡』

正　誤　表

頁	行	正	誤
32	2	遺物はＢ群１類ｂの縄文土器（図版16－94・95）、Ｂ群５類の縄文土器（図版16－96）	遺物はＢ群５類の縄文土器（図版16－97）
32	6	Ｂ群５類土器（図版16－97）	Ｂ群５類土器（図版16－96）
34	19	ｅ．ＳＫ15	ｅ．ＳＫ14
34	21	ｆ．ＳＫ14	ｆ．ＳＫ15
35	5	16C	16O